
F / A フリーダムアドベンチャー 第三話 ここから飛び出そう！！

流都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F/A フリーダムアドベンチャー 第三話 ここから飛び出そう!!

【Nコード】

N1316M

【作者名】

流都

【あらすじ】

これは、若き冒険者達がLostと呼ばれる過ぎ去った文明の後に生まれた世界を、自分の夢と信念を持って駆け抜けた時代の物語。

モビス島で新しい仲間を迎え入れたロックとリカルは、宇宙に上がるための施設がある都市に入るが、他の冒険者とのいざこざからトラブルが発生。ついには搭乗式機動武器（RW）を持ちだしてのバトルに発展してしまいさあ大変。この状況、どう切り抜ける？

毎度おなじみ、何でもありの世界を走る冒険者達の活躍を綴ったアドベンチャーストーリー第三弾。退屈な毎日を振り切って、自分にしか出来ない冒険を探しにここから飛び出そう!!

ネコの激流者（前書き）

前回まで一話あたりの文章量が多かったため、今回から見やすさを重視するため一話あたりの連載方法を変えてみます。

ネコの激流者

「RW・パペットが合計4機、町の五キロ手前の荒野で仁王立ちだつて？」

「はいっス、ロックの坊主を差し出さなきゃ町を攻撃するってすごい剣幕っス」

壁に埋め込まれているスピーカーから聞こえる通信を聞きながら、オレは舌打ちを打つと連絡を取り合っている傭兵と傭兵隊長のバレルさんを見ながら、この工房の老主人に声をかける。

「じっちゃん、オレの相棒はもう動かせるのか」

「あん？誰に向かつて言つてやがる。整備は完全、すぐにでもバトルすること出来るわい」

老いてもなおその目に鋭い眼光を放つイヌ族の老主人が、怒り顔とも笑い顔ともとれる表情でこちらを見ると、彼は工房の奥から新品同様にピカピカに磨かれたパペットを作業員に運ばせてきた。どうよといった顔をしながら親指でパペットを指さす彼に笑顔を返すと、オレは工房の隅に止めておいたRB・チェイサーライディングビークルに飛び乗った。

チェイサーの起動キーを回してエンジンをかけると、PRSシテムが粒子を反応させて機体を浮かせる。そのままグリップ近くにあるボタンを操作すると、機体は更に高度を上げる。パペットのコクピット部分まで機体が浮き上がると、チェイサーは吸い込まれるようにその中に自動で入っていく。

「ユニットモードチェンジ、アーマー」

コクピットにチェイサーを収めてから別のボタンを押すと、チェイサーはその本体を液体の様に崩してオレの身体にまわりついてきた。一瞬で全身を包みこんだそれは、次の瞬間オレの身体にフィットした、大型のCAコンバットアーマーになる。

「おい、リープ、起きてるか。起きてたら返事しろ」

インカムのスイッチを入れて、この町で合流した相棒に連絡をつ

けると、しばらくしてから声のやや高い女性の、寝起きのせいなのか間延びした話し声がインカムから流れてきた。

「うう、ん。ロックか。全くなんだよ、人が気持ちよく寝てたつてのに」

「よし、起きたな。お前のデッカイ方の身体を動かすから、この通信回線経由してこっち来てくれ」

「なに、朝っぱらから戦闘かよ。オレお前につきあつてて全然寝てないんだけどよ」

「いいから早く来い。砲弾の雨が降ってきたら、そんな事言つてられねえぞ」

無理やり起こされて機嫌の悪い彼女にハッパをかけると、この場に来るように伝える。文句を言いながらも、自律式のコンピュータプログラムである彼女は通信回線から自分の意識を飛ばしてパペットのコンピュータの中に入ってくる。インカムのスピーカーからノイズが聞こえ、それと同時にオレの周りの計器類に光が灯っていく。

「来たぞー。動かす準備、一緒に手伝えよ」

コクピットのスピーカーから彼女の声が聞こえる。その声に応えながらオレもシートの隣のコンソールを操作しながらパペットの起動を行っていく。動く様になったパペットの両腕で、壁にかかっている専用の武器を手にしていく。ガレージのスタッフ達も床を鳴らしながら走りまわり機体の発進準備を手伝ってくれている。発進の準備が完了したのと、頭上の屋根が開いて、早朝の青空が視界に入ってきたのはほぼ同時の事だった。

「ハードウェア、ソフトウェア異常なし。パイロット生体認証完了。PRS展開、バーニアセット、稼働準備完了」

「打ち上げの準備は出来た、いつでも出ていいぞ」

「オーライ。エクストリーマーロック。エントリーRU、バトリングパペット、ランページキャット。ライド・オン！」

スタンバイ完了の合図を受けて、オレは操縦桿を思いきり引き込む。機体各所のPRSシステムが粒子を反応させ、全身が浮き始め

る。そのまま勢いを付けて上空に上がっていき、ガレージの外に出るとスロットを開いてバーニアに火を付ける。激しい轟音と震動を感じた後、オレの乗り込んだパペットは荒野に向かって飛翔していく。自分でまいた種を刈り取るために。

R o s tの世界で使われている機械類のほぼ大半は、先史文明の遺産を復元させた物や、残されていた設計図を元に今の人間達作り出した物であり、自分達で一から作り出された機械を使っているのは冒険者やそれに関わる機械屋達位である。そんな彼らでも自力で作ることが出来ない物がこの世界にはいくつかある。その中の一つが、戦う事を主眼に置かれた大型の搭乗式機動武器。その中の一つは、戦う事を主眼に置かれた大型の搭乗式機動武器。RWと呼ばれる種類の乗り物である。

1st ACTION 結成！L・D・C！（朝の一幕）

惑星トラメイ。ここは一つの大陸が、惑星が誕生した時のまま分断される事無く今日まで存在している惑星である。この星の自然の陸地全体の二割を占めるこの大陸の他は、太古の建造物などを繋ぎ合わせた無数の小さな島と、大陸から離れた所にある人口の空中都市群しか陸地と呼べるものは存在しなかった。

大陸には様々な遺跡があり、大小様々な大きさの町や村があった。その中でも一番大きな町が、宇宙船の打ち上げ用の施設を持ち、大陸のほぼ中央に位置しているため流通にも適している大陸の中枢とも言える街、ステップと言う交易都市である。

この交易都市を目指して、一隻の宇宙船が海の上をゆっくりとしたスピードで飛んでいた。夜明けと共に海上に停泊させていた船を離陸させると、ブリッジの操舵パネル前に立っていた黒髪のシャチ族の青年は、航路をコンピュータに登録してからブリッジを後にした。ブリッジを出た彼が船のやや後ろ寄りにある居住区内の食堂に入った時には、何人かのクルーがそれぞれに集まって小さな組を作りながら席についている光景が目に入った。朝食をトレイに乗せてからどこに座ろうかと辺りを見回した時、青年はある二人組の所で目を止めた。

他のクルー達は青年の様なシャチ族やアシカ族といった海洋種族に対して、その二人は頭から飛び出た大きな耳と細くしなやかなシツポに少しつり上がった目元、髪の色は一人は透き通るような金でもう一方は暗めの黄色、髪に対して少しくすんだ金色と、オレンジが少し溶けだした、ヒマワリの様な黄色の体毛。遠目に見れば似ているが、ネコ族の少年と獅子族の少女、違う種族の二人組である。

「お早うございます、オーナー、チーフ」

「お早うございますコーラル兄さん」

「お早うコーラルさん」

何かの本を読んでいる少年とコーヒーを飲んでいる少女。隣同士に座っている二人に挨拶をすると、コーラルは彼らの向かいの席に腰を下ろした。少年の名はロックと言い、少女の名はリーンカーラ、彼女は名前の長い自分の事をリンと呼ぶよう周りに言っているが、ロックだけは彼女の事をリカルと呼んでいる。この二人は冒険者^{ハンター}であり、特に少女はこの船の所有者でもある。

この二人は先日までコーラルの住んでいた島に滞在していたが、彼らと一緒に遺跡の中に入ったコーラルは、自分よりも年下でありながら確固たる信念を持っている二人に感化されて修行の旅に出る事を決意した。そして島を出る時、彼と一緒に旅をしたいと何人かが名乗りを上げ、それが大人数になったためどの様に活動しようか考えていた時、彼の祖父がその少年達と一緒にいけばいいと言ってきたので、コーラル初めその仲間達がこの船のクルーとなったのだった。

「今日は随分と早く出てきてますね。いつ頃お目ざめになられましたか？」

コーラルが話をしてきたのは、席について食事を始めてから少ししての事だった。ネコ科の種族はドライな性格が多いため、聞かれた事に対して答える位で用事が無ければ自分から話することはあまりないが、目の前の二人はなぜか人懐っこい性格をしているため誰とでも色々な話を話す。特にリカルは話がしたい時は話題があるうが無かるうが関係なしに言葉を並べてくる。だから二人揃って黙っている事が珍しかったので、今日は思わずコーラルの方から話を始めた。

「僕は昨日からずっと寝ていません」

「アタシも昨日はずっと起きてたわ」

そのコーラルの質問に、二人はほぼ同じタイミングで同じニュアンスの返事をしてきた。食堂中に声が響いたため、中にいた他のクルー達は思わず視線を三人に向けていた。話を振ったコーラルも、すこし考えた後何かに思い当った様で、そうですかと小さく呟き視

線を外すと食事を再開した。彼の顔を見ながら質問に答えたりリカルは、急に周りがよそよしくなったのを感じ、自分の周りを見渡してからああと思うと周りに聞こえるよう意識しながらコーラルに話を返した。

「アタシ、この間から作っていた物を次の町に着くまでに完成させておきたかったから、それで徹夜してたのよ。ロックは何してたの」

話を振ろうとリカルがロックに声をかけるが、彼は相変わらず本に目を通したままこちらの話を聞いておらず、リカルが肘で彼をついた事でやっと顔を上げた。そして彼女はさっきと同じ事をもう一回彼に尋ねてきた。

「昨日？この間、いきなりCAになったペンダントを調べるのに工作室にこもっていたけど」

答える事を言ってから、ロックはまた本を読み始める。その直後、リカルがもう一度食堂の中を、今度はさっきよりゆつくりとしつかりと見渡していく。そして目が合うクルー達の表情を見てからとりあえず満足すると、彼女はテーブルに置いてあるポットから新しいコーヒーをカップに注いでいった。

「でも、この話さっきお前にしたばかりだろ。なんでもう一度話す必要があるんだ」

「え？ちよつとそれ本気で言ってるの」

本を読みながらロックは、今リカルと交わした会話に疑問の声を上げる。それを聞くと彼女はまるで信じられないと言った顔でロックを見た。しかし当のロックは自分の読んでいる本の中に自分の世界を作りだし、時々何かを呟きながら両目を細めて紙に書かれた文章を読みふけていた。

「ロック……。アンタ人の話聞く時はもうちよつとその人の顔見なさいよ」

ずっと本を読み続けているロックに呆れた声で注意をしてからカップの中身を飲み干すと、リカルは自分の座っていた席を片づけて

から立ちあがる。席から離れる前にコーラルにあとどの位で目的地に着くかを聞き、三時間ほどで到着するとの答えを聞くと、分かったと声を上げ二人の方を見た。

「じゃアタシこれから寝るから、ステップについたら起こしてね」そう言い残すと、彼女は片手をひらひらと振りながら食堂を後にしていった。残されたコーラルは目で彼女を見送った後、自分の向かいに座っているロックに目を移した。特に親しいと言う訳では無いが、結構面識のある少年は、とりあえず何でも一通り行ってみて、自分の趣味に合うものとはことごと、それこそ周りの状況に関係無く行動する事を、今のやり取りの間中黙々と本を読んでいる姿を見て思い出していた。

「徹夜明けで今から寝て、ちゃんと起きてこれるんかよ。でも分かんねえな、リカルの奴、何でさつき話した事もう一度聞いてきたんだ」

そうロックが声を出したのを、コーラルは聞きとった。独り言として呟いた言葉だろうが、先程から彼を見ていたコーラルはちゃんとその声を認識することが出来た。

「オーナーの言うとおり、チーフは人と話す時はその人との話に集中するべきですよ」

リカルと同じ事をコーラルもロックに話し、その後コーラルは自分達の周りに人がいない事を確認してからテーブルより身を乗り出してロックに近づくと、声のボリウムを落として少年に囁きかけた。

「おんなじタイミングでおんなじ事、お二人して言うものだから周りが勘違いしてしまったのですよ。お二人が昨日の夜ずっと一緒にいたって」

コーラルの話し声に頭の耳をピクリと動かすと、ようやくロックは本を閉じるとコーラルの方に顔を向けた。もっとも向けられた顔は先程から本を読んでいた時の、自分の考えに浸っている能面の様な無表情だったため、今の話をきいてどう思ったのかその顔から読

み取ることが出来なかったが。

「そんな事してない。周りがどう考えてるか知らないけど、事実じゃないのだからすぐ消える話題でしょ」

「そう思い通りにならないと思いますよ。お二人の仲の良さは全員知っていますし」

「仲が良いんじゃない、無くて、アイツがべったりくっついてくるだけです」

「そう言う所が、周りから見れば仲が良い要因になるのですよ」

「それで昨日の夜一緒に過ごしたと思われてると？冗談じゃありませんよ。どうして出会って日の浅い奴と一緒にいなきゃ……」

そこまで言葉を出すと、ロックはふと自分の言った事に引っかけがある事を感じた。一瞬のうちに考えを巡らせるとある部分に気がつきあつとした表情になり、我に返ったロックが前を見ると、コーラルがやつと気がついたのかと言いたげな顔でロックを見ていた。それを見たロックは、耳の先までみるみる顔を紅く染めだし、明らかに狼狽しながら大声を出していた。

「何にもないから！オレ、アイツとは何にもなっていないから！ホントだから、ホントだから！」

ロックは早口で弁解した後、恥ずかしさや気まずさのため逃げるように食堂から出ていった。当然この一部始終はそれを見ていた他のクルー達の話題になった。中には小さく笑う者もいたが、コーラルが鋭い目で睨みつけると、そのクルーは笑うのをやめて彼から目を離れた。

「全く、何と言うか初々しいよな、うちの船長さん達は」

隣から聞こえてきた声にコーラルが視線を動かすと、クルーの一人が料理のトレイを持って自分の隣の席に座る所だった。席に着いてからパンにかじりつくクルーを見ながら、コーラルは彼に言葉を返した。

「まあ、あの位の年頃ならああいった反応で普通でしょう。逆に可愛くて良いじゃないですか」

「ま、変に慣れている様な奴よりはマシか。それに自分達にだってあんな時があつたわけだし、バカにはできないよな」

隣に座っているクルーと会話をしながら、コーラルは手を止めていた食事を再開させる。こうしてそれぞれの朝の時間を過ごしなが
らも、船は確実に目的地へと進んでいく。

1st ACTION 結成！L・D・C！（デジタルアン）

「商業都市ステップ到着まで後三十分、各乗組員は部署規定に従い接舷準備を行ってください。繰り返します……」

ロックがブリッジからアナウンスを流すと、船内の各所を撮影しているカメラの映像を映している正面のサブモニター内のクルー達の動きが活発になって来た。今後の予定としては、宇宙への打ち上げ前に船を宇宙での活動が出来るように改修してから、宇宙船の打ち上げ用滑走路を使って宇宙に飛び出す事になっている。

「とりあえず予定はこんな所で、出発は明日、作業の具合によるけど遅くても夕方までには衛星軌道に出る様にしたいですね」

「分かりました。宇宙に出てからのルートはオーナーに確認しておきます」

「んー、ようやく陸地に着いたよ。皆、御苦労さま」

着陸とその後の打ち合わせをしていたロックとコーラルが声のした方を振り向くと、腕を大きく天井に伸ばしながら入り口をくぐってくるリカルルの姿があった。彼女はブリッジクルーに挨拶をしながら自分の席に着くと、右前に座っているロックに声をかける。ところが彼はうんと一言だけ頷くと前を向いて自分の方を見てくれない何だろうと思ったりリカルルがコーラルに小声で聞いてみると、先程の食堂の一件を話してくれた。

「なーに、やっと気付いたの？そんなに鈍いなんて、まるで子供ね」

コーラルから話を聞いたリカルルにそう言われると、ロックは小さく唸りながら自分の机のコンソールをいじりだした。いつもの彼なら何か言い返すぐらいはしてくるが、流石に今回は気恥ずかしさと自分の失念があったため、何も言う事が出来なかった。

「と、こんな事話している場合じゃないのよね。みんなゴメン、このタイミングで悪いけど紹介したいメンバーがいるの」

そう前置きをしてから、リカルは自分の席のコンソールのパネルを操作し始め、自分の部屋に置いてあるコンピュータからあるデータをブリッジに転送してきた。サブモニターの一つに映し出されたのは、フワフワした大きなシッポを持つ犬族をモチーフにした二人の女性型と一人の男性型、合わせて三人のアバター達だった。

「これが新しいメンバーですか」

「そうよ。髪の長い年上の方がアミ、眼鏡にショートヘアの女の子の方がシェール、そして白地にブチの体毛のアタシと同じ年格好している男がロウ。随分前からプログラム組んでいた、自律型のコンピュータヒューマン達よ」

「へえ、デジタリアンか。良く出来ているな」

感心している口調のロックの声を合図に、ブリッジのクルー達も口々に、モニターに映っている三人の感想を上げていった。

モルコース星系に存在している人類の種族はおよそ百種類と言われており、その中の種族として珍しいとされているのが、身体が機械や金属で作られている無機生命体である。彼らは、身体のほかに心と言ふべき物として、自分の意思で物事を考えて行動する事の出来るAI（人工頭脳）を持っている。そうした自律型のAIを総合して電子人と呼び、自分の身体を持っている人達を機械人と呼ぶ。デジタリアン
そしてAIである彼らは同族同士での繁殖以外に、他の人間達がプログラムを組み上げる事で誕生するのが特徴である。メタルマン

「ところで彼らはもう起動するの？」

乗組員の一人がリカルに問いかけると、彼女は小さくアハハと笑うながらあごの下を指でポリポリと掻き始めた。

「実はまだ完成していないの。今日中には動かせる様にするつもりではいるんだけどね」

「それじゃ今は顔見せつて事か。見た目はまあ好きになれそうだからいいけど、こいつらにはなにさせるんだ？」

「アミにはブリッジ全般の補佐、シェールは艦内生活の管理、ロウは船や備品のメカ関係全体の整備。とりあえず必要最低限のサポ

ーターとして三人、後は彼らが運用するためのボディを作ったり、系統の細分化を行うために新しい仲間を増やしたり、まあそっちは追々やっていくわよ」

自分の作ったデジタルアンの説明をするリカルとそれを聞いているロックとコラル。しばらくの間彼らの話し声がブリッジを独占していたが、乗組員の一人が唐突に三人に向かって口を開いた。

「船長、ステップの管制塔から通信入りました。代表者に取り次いでほしいと連絡来てます」

連絡を受けたリカルは自分の頭に付けているインカム・メットからピンコードを引き出すとデスクについている端子にそれを差し込み、端子の隣のボタンを押した。するとステップの管制官の声が入カムから聞こえてきたので、彼女はその声にこたえながら会話をしていく。

「はい、それではあなたの名前と船名、フルネームでお願いします」

「リインカラ。職業はハンター。船名は……」

そこまで言うてから彼女は一度ロックの方に視線を移した。自分を見ていた彼と目が合うと、ロックは小さく頷いてきたので、リカルも頷き返すと管制官に話を続けた。

「船名はシャインウェーブ号、780メートル級、機動戦艦」

「了解。では冒険者さんのチーム名もお願いします」

「チーム名？チーム名は……」

チーム名を聞かれて少し言葉がどもるリカル。ロックの方を見ると、彼はその両目をららんと見開き、力強く何度も頷いていた。それを見てリカルは小さく溜息をついてみたが、そんな事で考えを変える相手ではない事を知っているため、観念したかのようにインカムのマイク部分に手をかけた。

「……チーム名はL・D・C、リヴリードリームチェイサーズ」
名乗りを上げてからリカルは勘弁してほしいと言った顔でロックを見たが、彼は全く気にせず正面の窓から外を見ていた。それを

見たりカルは片手で握りこぶしを作りながら、まだまだ続く入港手
続きのため管制官との会話を続けていった。

2nd ACTION 交易都市（騒がしすぎるのもうんざりする）

ステップ航空局の管制官との話を終わらせた後、管制官の指示で船をドッグに停泊させると、乗組員の面々はそれぞれ船から降りていく。その人の波に乗って表に現れる、ロックトリカル、そしてコーラルの三人。

「うーん、ステップに来るのも久しぶりですね。最後に来たのは半年くらい前でしたかね」

「アタシはこの前来た時からあまり時間経ってないわね。この星一番の町だから、情報収集のために長めに留まっていたし」

ゆつくりとタラップを降りてきたコーラルが、背ビレを両手で挟みながら身体を大きく伸ばして一言口に出すと、後ろから続いて降りてきたリカルが軽やかなステップで止まっている彼を追い越してから、両手を広げて大きく胸を反らして深呼吸をした。

「仕事の関係でちよくちよく来ていたけど、やっぱりここは良いな。ある意味宇宙に一番近い場所だから、心なしか吹く風や空の色が爽やかに感じる」

一番最後に降りてきたロックは、タラップの段差を一段飛ばしで降りながら、最後三段を残すところで踏切を付けると一気に飛び出し、先に降りていた二人のちようど真後ろに着地した。三人が揃ったところでガレージポートから出ようとすると、入れ違いに手に大小様々な工具を持った一団がやって来た。

「お？じっちゃん配下のメカニック集団のお出ましか。滑走路内の船の整備は専門の整備工がいるだろ、町の修理屋がどうしてこっち来たのさ？」

「お前の顔もしばらく見納めになるから、うちの親方がこっちの親方に無理言ってお前の船の整備を引き受けたんだよ。感謝しろよ」

「へえ、そりゃ後で礼を言っておかないとな。ついでに値引きしてくれると嬉しいんだけどニヤ」

「ガキのくせして図々しい事言いすぎ。すぐにでも宇宙に行けるように超特急で仕上げてやるから、そいつで我慢しときな」

いくつか言葉を交わしてから、メカニックの一団は三人の側を通り過ぎてシャインウェーブ号に歩いて行く。ロツクは彼らの背中に軽く手を振って見送ると、リカル達と町に向かって歩いて行つた。

宇宙港の入り口から一歩外に出ると、賑やかな町が目の前に現れた。交易都市と言われるだけあり、メインストリートには大小さまざまな店が軒を連ね、行きかう人々もネコ族を初め、イヌ族やウサギ族、トリ族やシャチ族など他にも色々な種族がたくさん歩いていた。ロツク達三人はロツクを先頭に冒険者の組合ギルドのオフィスがある、メインストリートから少し外れた区画へ向かつて歩き出した。

「元々この町は冒険者達が、自分の見つけた発掘品やお宝を他の冒険者や商人と売買するために作つた交換所だつたんだ。人がたくさん集まりだすと、その人達を相手に商売しようと冒険者以外の人達もやってきた。人が増えると遠くの方から行商するよりもここに住んだ方が楽だつて考えをする人も出てきた。まず家が出来て、次に店が出来て、無秩序に増えていくそれらをまとめるために、冒険者や商人の中から有志の人達が代表となつて町を作つた。更に規模が大きくなると、ここから直接他の惑星にアクセス出来るようにしようとな大きな宇宙港が作られ、そして今のこのステップが出来上がつたんだ」

歩きながら町の成り立ちを説明するロツクの話、リカルは黙って頷きながらしっかりと聞き、コーラルはロツクに感心しながらそれを聞いていた。

「詳しいものだね。私も海に関しては結構詳しいけど、ものの成り立ちを知っている物まではあまりないしね」

「別に珍しくも無いわね。宝や秘境を探すためにその土地の事を調べるのは、ハンターならやって当然の事だし。それに地元の事なら説明ぐらい出来なきゃダメでしょ」

厳しいねと、リカルの言葉を聞いた後にロツクはおどける様に呟

き、コーラルは顔に苦笑いを浮かべながら道の端を歩いて行く。地面がむき出しの、それでも舗装がされている道路には、様々なタイプのRBが、人や荷物を乗せてひっきりなしに走っている。大きな荷物を荷台に乗せているビーグル・トラックのすぐ横を、腕に巻いている時計の時間を気にしている運転手を乗せたビーグル・バイクが走り去っていく。更にトラックの後ろから、背負っているリュックから中身がはみ出ているほどの荷物を持った配達員がRS・ボードに乗ってトラックを一気に追い越していった。

「やっぱりにぎやかな街ね。でもあんまり騒がしすぎるのもうんざりする」

「まあこればかりはしょうがないけど。でも人が多いと変な奴も集まってくるから、それだけはどうかしてほしいよな」

通りを走っているRBやRSを見ながらやや不満げな態度を取るリカルに、ロックも相槌を打つ。その時歩いている三人の正面から、ウサギ族の少年が一人歩いてきた。彼は一般人から見れば普通の歩き方をしていたが、それは周囲の人間に自分の気配を感じさせない独特なものだった。少年は三人をじっと見据えながら歩いてくると、隙間なく三人の身体を見て回っていた。ロックがリカルと話をするために顔を彼女の方に向けた時、少年はロックの服の端が少し開いたのを目ざとく見つけた。すると少年は、まるで煙のようにその場から消えたかと思うと一瞬のうちに三人との距離を詰め、自分の体をロックの体にわざとぶつけてきた。

「おっと、ごめんよ」

「わわっと」

ぶつかって来た相手は軽く謝るとそのまま走り去っていった。何だよと呟くと、ロックは少年がぶつかって来た右肩を左手でさすりながら、右手をジャケットのポケットに入れて中身を探りだした。

「ポケットの中身、取られていたでしょ」

ポケットの中に入れていた財布が無くなっていたのに気付いたのと、リカルの声が聞こえたのはほぼ同時だった。ロックはうんと小

さく返事をする、歩みを止める事無く顔だけ少し横に向けて、声をかけてきたリカルの方を向いた。

「結構見事にな、気付いてたんだ」

「そりゃね、アイツのやり方がベタだったもの」

「ちよつと、そんなに落ち着いていて良いの。早く彼を捕まえて財布を取り返さない」と

財布を盗られた本人よりも慌ててコーラルが提案をしてきたが、当事者のロックはむしろ落ち着いた面持ちをしており、気にしなくていいといってコーラルを落ち着かせていた。

「あれは保険用。元々盗られてもいい様に赤や黄色の小銭しか入れてない奴ですから、無理に取り返す必要はないです」

「なるほど、だから落ち着いているわけだ。しかしこんな昼間からスリがいるなんて、やつぱり大きい街は嫌だわ」

「しかも掏られた方は何もしないのでは、スリを増長させるだけでは無いのですかね」

「いやいや、追いかけて捕まえるよりも、もっと効果のある事をしてやったからね」

そう言うロックはポケットに入れていた手を外に出して、その手に握っていた物を他の二人に見せてみた。二人は覗き込む様にして開かれた手の中を見ると、そこには濃さの違う緑色の種類の硬貨プレートが十枚ほど握られていた。それを見てから二人は顔を上にあげると、ロックは口元を歪めてキバをむき出しにして、子供の様な無邪気な笑顔をしていた。

「？そんなお金どこに持っていたの、どこから出したようにも見えなかったけど」

「あ！まさかアンタ、さっきの奴に掏られた時に」

「財布の中身だけをこつ、すいつて感じでな」

笑ったままロックは手振りを交えながら今しがた自分のした事を簡単に二人に話す。コーラルは心配と嫌悪感の入り混じった表情でロックを見たが、リカルは自分も気付かなかったほどの彼の技量に

驚きと好奇心の表情を浮かべ、一体どうやったのと声に出して聞いてきた。

「全く、仕返しだとしてもイケナイ技を使うなんて。君どこそれを覚えたの？」

コーラルの言葉を聞いて、興奮しながら手を取って詰め寄ってくるリカルを抑えながらロックはコーラルの問いに答え出す。

「この町のギルドの傭兵隊の元締めの人、昔からの知り合いでその人から教えてもらいましたね」

「それってこの前アンタの村で会ったバレルって人の事？」

横から口を出したりカルの声に首を縦に頷くと、ロックは彼女の手を上手く解いてからまた前に歩き出した。

「オレの親父と知り合いだったのは聞いただろ。そういうのもあって結構いろいろ教えてくれたんだよな、さっきの人の持ち物をこっそりいたたく方法の他にも剣の扱いや身体の鍛えかたとかの基本的な戦い方や、酒の飲み方や煙草の吸い方、まあ煙草は身体に合わなかったけどな。『悪い事教えるのも大人の務めだ』って言って良い事も悪い事も、まあ悪い事教えてくれた時はいつも知ることが大事だから教えるんだとは言ってたけど」

「ふうん、そういう事あえて教えてくれる大人ってあまりいないし、何か格好いいわね。随分可愛がられていたんだ」

「て言うか、オレが親父によく似ていたってのもあるんだろうな」
その一言でロックはこの話を終わらせたが、彼の言葉の意味が今いち分からなかった二人は、口をそろえてどういう事？と訊いてきた。

「うちの親父とバレルさん、年が七歳離れてたの。それ位離れると遊び仲間っていうよりかは兄貴と子分みたいなものらしくてな、よく親父の後ろをついてきていたらしいんだ。バレルさんは親父から色々教えてもらっていた。年が経って、自分の兄貴分の人とそっくりのチビがなついてきたから、昔を思い出して今度は自分が兄貴分になろうとしたんじゃないかな」

「重ね合わせですか」

「特に親父がいなくなつてからはその意味も強くなつたかも知れないな。ま、こつちにしても冒険者になるための修行がしたかつたから、バレルさんから教えてもらつた事はあるがたかつたよ」

ロツクの話の最後の下りの部分が寂しさを含まれていたので、彼が両親を失っている事を知っていた二人はそれ以上その話を聞くのを止める事にした。

2nd ACTION 交易都市（騒がしい再会）

「ここを曲がって少し行けばギルドのオフィスだ」

そう言うところロックは大通りから一本道を曲がって町の奥に入っていく、リカル達二人もそれについて行った。曲がった所で待っていたロックが、爪の少し飛び出している指をさした先にある建物が目的地のオフィスであった。オフィスまでもう少しという所で、急にリカルは足を止めると、壁にかかっていたポスターを見ていた。それに気付いたロック達が彼女に近づいて一緒にそれを見てみると、それにはステップの近くで遺跡の大規模な発掘を行っているという内容のものであった。自分の後ろからポスターの内容を見ている二人に気付くと、リカルはポスターから目を離さずに話し出した。

「アタシ、あのポスターの発掘現場であの船見つけたんだ。まだ発掘していたんだ」

「えーっ、あの船あそこで見つかったのかよ。しまったな、そんなだったらオレももう少し粘って掘ってみりゃよかった」

「そう言えばだれでも発掘できると書いてありますね」

「ええ。でも発掘権を得るには権利代として毎月金を払わないといけないから長く続けられないんですよ。そんなに金無いですし、仕事もあるからいつでも堀りに来れるわけでもないのです。ちょっとだけ掘って止めました。見つけた物も金にはなっただけど使える物はなかったから微妙でしたし」

「何だか良くない結果ね。アタシも船を見つけて買ったまでは良かったけどさ、その後変なオバサンに絡まれて船を落とされるわ、縛りつけられて持ち物盗まれそうになるわ散々で、ロックが通るからなきやどうなっただか分からなかったし。……あーっ、もう。あのオバサンの顔思い出しただけでムカついてきた。あいつめ、今度会ったらズタズタのボロボロのバリバリに引き裂いて、牛のタタキにしてやる」

ポスターから離れて、今度はリカルが先頭を切って歩き出す。彼女はこの間のシャインウェーブ号墜落事故の事を思い出し、直接の原因を起こしたウシ族の運び屋、フェアの事を思い出しては怒りをあらわにしていた。あまりに過激なりカルの言葉にコーラルがそれを制しようとしたが、頭に血の上っている彼女にはその言葉すら耳に届いていなかった。状況の分からないコーラルが何事かとロツクに尋ねると、彼はコーラル達と会う少し前に起きた出来事と、その時のフェアとのいきさつをコーラルに話した。

「彼女やバインじゃないですか？もし今ここで話の人物に出会ったら何しでかすか分かりませんよ」

「大丈夫でしょ、そんな人に偶然出会う確立なんて高くないし」心配性のコーラルをよそにロツクはまるで気にしていないといった態度で彼女の後ろをついて行く。そんな一行の目の前を横切る一人の女性。ギルドオフィスの隣の建物から出てきたのは薄いグレーのツナギに身を包んだ黒い毛並みのウシ族の女性だった。彼女に氣付いたりリカルがあ、と声を出すと、その声に氣付いたロツクも前にいる女性に目が行ってあ、と声を出す。店から出てきた女性もその場から離れるために身体を翻す時にロツク達一行を確認してあ、と声を出した。

『あー』

次の瞬間、リカルとウシ族の女性のフェアは互いに相手を指さしながら大声を出すと、次は相手に近づき、それぞれ相手の服の胸倉を掴みあつた。

「アタシの目の前にまた出てくるたあオバサン、いい度胸してんじゃないか？」

「うるせえ小娘が。その言葉そっくりそのままお前に返してやって、ついでにお前をもう一ぺんぶっ潰してやる」

リカルより頭一つ分大きいフェアが、リカルの頭の上から彼女を鋭い眼で睨んできている。リカルもそれに負けず下から見上げる様にフェアを見つめると、ライオンらしく捕食者の目でフェア

を睨む。互いに相手の迫力に一步も引く事無く掴みあつたまま吠えまくる女二人。出会う確立なんて低いと言い放ったロックは、世の中何でも起こりうるものなんだなと思いながら、二人を大人しくさせるための方法を考え出した。

「ちよ、ちよつと二人とも。何があつたか分かりませんがこんな所で争うのは止めて下さいよ」

目の前でいきなり繰り広げられた光景に啞然としていたが、すぐに我に返ったコーラルは二人に近づき間に入って止めようと試みた。

『黙れ魚野郎！ジャマすつと宇宙^{そふ}までぶつ飛ばすぞ』

しかし二人が同時に放った怒声を正面からまともに受け、コーラルは次の言葉を出す事が出来なくなり、何かを言おうとしどろもどろになった後、すぐごとロックのいる所まで戻って来た。ごめんなさいと謝って来たコーラルにロックは何も言わずに肩に手を置くと、腰の後ろにマウントさせていたロッドを取り出して両手でそれを持った。ぎゃんぎゃん言い争っていた少女と女性がついに勝負を始めようと拳を握って腕を振りかざした瞬間、頭の中で魔法をイメージしていたロックは、ロッドを振り上げて起動呪文^{ドライブスベル}を唱えた。

「サンダーストーム」

するとにわかに上空に小さな雲が現れたかと思うと、稲妻が数本地上に向かって降り注ぎ、二人に直撃した。

『ピギヤースー！！』

雷をまともに受け、二人はなす術無く地面に突っ伏してしまった。呪文を唱え終わったロックはロッドを元の位置に戻すと倒れた二人に吐き捨てるように呟いた。

「馬鹿二人が。喧嘩するならもつと場所を選べよな」

「……容赦ないね、ロック」

「正直穏便に止める方法が思いつかなかったので、面倒だから軽くしびれさせた方が良くと思った」

コーラルと簡単に話をしてから、ロックはリカルとフェアの首根っこを掴むと、そのまま二人を一度に引きずってギルドオフィス

の中に入っ ていき、それを見ていたコーラルも、目の前で起きた出来事が信用できないといった顔のまま、とりあえず黙って全員の後について行った。

ギルドとは、冒険者達が自分達の仕事をしやすくするために設立した冒険者のための商工機関である。ギルドのオフィスでは、探索者に遺跡や秘境の情報を売ったり傭兵や何でも屋への仕事の斡旋や賞金稼ぎへの情報提供を行い、また彼ら冒険者が見つけた資源や古代文明のお宝、各惑星の交易品などの買い取りも行っている。ギルドの運営資金は冒険者達がギルドを通じて稼いだ報酬などから一部を仲介料として徴収しており、文字通りギルドと冒険者達は繋がった関係を取っていた。

オフィスの中には数人の事務員が仕事をしており、更にその数倍の人数の冒険者達がオフィスの中で動いていた。事務所とロビーを隔てているカウンターに立っている冒険者は、何か仕事が無いか事務員に訪ねており、その隣には別の冒険者が、自分の見つけた古代の機械製品の部品の買い取りをしてもらっていた。

入り口の近くの一角には休憩スペースとして丸いテーブルとイスが並んでおり、室内のいる冒険者の何人かは席に集まってお互いの情報を交換したり、一仕事を終わらせた冒険者がジョッキを片手に酒を一気におおり、その向かいに座っている仲間と思われる冒険者は軽めの食事を取っていた。別の席ではインテリ風の冒険者が古文書を開きながらその内容をパソコンに打ち込んでいき、次の冒険の準備を行っていた。そして入り口から一番離れた隅っこの席では、並んで立っている二人の女性と、イスに座り両腕を組みながらその二人に何かを言っている少年、そしてその三人のやり取りを見ながらアイスティーを飲んでいる青年と、彼の隣に座って、同じくそのやり取りを聞きながら何かの書類を作っている中年の男性の計五名が占領していた。

「全く、君ら二人は顔合わせりやすぐケンカして。どうにかならないんか？」

イスに座って説教をしているロツクは、呆れたように力を抜いた声で話をしながらも、その目は鋭くつり上がり、目の前の二人を突き刺すような視線で交互に見ていた。その目で見られたリカルとフエアーは先程の勢いはどこへ行ったのか、二人揃って耳とシッポを下に倒して申し訳なさそうに彼の話を聞いていた。

「私、ロツクのおんな姿見るの初めてですよ。彼もあれだけ怒る時があるのですね」

「ふん、感情をむき出しにしながらケンカの仲裁するなんてまだまだガキだな。俺はルーフォの方を叱りたいよ」

ストローでグラスの中のアイスティーを三分の一ほど飲んだコーラルは、ガムシロップを手にとると何も入れていないアイスティーの中にそれを混ぜながら、コーラルは同席しているネコ族の男性、レインに話しかけると、彼は書類から目を離さずにコーラルに応えていった。

レインはステップのギルドに所属している傭兵達の総元締めであり、ステップの有力者が代表となり町の運営を執り行う評議会のメンバーでもある。そして彼はオーシャンガレージの出身で、ロツクの父親とは兄弟分の関係だった。ロツクの事も彼が幼いころから知っており、ロツクが冒険者目指して修行していた頃は色々な事を教えていた。それもあってかロツクの本名を知っているレインは、彼の名前、ルーフォームニールを縮めてロツクの事を呼んでいる。本名で呼ばれる事を避けているロツクが否定しない数少ない人間の一人である。

「オレはね、ケンカするなどは言ってる訳じゃ無いんだよ。ただ街の往来で出会いがしらに女二人が殴り合おうとするなんて見苦しいだろ。ただでさえ普通の人達から見れば冒険者はまともな考えを持っていない連中の集まり、とか思われているんだから」

そこで一度言葉を切ると、ロツクはテーブルの上に置いてある灰入れに入れていたキセルを口にくわえ、中に詰めていたハーブの煙を二、三度軽く吸い込む。煙草とは違うといえ、煙を他人に吹きか

ける程マナーが悪くないので、吸い込んだ煙は誰もいない方を向いて吐き出し、ロツクはもう一度目の前の二人に視線を向けた。

『だつて……』

その時二人が同時にロツクに向かって声を発した。ロツクも自分がついつい言葉を荒げていた事に気付いていたので、ちゃんとした理由で反省していればもう許してやろうとは考えていた。

「このオバサンが」

「このガキが」

『生意気なんだもの』

しかし二人から出た言葉は、ある意味予想できた、予想しなかった言葉。言った二人もジト目で相手の事を見て、その視線が重なった瞬間、たちまち二人は相手を威嚇する様な鋭い表情になり戦闘態勢を取り始める。しかし間近で二人の様子を見ていたロツクも今度は彼女達と一緒に動いた。隣のテーブルにたてかけておいたロツドを掴むと二人の視線の間にブン、と勢いよく上から降りおりした。

「もういつぺん電撃喰らわせてもいいんだぞデメエら！いい加減にしやがれ！」

シッポを大きく膨らませて二人を威嚇しながら発する室内を揺るがすほどの大きな怒鳴り声と不満を表す唸り声。周りの人間の動作も止める位なのでさすがに効いたのか、二人は黙ってロツクの方を見る。そのまま少し時間を置いてから、ロツクは手に持っていたロツドをゆつくりと下に降ろしていく。そのロツドを自分の所に引き戻そうとした時、目の前の女性の一人に変化が起きた。

「ロツクも……、ロツクもやっぱり私みたいな年増より、若い雌オンナの方が好きなんだな。そうなんだろ」

突然言われたフェアーからの台詞に驚いたロツクは、思わず手に持っていたロツドを落としてしまう。ロツドを拾う事無くフェアーを見ると、その目にはたくさん涙が溜まっており、今にも泣き出しそうになっていた。年格好の割に泣き虫な彼女を見て、いつもの

事だと分かっている、彼女の言った事や周りの空気のせいで言葉を出す事がためられる。

「そりゃ誰だって若いのが良いに決まってるあな」

「年上が好きって奴もいるけど、まあ大体男も女も若い方が好きなもんでしょ」

別のテーブルに座っている二人組の冒険者の野次に、泣きそうな目をしながら物凄いい形相でその二人を睨みつけるフェアー。このままだと状況が飛び火しそうだと考えたロツクは、まずい事を言うのも仕方ないとして、とりあえず彼女の気持ちを静める事から始めようとした。

「あのね姐さん。オレ、別に歳がどうこうって事を言ってる訳じゃないんだよ。ただオレは……」

「ええ？ロツクは年上の方が好きなの。ひょっとしてマザコン？」

「何でそんな話になるんだよ、違うわ！お前は少し黙ってる」

突然横から聞こえてきたリカルの、心底嫌そうな声を聞いて思わずロツクは大声でその内容を否定する。するとリカルは今度は彼から少し離れた所に視線を動かすと、ロツクの後ろ側の席に座っているレインに声をかけた。

「うえーん、レインのおじさまー。旦那がいじめてくるんですー」
リカルの言葉に思わずバランスを崩してロツクはイスから落ちた。ネコがバランス崩したというのも恥ずかしい話だが、それ以上に彼女の言葉が危なすぎて、彼の動揺を誘うには充分すぎた。

「何？せつかく二人の結婚を許してやったのに早くも女房を怖がらせるたあ、ルーフォはまだまだ小せえなあ」

「ちよつと何、二人して。何でオレが悪者になってるの？」

ずりおちたイスに手をかけながら立ちあがろうとするロツク。その彼にオフィス中の傭兵達がひでえなとか奥さんかわいそーといった野次を投げかけて来るので、ロツクもシッポを大きく膨らまし、左右に振って不機嫌さをアピールしながら外野は黙れと牙をむいて怒鳴っていた。その光景を見てひとしきり笑っていたレインだが、

これ以上からかうと本当にロックの機嫌を損ねるなと感じ取ると、その辺にしておけと周りに一言いってこの話を終わらせてから、改めてロックを自分の近くに呼び寄せた。何ですかと、まだ機嫌の直っていないロックがレインに近づくと、レインは先程から書いていた書類をロックに差し出した。

「ほれ、お前のハンターライセンスの凍結解除願書と、新規チームの編成許可書。内容に間違いが無いかよく見ておけ」

「ありがとうございます。ごめんなさい、僕達の分の代筆を頼んでしまつて」

「ああ、気にすんな。お前も、忙しそうだったしなあ」

そう言つと、レインはちらりとリカルとフェアーの方を見る。レインに見られた二人はそれぞれ、目線を彼から外しながらバツの悪い、といった表情をその顔に浮かべていた。オフィスの外で二人を気絶させたロックは、二人の首根っこを掴むとそのままオフィスの中に連れ込んだ。そこで偶然、仕事を終わらせてくつろいでいたレインと出会い、ロックは自分が前にギルドに効力の凍結を申請したライセンスの凍結解除の申請に来た事と、リカルと組む事に際してチームを作るためその登録をしに来た事を話した。二人が話をしている間にリカルとフェアーも目を覚まし、しかもフェアーはそこからこつそりと立ち去ろうとしたのがロック達にばれたため、ロックはこの際だからとこの二人をまとめて説教し始め、時間がかかるようだからとレインが代わりに彼らの用事を済ませようと書類を作っていた。

「でもロックもライセンス持っていたつてのは、ちよつと意外だったわね」

「昔に取ったものだよ。村長になってからは自由に村を出る事が出来なかったから、持つててもしょうがないから封印していたんだ」

書類を受け取ったロックの所にリカルもやってきて、二人で内容を確認する。二人がお互いに意見を述べ、聞かれた方がそれに答えていくやり取りを少し繰り返しながら書類をまとめ終わると、二人

は一緒にオフィスの事務員が座っているカウンターに足を運んだ。その光景をさも面白くない、といった顔で見ているフェアーに向かって、傭兵の一人が口を開いた。

「君も結構しつこいね。もう脈も無いんだから諦めればいいのに」溜息交じりの自分に掛けられた言葉に、フェアーはツナギの袖で目元を擦ってから、高ぶった感情を何とか抑えようと努力しながら上ずった声でそれに答えた。

「そんな事言われたって、今更この気持ちに整理をつけるなんて出来ないよ」

「それじゃ結局あなたも年下好きって事じゃない。だめよロツク君ばかりに変な事言っちゃ」

「私はそんなふしだらな気持ちでロツクを見てねえ！私はただ、あの子が歳不相応な苦労や努力をして、あの子の家族の知らない所で傷ついて行く様を見る事がつらかったんだ」

沈痛な面持ちで話すフェアーの言葉に、オフィス内にいたハンターたちは一斉に口を閉ざした。五年前の悲劇はこの星の人間の大半が知っている所である。特にこの町では、ギルドの傭兵元締め親友の突然の訃報と、跡目を継いだのがやつと十一になる所といった子供で、その子を助けるために彼がどれだけ身を粉にしてきたかを知らない人間はいなかった。

「当然好きだって気持ちもあったさね。だから苦労はさせないから一緒にならないかと言ったんだ。でもあいつは『自分にはやりたい事があるから』と言って断って来た。あいつの中に私がない事は知ってるさね。でも分かっていたって、他の雌と仲良くしている所だけは見たくねえんだよ」

そう言いながらフェアーは、怒りや嫉妬と言った様々な感情をその顔に浮かべてカウンターの二人を見る。その目にはもう涙は浮かんでいなかった。

「ところでフェアーよ」

鬼の様な形相で少年たちを見ていたフェアーをその場にいるハン

ターたちは遠目に見ていたが、やや声量を落としたレインがゆつくりと彼女を呼ぶと、彼女は表情を変える事無くレインの方を見る。キツとした目で睨むように見てきたが、それに動じることなくレインは言葉を続ける。

「お前、こんな所で随分のんびりしているけど、仕事の方は終わっているのか」

それを聞いた時フェアは少し何かを考えた後、みるみるその顔を青ざめていく。ああこれは終わっていないなとその場にいた誰もが思った瞬間、飛び上がるように弾けたフェアはすぐさま入り口に走っていった。

「きゃー、急ぎで届ける荷物が後三件あるのすっかり忘れてたー。悪いけどこれで失礼するよ」

最後の言葉はほとんど外に出てから言われたものなので、語尾が不明瞭な物になっていた。やれやれと軽く首を振りながらレインが立ちあがると、ゆっくりとした足取りでカウンターの方に近づいて行った。

「はい、それでは凍結していたロック・ラジファストのライセンスと、新規チーム編成によるデータ更新を行ったリーンカーラ各員のライセンスを返却します」

そう言いながらカウンター内の職員が差し出してきた二つのリングを、ロックとリカルはそれぞれ手にする。人の腕より大きくて頑丈な地金のリングに、周りには水晶の様に透明なドーム型の物質で装飾されている。これがギルドのライセンスになる。この水晶に特殊な波長のレーザーを当てる事で水晶内に電子的に封入したデータを映し出し、持ち主の所属や経歴などのデータを見る事が出来る。

差し出された薄緑と赤色のリングをロックとリカルがそれぞれ手にすると、リカルは右の手首にリングを通す。すると通されたリングはみるみるうちに縮んでいき、彼女の手首にぴったりの大きさになった。このリングは大きさを自由に変える特性を持っているため、誰でも身体どこにでも身に付ける事が出来る。手首を見ながらフィット感を確かめるために手を色々と動かすと、彼女は納得したのか右手を下に降ろした。

ロックはどうしたのかと彼の方を見ると、ロックはすらりと細長い自分のシッポの先端にリングを通していた。リングがはまった事を確認してから、ロックはシッポを強く弱く、色々な方向に動かし、リングの重さにシッポを慣らすと、ロックはシッポを軽く立てて機嫌の良さを表していた。ふと、ロックがリカルの方を見ると、彼女は何故か不機嫌そうな顔をして自分を見ている。気に障る様な事をした覚えが無いので何故そんな顔をされるのかロックは訳が分からなかった。

「どうしたんだよ、何だか面白くないって様な顔して」

リカルは一人で何か考えていたようだが、ロックに呼びかけられるとハッと気がつき、そして何でも無いと何事も無かったかのよう

に振る舞った。ロツクは一瞬首をひねったが、声をかける直前まで彼女が自分のシッポとロツクのシッポをちらちらと見比べていた事を思い出すと、ロツクは思い付いた事を聞いてみた。

「ひよつとしてリカル、オレとお揃いに出来ないからがっかりとか考えてる？」

「何でバレたの！ってちがつ、べ、別にそんな事を考えていた訳じゃ」

「アハハ、お前、ホントに考えていた事そのまま言葉にするよなまあ、確かにそのシッポじゃオレと同じにするのは難しいか」

そう言つとロツクは、リカルの腰の辺りでゆつたりと動いているシッポの先端を見ていた。彼女のシッポは先端に毛が集まつていてちょうど筆の様になっている。ロツクの様な細いシッポならともかく、筆状の形をした物にリングをはめるのは無理がある。

「ねえロツク。そのリング、シッポじゃなくて腕にはめるとかにしたりとかしない？」

「ヤダね、昔頃からこうしてたんだ。こればかりは誰かに言われても変えるつもりは無いよ」

「ロツクのケチー、減るもんじゃないし、少しぐらいアタシに合わせてくれたって良いじゃない」

「ケチでいいもん、自分のしたい事はどこまでも押し通さなきゃ」

口調は軽いが意外と頑固なロツクの返事に、リカルは頬を膨らませて不機嫌さを表しながらロツクから離れようと後ろを振り返ると、ちょうどそこに席を外してこちらに来ていたレインの顔があつた。

突然の事に軽い悲鳴を上げたりカルを見て、レインはしかめっ面になりながら酷いなと声を出す。慌ててリカルは謝りだが、レインの機嫌は簡単には直らないらしく、腕を組みながらシッポを大きく左右に振っている。そんなやり取りを隣で見ていたロツクはこみ上げてきた笑いを必死で押さえていたが、あまりに一生懸命なりカルの姿についに吹き出してしまい、声を出して笑いだした。笑われたリカルはロツクに詰め寄ると彼の事を軽く握った拳でポコポコと叩

きだし、ロックは頭を両手で抱え、笑いながらゴメンゴメンとリカルに謝る。レインはそんな二人を柔かい微笑みで見ている。

「とりあえずこれで、ルーフォもまた冒険者に返り咲きだな」

二人の動きが一段落した所でレインが言葉をかけると、ロックは笑った表情のまま彼に頷いて見せた。

「所でロック君は明日誕生日で、今度で十六歳になるね？」

「あ、はいそうですね」

オフィスの職員からの突然の質問に少し間を開けてから応えると、職員は今ロックから提出された書類を見ながら話を進めていった。

「知っていると思うけど、十六歳になったら第四齢期になるから、ライセンスの見直しと更新を行わなければいけません。一時間程で終わりますから明日もう一度ここに来ていただきます」

職員の話を聞くと、そう言えばそんなものがあつたと言った表情でロックはシッポのライセンスに視線を落とした。年齢期とは区切りを表す言い方で、町や集落、組織での仕事や生活の役割を決めるためのステイタスの一つになっている。特に何らかのライセンスを持っている者にとっては、しっかりと更新をしておかないと仕事そのものが無くなってしまうので、とても大事な事柄でもある。

「明日誕生日の奴なら、一日ぐらいまけてやったって良いじゃないか」

職員の話が終わると、意外な事にレインが彼に対して口を挟んでいた。突然の第三者の声に職員もそちらの方を見ると、自分の言っている事が分かっていのかと言いたげな目をしながら、どういう事ですかとレインに問いかけていた。

「だから、どうせ明日誕生日で更新する内容も今出した書類のまんまなんだから、今更新して明日正式に処理すりゃ良いだろ」

「良いだろうって、規則なんですからそんな訳にいかないでしょ。あなたはここのオフィスマスターの一人なんですから、規則破らせ様な事言わないで下さいよ」

「良いじゃないのそれ位、やってあげなさいよけちけちしないで」

レインの言葉に首を横に振っているオフィス職員に、今度は別の席に座っていた女性の冒険者が口を出し始めた。それに合わせてオフィスにいる他の冒険者達も次々と会話に入って来た。

「そうだよ知らない相手って訳じゃないんだし、その位サービスしてあげたって良いじゃん」

「そう言う事だから頼むわ。明日になったらルーフオは宇宙に出るって言うし、時間掛けさせたく無いんだよ」

オフィス中の冒険者達に頼まれ、職員の男性もこれ以上は押さえられないと悟ると観念したかのように溜息を一つするとロックに向かって手を差し出した。

「それじゃロック君、内容を更新しておきますからライセンスリングを貸して下さい。言つときますけど今回だけです」

文字通りしぶしぶといった表情で用件を話す職員を見て、ロックはシッポに付けたリングを外すとごめんなさいと謝りながらそれを渡した。君のせいじゃないよと言うと、職員はそれを受け取り、早速作業を始め出した。

「全く、相変わらずの悪い大人っぷりですね。泣きそうになりますよ」

呆れ声のロックの言葉を聞いても、レインはしてやったという笑顔を返してきただけで全く反省の色を浮かべていなかった。その時一人だけ席に座りっぱなしだったコーラルが三人に席に座る様促して、ロックはレインの正面、リカルの隣の席に腰を下ろした。

「そっぴや、あのチーム名、リブリー・ドリーム・チェイサーズだったか？アレ考えたのルーフオだろ」

「流石おじさま、分かってらっしゃる。躍動する夢追い人、だなんてアタシは嫌だったんだけど、どうしてもロックが譲らなくて」

「何言ってるんだよ、冒険はそういうもんだろ。どんだけ現実的に物見ている、夢を追いかける心を忘れちゃ冒険なんて出来ねえよ」

相も変わらない持論をリカルに語るロックは、一点の曇りも無い笑顔を振りまいており、レインは相変わらずだと言っては笑い、

リカルは相変わらずねと言いながら苦い顔で彼を見た。新しく注文をしたドリンクのグラスを取ると、四人は改めて談笑を始めた。内容はロック達のこれからの行動を話していたが、話の後半からはロック達がレインと別れてからの近況報告みたいなものになっていた。

ロック達の話が盛り上がってきた所にオフィスの扉が開き、ウサギ族の少年が中に入ってきて来た。少年は室内を見渡していたが、席に座っているロックの姿を捉えると、大股でロック達が座っている席に近づいて行った。

「やい teme エ、このネコ野郎がよくもやってくれたな」

ウサギの少年はロックの目の前にやってくると、彼の肩を掴んで間髪いれずに声を荒げて怒鳴りだした。

「何だアンタ、いきなりやってきて騒ぎ出して。オレに何か用があるの？」

急な事態の変化に驚いたロックは、とっさに声のした方に顔を向ける。そこにいる少年の顔を見てロックは、どこかで会った事のある顔だと記憶の引き出しをひっくり返し始め、そしてようやく目の前に立っている少年が、先程自分のサイフを掏っていった少年だという事を思い出した。しかしどうして彼が自分の所にやって来たのか、その理由がロックには分からなかったが、少年の次の言葉でやっとその理由が分かった。

「しらばっくれんな。オイラのサイフから金を抜き取ったのはお前だろ。取っていった金、返してもらおうか」

財布の中身を掏り取られた事に気付いた少年は、直前に出会ったロックが掏っていったと思い、財布の中身を取り返すためにロックの前に現れた。それを知って、確かに自分は問い詰められる様な事をしていたなとロックは軽く笑いそうになるのをこらえて少年を見ていた。しかし事実を認める前にロックにも少年に言いたい事がある。

「オレがアンタから金を取ったって言うけど、一体何を根拠にそ

「う思ってるんだ？」

ロックがそう言っと、少年は一瞬表情を強張らせ、口をつぐんで一言もしゃべらなくなった。確かに根拠が無ければ事実を証明することは出来ないが、それを証明するためには自分もサイフを掏り取った事を言わなければならない。そんな事が出来る訳無いのだが、自分の盗られた金額の方が多いため簡単に引き下がる事も出来ないため、ウサギ族の少年は押し黙ったまま、ロックを睨み続けていた。ロックは、目の前の少年が自分のサイフを返してくれれば自分の盗った金を少年に返すつもりだったが、相手が自分の非を認めずに自分に詰め寄ってくるのを見て返すのを止める事にした。そう決めると、ロックは自分の手を持ち上げて、目の前の少年の頭頂部から生えているウサギ族特有の長い耳をわしづかみにした。

「何にも言えねえんだったら、いい加減にその手を離してもらおうか。そろそろ苦しいんだよ」

ロックは少年に話しかけると同時に、掴んでいた耳を引っ張り出した。痛みに顔をしかめる少年を見ながら、手を緩める事無くロックは耳を引っ張り続ける。しかし少年もやられっぱなしではなく、空いているもう片方の手をロックに伸ばすと、腰の後ろで大きく振られている彼のシッポを掴んで引っ張った。突然の事にロックはつい声を出してしまったが、それでも少年の耳を掴む手の力は抜いていない。少年も頭からの痛みに耐えながら、ロックの胸倉とシッポをそれぞれの手でがっちりと掴んで離さない。

「テメエ、いい加減に耳離せ。痛えだろうが」

「そっちこそ、人のシッポいつまでも握ってんじゃねえよ。男に握られたって気持ち悪いだけだろが」

お互い一步も引かない状況に見かねたのか、レインは少年を、リカルはロックを後ろから抱えると、そのまま強引に二人を引き離れた。離された事で、ロックは一応落ち着きを取り戻したが、ウサギの少年はまだ納得がいかないのか、レインの腕を振りほどこうと暴れていた。

「ほらロツク落ち着いて、落ち着いた？」

「ああ、悪いな。でもこいつの事は許せないぜ全く。大体君の持ち物を盗ったって証拠も無いのにオレの事泥棒扱いしやがって。どういふつもりなんだよ」

「そ、それは……。でも、とにかくお前が盗ったとしか思えねえんだよ」

「だったらちゃんとした証拠でも出せば良いでしょ。それとも何、証拠を出したら何か都合が悪いの？」

このリカルの一言が効いたのか、完全に先程の勢いを失った少年は周りをグルツと見渡した後、レインの腕の中から抜け出すと外に向かって歩き出した。

「ちよつと待てよ」

外に出ていこうとした少年にロツクは声をかける。少年は不機嫌そうな顔をしながら振り向くと何だと声を出す。

「礼儀知らずの名前を聞いておこうと思つてな。オレはロツク、ロツク・ラジファストだ」

「……リュウ・イーター。覚えとけ」

吐き捨てるように自分の名前を名乗ったリュウは、今度こそオフイスから外に出ていった。嵐の様な一時が過ぎ去ったあとは、みんな何事も無かったかのように自分のしていた事を続け出した。ロツクも自分を抱え込んでいたリカルの手をほどくと、先程まで座っていたイスに腰をかけて、アイスティーのグラスに手を伸ばす。ほったらかしにされて汗をかいていたグラスを手にとると、小さくなりだしたグラスの中の氷がカラン、と弱々しく声を上げた。グラスの中身を口に含んでいると、リカルとレインもそれぞれの席に着く。そこで初めてレインが口を開いた。

「で、アイツの言つてた事、本当のところはどうなんだ？」

全くあのウサギもある事無い事言つてきて困ったわよね、と周りに聞こえる様ことさら大きな声でしゃべるリカルと対照的に小声で聞いてきたレインに、聞かれたロツクもこれまた小さな声で返した。

「先にあのリュウって奴が僕のサイフを掏ってきたから、仕返しにアイツのサイフの中身を掏り取りました。素直にサイフを返してくれたら僕も返すつもりでしたけど、自分の事棚に上げてこっちに詰め寄ってきたから……」

「成程、それで返すのを止めたと」

レインの言葉に頷くと、ロックは手にしているグラスを傾け、中のアイステイーを一気に飲み干した。そして気持ち大声でコーラルに話をしているリカルと彼女の言葉にとりあえず合わせるように頷いているコーラルに行きましようと言をかけると、席から立ち上がった。

「ロックはこれからどうするの。アタシは用事を済ませてから一仕事しようと思うけど」

「オレも用事があつてな、隣の店に行くからここで一旦解散かな」

「あら、なんだアタシと同じ所じゃないの。だったら一緒に行こうよ」

そう言うのと立ちあがったりリカルはロックの腕を掴むと自分の腕を組み合わせて外に向かって歩き出した。

「にやー、頼むからそうくつつくの止めてくれない。ネコはべつたりされるの嫌なんだから」

「あたしライオン、ネコの仲間だけとくつつくの好きー」

にぱつと笑顔で話しながら、リカルはぐいぐいとロックを引つ張っていつてオフィスの外に出ていった。イスに座りながら一部始終を見ていたコーラルは、温かい表情で今出ていった二人を見ていた。グラスの中の残りのアイステイーを飲みほしてから立ち上がると、先に席を立っていたレインに声をかけられた。

「君、これから何か用事ある？暇ならちょっと手伝ってほしい事があるんだが」

「私ですか？傭兵の仕事のお手伝いはちょっと出来ませんが」

「いくら俺でもそんな事頼むか。会場のセットを手伝ってほしいんだ」

レインの口から出た言葉に何の会場ですか？と彼と共に外に出ていくコーラルが聞くと、彼は目をらんらんとさせながらコーラルに耳打ちをした。

「面白いパーティーの準備。それじゃこっち来てくれ」

「ごめん下さい。この前機体の修理を頼んでいったものですけどー」

ギルドオフィスから出てすぐ隣にある店舗にリカルとロックはやって来た。この店は大きさや種類を問わず様々な乗り物の修理を行う工房だ。目的の店に着くとリカルは店内に入って声をかけてみる。しばらくすると机が並んでいる事務所らしきところから人が立ちあがり、パタパタと駆け足でリカル達のいる所にやってくる。

「はい、お待たせいたしました。修理ご依頼された機体の引き取りですね？お預け時に発行したチケットを拝見させてください」
リカルはジャケットのポケットに手を入れると、事務員に言われたチケットを取り出してそれを手渡した。

「B-5番ですね。只今出しますのでこちらでお待ち下さい。次の方、ってロックじゃない。十日ぶりね」

「久しぶり。引き取りに来ただけど、じっちゃん居る？」

白い毛並みのイヌ族の事務の女性にロックが訊ねると、彼女は工房の奥の方を振り返ってみた。ロックもその方向を見てみると、工房の奥では大声を張り上げながら作業員たちに指示を出して回っているイヌ族の老人が歩いていた。一台の車を手に持っているスパナで軽く叩いた後、作業員を呼んで二言三言指示を出すとそこから離れて今度は戦闘機を同じように叩いて回る。少し薄くなってきたいるこげ茶色の体毛と、大きくて垂れた耳を上下に忙しく動かしながら働いている姿は、高齢ながらもそれを感じさせないハツラツとした元気さを見せつけていた。呼んでおくれと言いついて女性に奥に歩いて行ったので、ロックはリカルが座っている席の隣に腰を下ろした。

「知り合いのお店だったの？」

「ああ。ここの主人のじっちゃんな、腕はいいしオレと気があう

からよく自分のマシンのメンテを頼んでるんだ。前はオレが直接してただけど、忙しくなってきたからはここのじつちゃんにまかせつきりになっちまった」

「おかげで忙しいったらありやしねえ。常連客が増えるのはうれしい事だがこいつが持つてくる物とはにかく手間がかかっていけねえ」

話をしていた二人と別の所から聞こえてきた声に二人は同時に振り向くと、先程まで店の奥で機械を相手に動きまわっていた店主の老人が、スパナを肩に当てながら二人の後ろに立っていた。犬歯をむき出しにしながら笑っている店主を上目づかいに見ながら、ロツクも牙をむき出しにして笑い返す。

「しかししばらく見ないと思つていたら、まさか女づれでやつてくるたあ、お前もやるようになったじゃねえか」

「からかわないでよ、ただでさえいろんな人からあれこれ言われて困つてるんだから。それよりオレのマシンは？」

「ああそれなんだがな、お前のでつけえ方の相棒、急ぎの仕事が重なつてたから修理の完了は明日になっちまう」

わりいなと謝つてくる店主に、ロツクは席から立ち上がると片手を振つてそれを制した。

「こつちも明日まで動けないから別にいいよ。それよりオレらの船の調整に人回してくれてありがとう、忙しいんだろくにわざわざこつちの面倒まで見てくれて」

「ふん、常連客が旅に出るつてのに何の餞別も無しじゃ薄情者に思われるからな。さてと、それじゃ超特急で仕上げてやろうかね」

挨拶が終わつて店主が店の奥に戻つてくると、入れ違いに先程の女性事務員がやつて来た。手には数枚の書類をもっており、ロツクとリカルの前までやつてくるとそれぞれに持つていた書類を手渡す。「ではこれが預けた機体の修理箇所と修理内容、それと修理金額です。目を通してからサインして下さい」

差し出された書類を受け取ると、二人はそれぞれその内容に目を

通した。自分の希望通りに修理が完了している事を確認したりリカルは書類にサインをしようとして、ふとロックの方を見ると、彼は自分以上の内容が書かれている書類を、書かれている事を見落とさない様に指で文字をなぞりながら時間をかけて読んでいた。それを見ながらリカルはペンで所定の場所に自分のサインを入れると、書類を事務員に手渡した。

「ありがとうございます。それでは機体を引き渡しますのでこちらへどうぞ」

「ちよつと待て、オレも行く」

事務員に連れられて移動しようとしたリカルを呼びとめると、ロックは書類にサインを記入して事務員にそれを渡す。

「物は分らないけど、どんなマシン使っているか興味あるからな」

リカルの際に並んだロックを見てから、事務員は二人を案内するため先に歩き出す。しばらく歩くとガレージの隅から何かの機体を牽引してこちらに向かってくる小型のトレーラーがやって来た。事務員が取りだした手旗でトレーラーの運転手に合図を送ると、運転手は三人の際に車を止めた。動きが完全に止まった事を確認してから、女性事務員は機体の確認をお願いしますとリカルを機体に近づけ、ロックも後ろからそれを見た。

それは戦闘機だった。機体全体に黒色のカラーリングが施されており、主翼に引かれている識別用のラインには明るい青紫のカラーリングが引かれている。大型でややゴツイ、ぱつと見た感じは攻撃能力に特化した、ある意味彼女向きのタイプの機体であった。

「はー、結構使いこんだ良い機体だな。これがリカルのマシンか。今までこれで旅をしていたの？」

「うん。この機体で居住用のキャビンを引っ張って旅して来たのだ。まあ、この前船を手に入れたから、長年使っていたキャビンは引き取ってもらったけど」

ロックと話をしながら、リカルは戦闘機の外側をざつと見て回る。

更に機体によじ登って風防を開けると上半身を折り曲げてコックピット周りを丹念にチェック、しばらくしてから頭を上げると地面に向かって飛び降りた。

「中々いい仕事してるじゃない、気に行ったわ。それじゃすいません、これの搬入作業もお願いしますね」

そう言いながらリカルは事務員に代金と、追加で発生した機体の運搬代を支払う。お金を受け取った事務員は早速彼女の戦闘機を運搬する手配を取った。リカルに運ぶ場所を聞いてからトレーラーの運転手にそれを伝え、一通りの手配を取ってから、事務員の女性はロックを呼び寄せた。

「あ、ロック。おじいちゃんからだけど、ロックが他に預けていたものはチェック済んでいるって。いつでも持ちだして良いですよ」

伝言を聞いたロックは分かったと言うと、ある一角を目指して歩き出す。チェックの完了している小型のマシンは全て一か所に保管されており、その中にはロックが修理を依頼していたバイク型のRBが、コンディションを万全にしたきれいな身体で主との対面を心待ちにしているかのように静かな光沢を放っていた。

ロックのバイクは俗に言うチェイサータイプであり、PRSシステムによる高い旋回能力と最高速度を重視している、追跡者の名にふさわしいマシンである。大型のシャープなボディに跨ると、ロックはメーターパネルの下側についている起動キーをゆっくりと回す。わずかに動き出した後、全身に伝わる振動が段々と強く大きくなっていくと、それは獣の発する咆哮の様な荒々しいものへと変わっていく。チェイサーの振動を全身に感じると、ロックはチェイサーのエネルギータンクの部分を手でゆっくりと撫でる。エンジンからボディに伝わる振動と、エネルギータンクのひんやりとした落ち着きを取り戻させてくれそうな冷たさが、手の平の肉球を通してロックに伝わり、その仕上がり満足したのか彼は喉を鳴らして目を細めた。

「いいエンジン音ね。しっかりと使い込まれていて、それでいてパーツの疲れを感じさせないどっしりとした響き。よっぽど大切に使っているのね」

いつの間にやって来たのか、後ろから聞こえてきたリカルの声に、ロックは耳だけ動かしながら身体はチェイサーの方に向けたまま、彼女の声に声で答えた。

「そりゃね、ジャンクオーシャンで朽ち果てたボディフレームを見つけてから、自分でパーツを探して一から組み上げたんだ。ここに預けてあるマシンは全部オレが組み上げた物なんだぜ」

「なるほどね、それなら大事にする気持ちも良く分かるわ。自分が作った物は思い入れも強いしね」

「思い入れが強いのは結構、大事にしてくれるのもいいんだけど、もっと丁寧に扱ってほしいよな。いつも乱暴に乗り回すんだもの」

聞こえてきた言葉に何となくロックがそうしている姿が想像できたため、リカルはアハハと軽く笑った。そしてすぐに声のした方を振り向くと、そこに立っていた少女に向かって一言。

「ところでアンタ誰？」

「ところでアンタ誰？」

リカルが腕を組みながら自分の隣に立っている少女に問いかけると、少女は顔をリカルに向けて片手を上にあげ、よつと声を出してリカルに挨拶をしてきた。リカルより少し年上に見える少女はどちらかと言えば中性的な顔立ちをしており、そのしゃべり方や色を抑えたコートやズボンといった服装のせいも相まって、気をつけて見なければ青年と見間違えてしまいそうだ。背中から生えているコウモリのような大きな翼と腰のあたりから地面に向かって下がっている腕ほどの太さを持つシツポは竜族特有の物だが、リカルは全体的に感じる少し硬そうな拳動に違和感を覚えていた。最も、普通に見る分にはそんな事は全く分からない、あくまでハンターであるリカルから見ての感想である。

「自己紹介する前に聞きたいんだけど、お前ロックに何かなれなれしいけど、アイツのなに？」

「あ？何よ初対面の相手に急に。アタシはロックの相棒だけど」いきなりの質問にムツとしながらも、自分の胸に手を当てながらリカルは少女の問いに答える。その言葉を聞くと少女は目だけを動かして、リカルの事を上から下まで、まるで値踏みでもするように見てくる。相手のその態度にますますリカルはイライラを募らせると、低い声で唸りだして彼女の事を睨みつけた。

「ちよつと失礼じゃない、そんな態度取るなんて。大体アンタこそロックの何よ」

「オレかい。オレもロックの相棒。付きあいの長いな」

そう言いながら少女は胸の前で組んでいた腕を頭の後ろで組み直した。リカルの睨みを正面から見ても涼しい顔をしてシツポを上下に軽く振っている辺り、彼女の度胸の大きさが伺える。そのまま二人はしばらく沈黙の睨み合いを続け、リカルが先制の攻撃を仕掛け

た。

「相棒ね。そうと言っても色々あるし、本当にロックの役に立っていないや相棒とは言えないわよね」

「そんなんだったら、ロックのために役立つ事何でもしてきた。村を守る事やダンジョン調査の手伝いはいつもの事、他にも何かあったらいつも助けて来たぜ。お前はどうかんだよ？」

「アタシだって、ダンジョンの中じゃいつも一緒にいて助けきたし、生活面でもメカの修理とか料理や掃除、出会ってそんなに経っていないけどロックの事支えてきたわよ」

「それって別に相棒じゃ無くても出来る事じゃねえの？」

「でも、ロックを旅に連れ出すきっかけを作ったのはアタシだ。これだって相棒じゃなきゃ出来ない事だろ。大体そっちだってやっている事は戦闘系ばかりじゃない。少しも女らしい事してないくせして偉そうなこと言わないでよ」

「あー、ひつでー。それって差別だセクハラじゃん」

二人で自分の特徴や、相手の抜けている所をあーだこーだと言いつついている内に、二人の声はどんどん高く、大きくなっていき、ついには言い争いに発展しそうになった。

後ろがうるさくなってきた事に気付いたロックが、チェイサーから降りて後ろを振り返ると、二人の少女が何やら大きな声で言い争っている現場を目撃した。時々自分の方を指さしたり、自分の名前を叫んでいる事から、自分の事に関する事が原因だとすぐに気付いた。先程から時間も経っていないのにまた同じような光景を目の当たりにして、どうして自分の周りには私の強い、ワイルドな連中が集まってくるのだろうと半ば呆れながら少女達に声をかける。

「ちよっとリカル、それとリープも。二人とも一体どうしたんだよ」

ロックに呼ばれた二人の少女は同時にロックを見ると、彼女達はお互いに相手を指さすとおんなじタイミングでロックに叫んでいた。

『この女、ロックの一体何なのさ！』

「……相棒だろ？」

物凄い勢いで聞いてくる二人に対して、ロックの言葉はいささか気の抜けた物であった。最もロックとしては二人の勢いに圧されて答える言葉の語気を奪われてしまったわけだが。

「あ、そうか。リープ、お前がけしかけたな」

「いやー、わりいわりい。起きたばつかで暇だったからさ。ちょうどロックを見つけたら見た事無いのが一緒だったから、目覚まし代わりにちよいと挨拶を、な」

名前を呼ばれた少女は、片手で頭の後ろを掻くとリカルの方に顔を向けて一言謝罪を入れた。リカルも素直に謝られたものだから、仲直りの意味も込めて微笑みながら手を差し出し、少女も笑いながら差し出された手を取った。

「所で名前をまだ聞いていないわね。アタシはリーンカーラ」

自分の手を取った少女を正面から見ながら、リカルは彼女に改めて問いかける。少女もそれを思い出すとああ、と言いたげな顔をしてからリカルに改めて口を開いた。

「そう言えばそうだったな、すっかり忘れてたぜ。オレは自律式戦術支援コンピュータのリープ。この身体は人間サイズの外部活動用端末だ」

「外部活動用のマシンボディ？じゃああなたデジタルアンなの。どこか堅いイメージしてたのはそういう訳なんだ」

「硬い？メンテ終わったんじゃないのか？」

「摩耗した各パーツを全部とつかえてもらったから、身体がまだ慣れてねえんだよ。今日で慣らしておかねえとな」

そう言いながらリープは、自分の足元に置いてあったリュックに手を伸ばすと、それを背中に背負おうと後ろに回した。それを見つけたリカルはリープにそれが何かを訊ねた。

「ん、これか？このボディのオプションユニット。こいつを装備すればRWとのバトルでも引けは取らないぜ」

「オプション？どう見てもリュックじゃない。何かギミックで

も付いてるの？」

「気になるんだったら、手にとって見てみるか？」

リープが差し出してきたリュックを見ながら、リカルはそれを取ろうとゆっくり片手を伸ばした。その時メンテナンスの報告書を読み返していたロックがそのままの姿勢でリカルに静止の声をかけていた。

「リカルー、それ手にしたりするなよ」

「何でよ、ただのリュックなら危険物でも無いでしょ？」

会話をしながらリープのリュックを取ろうとしたリカルに、ロックはんー、と報告書を睨みながら小さく唸ると言葉を続けた。

「でもそのリュック、重量が1トン近くあるから生身じゃ持てないぞ」

さらりとロックが語った衝撃発言にリカルが伸ばしていた手を引っ込めたのと、リープがリュックを手放したのはほぼ同時だった。リープが離れたリュックはものすごい勢いで落下し、床に激突すると敷かれていた鉄板をぶち抜いて半分ほどが地面に埋まってしまった。

「あ、何してんだせつかく直したのに。壊れちまうじゃねえか」

「こつちが壊れるかと思っただわ。何て事しようとしてたの。腕がもげる所だったじゃないの」

「あー、腕もげちゃまずいよねー。それじゃ今のはリープが悪いなー」

リカルに文句を言うリープと、そのリープにツツコミを入れるリカル。更に二人の傍で報告書を読みながらボンヤリと生返事を返しているロック。端から見れば漫才みたいなやり取りを行っている三人を、店の従業員達はとりあえず目で見てから、また自分達の作業に戻っていく。

「で、結局これは一体何なのよ。ただの重たいリュックじゃないでしょ」

リカルの再度の質問に、落としたリュックを背負いながら、リー

ブも今度は真面目に質問に答えた。

「これはレギオンメタルを詰めたタンクだ。オレの意思で今の素体のボディを強化したりアタッチメントを付けたり出来る」

そういつてからリープは右手を軽く上げると、その手に軽く力を込める。すると右手がジェル体の様にブヨブヨとうごめいた後、右手に大きめの盾が付いていた。

ナノマシンと言う目に見えない極小サイズの機械を加工して、一つの大きな塊にしたものを群体金属レギオンメタルと呼ぶ。この金属の特徴は特定の形状を数パターン記憶させる事が出来る事で、通常の形状記憶合金と違い使用者の操作で、任意に記憶させた形状に変形させる事が出来る事である。製造が難しいので高価な品物だが、コスト以上の利便性があるため色々な所で使われている金属材の一つである。

「ートン近く、全部レギオンメタルなの？何と言うか、スケールがすごいわね」

「色々な仕事するにやこうというのが都合いいからな。オレはこいつが気に行ってるぜ」

リカルとリープが話をしている間にロックが読み終わった報告書を閉じると、彼はそれをリープに返すと自分は再びチェイサーの所に歩いて行った。

「じゃ、オレはこれから行く所があるからこれで失礼するけど、二人はこれからどうする？」

チェイサーに手をかけているロックは、身体のやや下側で大きくシッポを振っていた。これを見たリープは、彼が一人で行動したい事を悟ったので、ここはロックに合わせる事にした。

「だったらオレは身体の慣らしも兼ねて、何か仕事でもしてるわ。リカルだっけ？一緒に何か探そうぜ」

「んー、出来たらロックと一緒にいたいけど……、でもお金も貯めといった方が良いか。仕方ないわね、付き合うわよ。お近づきも兼ねてね」

二人の返事を聞いてから、ロックはチェイサーを押してガレージ

の入り口から外に出る。外に出るとロックはチェイサーに跨り、スロットを大きく開く。チェイサーに装備されたPRSシステムから空間の粒子が吸収されると、加工された粒子が機体から噴射。機体が浮き上がってからロックはアクセルを思いきり吹かせると、次の瞬間チェイサーは、自身のエンジンから高い声を上げながら鋼の体軀を震わせ、ロックと共に大地を駆け出していった。走り去ってゆくロックを見送るリカルとリープ。彼の姿が見えなくなってから、リカルが口を開いた。

「所で、アタシの事はせめてリンって呼んでくれないかな」

「なしてさ？リカルも良い名前じゃんか」

リープの質問を、しかしリカルは顔をふいと反らすと彼女の顔を見ずに歩き出す。急な事でリープは反応が遅れたが、それでもリカルを追いかけるともう一回声をかけた。だんまりを決め込んでいたリカルだが、しつこく聞いてくるリープについて根負けしたリカルは、小さな声で答えた。

「その名前で呼んでいいのはアイツだけだからよ」

「何だそれ。オレが呼んだっていいじゃんかよ」

リカルの答えを聞いたリープだが、それを聞いても納得できなかったのか今度は文句を言ってきた。色々と言ってくるリープの言葉が一度途切れた時、リカルはくるりとリープの方を振り返ると、ニパツと明るい笑顔でリープに答えた。

「何て言われたってダメな物はダーメ。特別な名前は特別な人に呼んでほしいもの」

そう言うとりカルはまた向きを変え、シッポを緩やかにくねらせながら仕事を探すためにギルドオフィスの扉をまた開けて中に入っていた。後ろのリープはリカルの言葉を聞くと一言だけ吐き捨てると彼女の後に続いてオフィスの中に入っていた。

「結局のところはノロケかよ、バカらっし」

5th ACTION 力（大地が眠る場所）

修理の終わったチェイサーに乗り込んだロツクは、そのまま町の外に出ると荒野を南に向かって走っていった。インカム・メットのバイザー越しに目指す目的地を見ると、彼はアクセルを大きく吹かして速度を上げた。しばらく走ると岩肌がむき出しになっている岩山が眼前に現れた。岩山の登山口でロツクはチェイサーを停めると、彼は岩山の山道を登っていった。

やや高い岩山をゆつくりと登ってたどり着いた山頂には、大地の精霊を祀っている小さな社がかしこまるように建っていた。社の前に足を運ぶと、ロツクはまず社の前に立ち目を閉じて両手を組み合わせ、精霊への祈りを捧げた。宗教には興味を持っていないロツクだが、かつて大地の精霊とは深い関係を築いていたため、一応この精霊には祈りを欠かしたことは無かった。ロツクの村の村長は大地の守護者とも呼ばれており、村長になるためには精霊に認められる必要がある。ここにるのがその大地の精霊だ。

「おや、珍しいお客様だ。ようこそ、先代守護者殿」

どこからか聞こえてきた声に、祈りを中断して顔を上げる。そして後ろを振り返ると、そこには大地を表す暗い黄色のローブに身を包んだ、この社に仕える神官の男性が立っていた。

「お久しぶりです。急な旅立ちでこちらに寄る事も出来ず、新しい守護者の任命の時にも出席出来ませんでしたから、遅くなりましたが挨拶に来ました」

「そうですか、それは良い心がけです。そうそう新しい守護者のシリユウ君、しばらく見ないうちに随分と貫禄が出てきましたな。見違えるほどでしたよ」

「本当ですか。そう言っていただけならこちらも鍛えてきた甲斐があったと言うものですよ」

ロツクが神官に頭を下げると、神官もロツクに頭を下げて挨拶を

交わす。そうしてから二言三言、たわいもない話を交えながら守護者の資格の正式な返却やこれからの村の事など、村長だったロックがいなくなった後の村の事についての話を二人はしていた。話が一通り済んだ所で、ロックは右手を出すと別の用件を話し出した。

「実は今日こちらに来ましたのは、あの時私が預けて行きました物を取りに来たからです。あれは今どこにありますか」

先程までの気さくな笑顔も隠し、真剣な表情で問いただすロック。それを聞いた神官も真剣な面持ちで彼の事を見る。互いにお互いの目を見ながら少しの間、神官はローブの中から筒状の金属を取り出すと、それをロックに向けて突き出した。ロックはそれを受け取るうと、無言で腕を伸ばした。

「君は自分の力の大半を封印して、今まで皆のためにその力を使ってきた。その成果は何か掴めましたか？」

金属筒を渡しながら語りかけてくる神官の言葉に、金属筒を受け取ったロックは、受け取った物にじつと視線を落したまま、記憶の中を探るように目を細くしていた。

「……生きる事は戦う事、戦えなければ人を、何より自分を守れない。だから私は戦います。自分の我儘貫く事が自由だと考えてますから、それを邪魔するモノに武器を向ける事にためらいはありません」

「自分の思いのためなら他者と戦う事もためらわない。それは、他者の命を奪う事を是と言う事かな？」

「それは否とします。死闘は、譲れない物のためにお互いが命を張る行為だから、無法だらけのこんな時代だけど、無駄に奪う事はしたくないです。第一そういうの嫌いですし、そんな趣味も持っていませんから」

「自分で言っている様に我儘だね。でもそれも間違っていない。自分を見失わない、強い心で前を見なさい。月並みな言葉だけど、がんばって」

そう言って最後にロックの肩を両手で叩くと、神官はその場を離

れて社の方に歩いて行つた。目的を果たし、ロックもその場を離れようと後ろを振り向き、目に入つて来た景色を見て思わず動きを止めた。

彼の目の前に見えたのは、一面に広がる荒野と子供のころから慣れ親しんできたジャンクオーシャン、その奥には深い青色の海が広がり、水平線の彼方から上にはどこまでも突き抜けて飛んで行けそうな青く明るい空が広がっていた。ロックはその場に立つたままその広大な景色を見ていると、随分前にもこの景色に目を奪われていた事を思い出した。もっともその時は感動では無く、恐怖の対象としてこの景色を見ていたが。

5th ACTION 力（回想／父と子と）

それは十年位前の子供時代。父親についてきてこの山に登った時、夜になつても親の用事が終わらないので暇になつたロツクは外をテクテクと歩いてた。昼間のうちに色々な所を駆け回っていたため、何か見落とした、楽しいものでも無いものかと探究心いっぱい歩いていて自分の村が見える場所があつたので、ロツクは興味本位でこの場所から周りの景色を見た。その時見たものは、一面夜の闇に塗りつぶされた空と海と大地。どこまでも続いている虚無な黒一色の光景は、自分の周り以外の全てを切り取り、やがては自分も飲み込んでしまうのではないかという恐怖心を幼い少年に与えた。

「どうした？こんな所に突っ立って」

瞬き一つの身動きも出来ないロツクに掛けられた声と、彼の肩にかかった重さにハッと意識を引き戻したロツクが後ろを振り返ると、そこにはロツクよりオレンジ色を帯びた黄色の毛並みに少し垂れた耳を持つているネコ族の男性が、黒色のしま模様の入った顔を笑顔でいっぱいにながら、ロツクの顔と自分の顔が同じ位置になるまでしゃがんでロツクの事を見ていた。

「父ちゃん……」

声を掛けてきた男性にそう言うと、ロツクは両手で父親の服をキョツと強く掴むとそのまま俯いた。だが恐怖を感じていたが、素直に怖いと言葉に出す事が出来ず、ロツクは声も出さずにただ同じ格好をしている事しか出来なかった。ロツクの父親も、息子の落ち着かない様子を見て何かがあつた事を察したが、あえてそれが何なのかを聞きださずにいた。しばらくその格好でいた後、おもむろにロツクの父親はロツクの身体に両手を回すとそのままロツクを抱き上げ、そして自分の右肩にロツクを乗せた。突然の事で驚いたロツクは父親の顔を見ると、彼は自分の顔を下から見上げるように見ながら、更に遠くのどこかを見ている様な目をしていた。

「ルーフォ、上を見てみな」

どこを見ているの、とロックが訊ねるより早く話をしてきた父親の言葉に、言われた通りロックは上を見る。さっきまで雲が覆っていて暗かった空は、いつの間にか雲が流れて薄くなっており、その雲の切れ目からは、丸く明るい月が地上に向かって顔を出していた。月が現れると同時に、空は雲の代わりに無数の星に覆われており、空と海と大地をあつという間にか細い光で包みだしていた。

「……すご……」

「な、すごいだろ」

満天の星空を見て、素直な感想を漏らすロック。それを聞いて声をかけてくる父親に、ロックは首を縦に振って応えた。

「世界は色んな顔を持っている。笑う時もあれば怒る時もある。時には怖く見える時もあるけど、世界は本当はこんなに綺麗な物なんだ」

ゆっくりとした口調で話しかけてくる父親の声を聞きながら、ロックは星空を余すことなく見ようと色々な方向を向いてみた。三つ見える月の一番大きい月に手を伸ばしてみると、はずみで爪が少し飛び出た。その仕草を下から見上げながら、ロックの父親は後ろを振り返ると、ロックを肩に乗せたままゆっくりと山道の方へと歩いて行った。

「お前が冒険者になりたいんだったら、世界のそういった所と向かい合うようにしな。何にでも興味を持って、楽しいと思う事。それが冒険者の力の源だっさ」

5th ACTION 力 『さようなら』

啜えているキセルを吸い込むと、先端に詰められた火のついたハ
ーブの煙が口の中に入ってくる。一度飲み込んだ煙を吐き出すと、
ロックはキセルを口から離して外の景色を見ていた。父親とここへ
来たのはあの時一度きりで、その次にここに来たのは次代襲名の時、
レインと一緒にだった。その時から年に一度はやってきてはいるが、
あの時父親と見た星空はあれきり見てはいなかった。

「……十年ちよつとつて、意外と早く過ぎるんだな」

自分でも気がつかないほどの小さな声で呟くロック。その時偶然
インカム・メットから通信の呼出し音が聞こえてきた。あまりにタ
イミングが良かったので、少し驚いてシッポを勢いよく動かしたが、
それほど驚いた訳でもないのですぐにインカムに手を伸ばして通話
状態にした。

「あ、繋がった。ロッカー、聞こえるー？」

「リカルか。リープに引っ張られて軍資金稼ぐとか言ってたけど、
どんなもんだ」

「ばつちりよ。空間の魔力以上噴出ポイント、オーバースポットの
安定化作業してきた。あれ結構いい金額の仕事になるのよね」

リカルの言葉にそうかとだけ声をかけたが、内心ロックは驚いて
いた。オーバースポットとは、高密度の魔力が定期的^{マナ}に吹き出して
いる地帯^{フォース}の事である。この世界の魔法は、空間の魔力と魔法を使う
使い手の理力、この二つの力を組み合わせる事で生み出されている。
そのため魔力の密度が強いオーバースポット周辺では使った魔法の
威力が増大するという現象が良く起きる。だが強すぎる魔力は生物
の身体に悪影響を与え、最悪の場合は体そのものが別の物に変わっ
てしまい、いわゆる怪物^{モンスター}と言う物になってしまう。

そうなるのを防ぐためにスポットのマナの噴出量を安定化させる
必要があるが、スポットの特性上この作業はとても難しい。最悪作

業員がモンスターになる事も珍しい事ではないからだ。その作業を彼女は、まるで小遣い稼ぎのお使い程度みたいにやつてのけたのだから、ロックで無くても驚くだろう。改めてリカルの技量の^{レベル}の高さを知って感心していたロックが意識を現実に戻すと、当の本人はまだ話し足りないのか会話を続けてくる。さすがにロックもうるさく感じた時、スピーカーから聞こえてきたリープの声が彼女の会話を遮った。

「ちよつとリンちゃん、自慢話は後でゆっくりして、とりあえず伝言を済ませなつて」

「あ、そうだった。あのねロック、レインのおじさまが帰つてきたら自分の家に来るようにだつて。お別れ会してくれるつてさ」

「レインさんが？わざわざそんな事しなくていいのに」

「人の好意は素直に受け取つとけつての。オレ達はこの足で直接行くから、ロックもすつぽかさずにちゃんと来いよ」

そうリープが話を締めると、二人からの通信はそこで途絶えた。あまり派手な事をしてほしくなかったロックは、話を聞いて少し困った様な顔をしていたが、それでも本気で嫌がつているわけでもない。ここで、ここはリープの言葉を借りて素直に好意を受け取っておこうと決めると、キセルの中のハーブの灰を携帯灰皿に落としてから、元来た道を歩いて山を下つていった。ふもとに着いた時、ロックは山の頂上付近を見上げると、小さな声で一言、ハッキリと言葉を出した。

「さようなら」

6th ACTION 送別会(可愛い子)

ステップの町に戻って来たロックが、チェイサーをシャインウェーブ号に格納してからレインの家に着いたのは、日が傾いて夕焼けの赤と夜のぼりの濃紺とした色が空で混ざり合いだした頃だった。途中でギルドオフィスに立ち寄り、リカルがしてきた仕事のレポートを見てきたが、ロックの目から見ても非の打ちどころのない作業内容で、彼女の言葉に誇張が無い事を知ると、ロックはまた無意識のうちにリカルに感心していた。

手ぶらで行くのも居心地が悪いので、手土産に花屋で花束を買うと、レインの家の扉に手をかけた。彼の家は主に労働者相手のリーズナブルな食堂で、彼の奥さんが仕切っている。この時間は仕事帰りの労働者や、これから仕事の夜勤の人が食事のためにやってきて、店の中はいつも半分以上は埋まっているが、今日は扉の前に貸し切りの看板が立っていた。

わざわざここまでしないでいいだろと思いながら、ロックは扉を開けて店の中に入る。奥行きのある、結構広い店内では、シャインウェーブ号に乗り込んだコーラル達を初めとするモビス島出身のクルーと、ステップのギルドオフィスに所属している冒険者達が、立食スタイルの店内で気ままにくつろいでいた。その人の数の予想以上の多さに、足を踏み入れたロックは思わず呆気にとられて前に進む事が出来なくなっていた。

「何でこんなに人呼ぶんだよ、何考えてんだ」

「いらっしやいませ。お客様一名ご案内です」

「主役がこんな所で立ちぼうけてちゃダメですよ、お客様」

思わずうんざりとした口調で声を出したロックだが、その声は周りの喧騒にかき消されてしまい誰もロックの到着を知ることには無かった。とりあえずレインに会おうと考えたロックが固めていた足を動かかそうとした時、彼の隣から二人の少女の声が聞こえてきた。聞

き覚えのある声に振り返ると、ロツクは顔をほころばせながら声の主たちに挨拶を返した。

「よつ、パーラちゃんにプラムちゃん今晚は」

パステルイエローの給仕服^{メイド}で現れた二人のネコ族の少女はレインの娘達で、レインと同じ黒色の毛並みを持つている子がパーラ、そして白色に黒の斑が混ざった毛並みの子が妹のプラムである。彼女達は母親の経営しているこの店の従業員であり、ロツクも彼女達が小さいころから知っている仲だった。ロツクは、これ、お店にでも飾ってね。と言いながら手に持っていた花束をプラムに渡すと、席に案内するとパーラが歩き出したのでそれについて行く。その時ロツクは離れた所、照明の陰に隠れて見えない所にもメイド服姿のウエイトレスがいる事に気がついた。その子は下に俯いてその場から一歩も動こうとはしなかった。

「何あの子、何だか仕事に慣れてない感じみたいだけど、臨時のバイトさん？」

ロツクの言葉にパーラがその方向を向くと、苦い顔をしながらその子の所まで小走りで近づく。パーラとその子がお互いを言い争っているが、やがてパーラがその子の腕を掴むと無理やり引っ張ってロツクの前までつれてきた。

「この子私の友達で、今日遊びに来ていたから手伝ってもらっているの。ほらちゃんと挨拶して」

「う、あ……。い、いらっしやいませお客様」

レイに促されて、目の前の少女は下を向いたまま、やや上ずった声でロツクに挨拶をした。接客業にはあまり良くない態度なため不審に思っていたロツクは、その子の声に何故か聞き覚えがあるため首をひねっていたが、隣に立っているパーラと比べてその子の背が高い事に気付くと、もしかと思ったロツクは恐る恐るその子に声をかけた。

「……ひょっとしてお前、エトか？」

ロツクの言葉にビクツと身体とシッポを大きく跳ねあげたかと思

うと、ウエイトレスはゆるゆるとその顔を上げた。そこにいたのは紛れもなく見知った顔の少年、ロックの弟のエトだった。

「お前なんでここにいるの。てか、また随分可愛くなったな」

「……見ないでくれ、ロック兄」

ロックの言葉を聞くと、エトは体をプルプルと震わせながら顔を下に向けてしまう。ロックより少し明るい黄色の毛並みの彼には、少女達とおそろいのパステルイエローのメイド服が同色系でありながら映えて見せていた。頭はいつもの短髪では無くゆったりとしたウェーブのかかった長髪にヘッドドレスを付けており、びっくりして膨れているシッポの先端にはワンポイントチャームとして、黄色の彼の毛並みに合う薄い青紫色をした、今女の子達に人気のあるリボンを巻きつけていた。

「エトちゃん、業者にレストアしたパーツを納めに来た帰りにうちに寄ったのね。そのうち父さんが帰ってきて、ロックさんの送別会するからって準備を始めて。エトちゃんも初めは普通に手伝っていたんだけど、母さんがそこにやってきて、私達と一緒に給仕してって頼んできて、その時に……」

最後の方を言い淀んだパーラを見ておおよその理由を知ったロックは、まだ下を向いているエトの頭をポンポンと、子供をあやすように軽く叩いた。

「お前はホント、オレ達より毎回いいようにいじられてるよな。この髪力ツラか？」

「ゴメンねエトちゃん。母さん、可愛い子好きだから。エトちゃん着飾らせると女の子みたいだからって、なおさら歯止めが効かなくて」

「もう勘弁してくれよ。ロック兄もパーラもおばさんに言ってくれよ。オイラからじゃいくら言ってもおばさん全然聞いてくれないし」

「それで済むならとくに終わってるな。ま、皆が通って来た道だから、あの人に飽きられるまでは大人しくしてるのが一番だよ」

弟の姿に笑いながらも同情するロックと謝罪をするパーラ。それでも当のエトは浮かない顔で二人に不満をぶちまけ、二人に助けを求めてきたが、兄の無慈悲な言葉を聞くと、はあ、と深く溜息をついてその場からとぼとぼと歩いて行った。エトはしばらく使い物にならなそうだったので、パーラはエトを後で見る事にしてとりあえずロックの案内を続けるために歩き出した。ロックも弟をこれ以上刺激する事も無いだろうと思って、この事にはそれ以上触れる事無く彼女について行った。

6th ACTION 送別会（父が残したもの）

ロックが案内された席には、周りの立食スタイルと違ってテーブルの上にたくさん料理が乗っており、このパーティの主宰者であるレイン夫婦とロックも面識のある、ステップのハンターギルド所属のベテランハンター達、コーラルと数人のクルーとリカルが座つて、テーブルの上の料理に手を付けていた。レイがロックの到着を一団に伝えると、レインが席から立ち上がり、自分の向かい側の空いている席にロックを招いた。

「レインさん、フィリオさん」

「よう、来たかルーフォ。今日はわざわざ呼び出してすまなかったな。ホントだったらこつちから出向くのが礼儀だらうけど、今日は会場の設営もこつちもちだからこれでチャラにしてくれや」

「ハーン、ルーフォ君。今日はおばさん、特に腕によりをかけて料理を作ったから思いきり食べてってね」

「お二人とも僕のためにわざわざここまでしていただいて、どうもありがとうございます。それにしても随分と人が集まりましたね、驚きましたよ」

「それだけお前の事を見ている人が多いってことさ。ありがたいと思っておいた方がよいぞ」

賞金稼ぎの元締めである、クマ族のハンターにそう言われると、ロックはその言葉の意味を色々と考えながらも極力自然な笑顔で彼にありがとうございますと礼を述べると、席に着席しようとした。しかしレインがロックのそれを制すると、彼は店中に響くような声で招待客達に挨拶を始めた。

「おーしお集まりの野郎ども、たったいま今日の送別会の主役が到着したので、そいつに一言挨拶してもらおうと思う。盛大な拍手で迎えてやってくれ」

招待客からの拍手を受けると、何も聞いていなかったロックはび

つくりして立ちつくし、何を言おうか一生懸命考え始めた。とりあえず月並みな台詞を思い付いてから話したそうとした時、自分の席の隣から大声が聞こえてきた。

「ロツク遅ーい。アタシが代わりにいったげようか？」

声の主であるリカルがそう言っていると、彼女はすつくと席から立ち上がってロツクの両肩を手で掴んだ。いきなりの行動のため驚いたロツクがリカルを見ると、彼女の体はシツポの先までふらふらと揺れており、顔は赤く上気していた。そして上機嫌の彼女はロツクを無理やり座らせると、そのままの姿勢で挨拶を始めた。

「えー、ではロツクの嫁であるアタシから一言。ハンターとして立派にやっていけるようこいつの面倒を見ますので、心配しないで送りだしてやってください！」

「えっと、そういう訳なのでよろしくお願いいたします」

二人の挨拶が終わると、招待客から再度盛大な拍手が起きた。リカルが肩から手を離れた事を確認すると、ロツクも体の向きを変えて席に座り直した。

「中々いい挨拶だったな、あつちのお嬢さんの方は。お前ももう少しひねった事言えれば良かったのに」

「あんな挨拶にアドリブ入るって言われても困りますよ。それより何でアイツあんなに元気なんですか」

ロツクの質問を受けると、同席者の一人が彼女の方を見る様ロツクに合図を送る。それに気付いたロツクがリカルの方を見ると、彼女は手に持っているボトルの中身を自分のグラスの中に注いでそのまま飲みだしていた。

「誰だ！女の子に酒なんて飲ませたのは」

さすがにロツクもこれはやりすぎだろうと思ったので、同席者全員に聞いてみると、リカルの反対側に座っていたコーラルが、自分の持っていたグラスを置いてロツクの方に身体を向けた。

「初めはオーナー、ジュースとかノンアルコール飲料を飲んでいたのでですけど、自分も飲めるから注いでほしいと言いだして」

そこまで言うとは一度会話を切り、コーラルはレインの方に視線を向ける。

「まあ確かに年齢的にも飲めますしね。そうしたらレインさんがウイスキーの水割り作ってオーナーに出して。初めはオーナーも普通に飲んでいたのですが、そのうちストレートで飲みだして……」

「で、こうなったと。こいつも意外とお調子者だな。それでどの位飲んだんだ」

「ボトル一本開けたわよ。女の子とは思えない位に良い飲みっぷりだったわね」

感心しているかの様に話すフィリオの言葉を聞いたロックは、ネコミミを横に倒して呆れの混じった苦い表情を顔に浮かべた。すぐさまリカルの方に身体を向けると、いまだにグラスをちびちびと傾けている彼女の手から、グラスをひったくった。

「あ、何してんのよ。まだ中身残ってるんだから返してよー」

「もうダメ、ピッチ早いと体壊すぞ。何か別の物にしなよ」

「ヤーダー、飲みたい時に飲むのが一番おいしいんだから、今飲むの」

「ボトル一本開けといて何言ってやがる、オレが許しません。こら、グラス取ろうとすんな。そんなにひつついてくるんじゃないやねえよ！？」

取っちゃイヤイヤとだだっ子のようにリカルはロックに絡みつuki、ロックは右手に掴んでいるグラスの中身がこぼれない様気をつけながらリカルを振り払おうとする。座っていたコーラルが止めようとしたが、面白いからこのままさせてと他の人達に抑え込まれて、身動きが取れなくなってしまった。その間も二人の争奪戦が続いていたが、かなりのこう着状態が続いた事で二人とも息が軽く上がってきていた。

「ねー、良いでしょー。それくれたら身体をモフモフしてあげるからちようだいよー」

「いらねえよそんなもん。酔っ払いにモフつかれたって少しも嬉

しくねえし」

「ちえー。あーもう、分かったわよ。飲まなきゃいいんでしょ、飲まなきゃ」

ついに根負けしたりカルがそう言うと、彼女はロツクから離れて自分の席に着き直した。リカルが離れ、ロツクもやっとの事で手にしていたグラスをテーブルに降ろそうとした。しかしその瞬間、まるで待ち構えていたかのようにリカルの手が伸びてくると、ロツクの手ごとグラスをしつかりと掴んできた。

「飲まないなら中身を処分する。と言う訳だからグラスをこっちにちょうだい」

「はあ？冗談じゃねえ。お前そんな事言つて、グラスの中身を飲み干して処分したとかやるつもりだろ」

「あによ、こっちの考え読みやがって。そんなにアタシの事がわかるのか」

「酔っ払いの考えなんて単純なだけだ。深い意味なんて無いから、そのにやにや笑いを止めやがれ」

「何だかもう騒がしいなー。全く、ロツク兄はどこ行っても変わらず元気だなー」

こうして第二ラウンドが始まった所で、ロツクの弟のエトと、レインの娘のパーラとプラムがやってきて、ロツク達のテーブルにそれぞれ腰をかけた。姿を消していた間にエトは自分の服に着替えてきており、腹部が露出している胸までの長さの黒いシャツにノースリーブのファーコート、下には動物の皮と金属片を張り付けて強度を上げたジーンズをはいており、首からは金と銀のリングを通したネックレスが二本、腰には色々な太さのチェーンが何本も巻きつけられていた。

「お、もう着替えてきたのか」

「お客さん全員来たからもういいかと思って。いいよね母さん」

「いいけど、でも本当にエト君は顔と服の趣味があってないわね。可愛い顔なのにパンク系っていうか、ヤンキーみたいな格好し

て」

「もう許してよおばさん。可愛いつてもそろそろ嫌なのに、女物の服きせるだなんて」

そう言うときトは、イスの背もたれから下に垂らしているシッポを左右にブンブン振りながら、テーブルに載っている鳥のスパイス揚げにかぶりついた。

「だって、ルーフォ君もシリウ君も村長似だったからすぐに男の子っぽく成長しちゃって、面白く無かったんですもの」

フィリオの話を聞きながら、元々母親に似ているためか、よく女の子に間違われてきているトは、迷惑な話だよなと考えると小さく溜息をついていた。

「ほら、賑やかな席でそんなに気を落とさないで。もっと楽しもうよ」

聞こえてきた声に首を動かすと、パーラがジュースの入ったグラスを両手で持ちながらトに差し出していた。一瞬動きの止まったトだが、パーラの笑顔を見ている内に彼自身も顔を緩め、ありがと、と一言言うとき彼女からグラスを受け取った。

「なーんか向こうの二人よりこっちの二人の方が見ていてしつくり来るよね」

トとパーラのやり取りを見ていた一人がそう言うとき、周りの客も口々にそうだなと言いだした。

「娘さんが嫁に行く日も近いってか？もし本当にそうになったらどうするんだ、お父さん？」

軽く酔っ払った一人が冗談交じりでレインに質問すると、彼は手に持っているグラスの水割りを一息で飲んでから、シラフの時の様な真面目な顔をして質問してきた客に答えた。

「娘と結婚するには俺の後を継ぐことが条件だ、だから娘は嫁には出さん。そう言えばト、お前その話考えてくれたのか？」

しっかりとした声で淀みなく答えると、レインはトに話をふって来た。パーラと一緒にまた話しているよと生温かい表情で見えて

たエトだが、こちらに話を振られた事でただよと思いながら、もう何十回話したか分からない答えをまたレインに伝えた。

「おじさん、そんな先の話はまだ早いでしょ。オイラだってこの先どうするか分からないのに結婚だの何だのって」

「でもな、俺としてはお前に来てもらって、ゆくゆくは傭兵隊を継いでもらいたいと思ってるんだよな」

エトが話せばレインも、これまた何十回もエトに言い聞かせてきた事を彼に話す。ステップの元締めは世襲制で、世襲できる後継ぎがない場合は子供の結婚相手が傭兵ならばその人が、そうでなければ傭兵隊に属している人間から選出する事になっており、レインも前の元締めの娘と結婚した事がきっかけで現在傭兵隊の元締めとなっている。

ところが今の傭兵隊は、個人個人の質はいいが組織としての能力を持つている人間がいない状態で、誰を元締めにしてもイマイチだとレインは考えている。そのため鍛えれば伸びそうな若手を傭兵に引きいれるか、自分の娘と結婚させようかとして、まず白羽の矢が立ったのがエトだった。逞しい方と可愛い方とで見た目のイメージとしては似てないが、エトは性格がロツクと似ており、なおかつ腕も立つ。レインも彼の事はそれなりに知っているし、何より自分の娘ともまんざらじゃ無い。そう思ってからレインは、何とかエトの事を口説き落とそうと、自分の娘以上に彼に付きまとうていた。

「おばさん何とかしてよ。これじゃ政略結婚の相談だよ」

「でもうちの人、かなり本気に考えてるしね」

「大体宴会やってるこんな時までそんな話しなくったって……」

「ああもう、しつこい！ だったらオレが処分しちゃる」

レインとエトがあーだこーだと攻防戦を繰り広げていた頃、不意に争っていたもうひと組の一人の怒鳴り声が聞こえてきた。エト達が声のした方を見ると、リカルからグラスをひったくったロツクが、彼女に取られない様にと早口で一氣にグラスの中の酒を飲んでいたら、突然の行動にリカルは抗議の声を張り上げ、コーラルもロツクの行

動を止めるべく叫ぶ。そして周りはロツクの大胆な行動を囁し立てる。

そうしてグラスに半分ほど残っていた酒を一気に飲み干すと、ロツクはグラスを口から離し、次の瞬間むせたのか盛大に咳き込んだ。「何だコレ、こんな強い酒ストレートで飲んだのか。酔っ払う訳だ」

「そんな事よりいきなり一気に飲んだチーフの方が心配ですよ。これ飲んで下さい」

一気飲みをしたロツクを心配したコーラルは、すぐに水の入ったグラスを彼に差し出す。受け取ったロツクは、これも中身を一気に飲んでいく。グラスの水を飲み終えると、ロツクはグラスを静かにテーブルに置いた。

「大丈夫ですかチーフ」

「ええ、僕も強い方ですから」

そう言ったロツクの顔は、アルコールを摂取したため赤みを帯びてきていたが、強いと言うだけあって彼の言動はまだ崩れてはいなかった。

「ロツク、何一人で勝手に飲み始めてるのさ」

「そうだぞロツク。君は今日の席の主演なんだから、まずは年長者からの杯を受け取らないと」

ロツクが酒を飲んだのを見てから、席についていた他の冒険者達が彼に酒を勧めてきた。一氣に来たものなのでロツクも受け切れたものではなく待ってもらおうとしたその時、エトと話をしていたレインが急に話に入ってくると、ロツクの目の前に新しいグラスを一つ置いた。

「みんなの杯の前に一つ、先にこいつを飲んでくれ」

そう言いながらレインが取り出したのは、一本のボトルだった。ラベルに描かれている線画のイラストから、ネコ科の種族用のマタタビ酒だと分かる。レインがボトルの封を切って、ボトルの口をグラスに向けて傾けると、中の無色の液体が、トクトクと小気味よい

一定のリズムを出しながらグラスに注がれていった。

ロックのグラスを酒で満たしてから、レインは自分のグラスの中にも同じようにボトルの液体を注いでいく。そうして二つのグラスに酒を注ぐと、レインはその様子を不思議そうに見ていたロックに改めて向き直ってから自分のグラスを手にとった。

「何でわざわざ新しくボトルの封を切った酒を入れてるのか、って考えているだろ。こいつはちょっと特別な酒だな。これはお前が生まれた時にアニキ、お前の親父さんが買った酒だ」

そこでロックは、ようやくレインが新しいボトルを出した理由に察しがついた。レインに倣ってロックも自分のグラスを手にとると、続くレインの話を待った。

「産まれた子供が酒の飲める歳になったら、こいつを開けて一緒に飲み明かすんだって、笑いながら話していたよ」

「親父、意外とそう言うイベント系が好きだったからな」

グラスを手で回しながら、しみじみとした表情と声で話すレイン。それにつられてロックも静かに語りだす。周りの人達は誰も声を上げる事も無く、二人だけの空間になっていたが、おもむろにレインがグラスを持った手を伸ばすと、自分のグラスをロックの持つているグラスに触れさせた。カン、とガラスのぶつかる高い音に意識を引き戻したロックの目の前では、レインが自分のグラスに口をつけ、その中身をゆっくりと飲んでいく姿だった。彼に遅れてロックもグラスを近づけると、ゆっくり味わうように中の酒を飲んでいく。そしてほぼ同時にグラスの中身を空にすると、二人は同時にグラスをテーブルの上に置いた。

「親父さんの代わり、とはいかないだろうがとりあえず付きあわせてもらっぞ、一日早いけど誕生日おめでとう。どうだ、そいつは」

「親父に意外な趣味があった事が分かりましたよ、とんでもなく強いな」

ロックの漏らした感想を聞くと、それが十六年分の味だよとレイ

ンは答えた。格好つけた言い回しだなと思いつながらロックはボトルに手を伸ばす。その時まで一言もしゃべらずにいたリカルが急に動き出すと、ボトルを掴んだロックの手を掴んだ。

「十六年分の味だなんて、おじさまカッコつけー。あ、でもアタシそういうの結構好きかなー。それよりロック、お酒貰ったんならアタシにも少しちょうだいよー」

「お前ホントにしつこいな。ハア……分かったよ、少しだけだぞ」酒好きのリカルのアマリの強引ぶりについて観念してしまったロックは、彼女のグラスを手にとると、慣れた手つきでボトルの中身をグラスに少し入れ、次に水を多めに入れて水割りを作るとそれを彼女に差し出した。受け取ったリカルはシッポをゆらゆらとくねらせ嬉しさを表しながら、グラスの中身をぐいぐいと飲んでいく。その姿を半ば呆れながら見ていたロックは、自分のグラスにも酒を注ぎ直し再度飲み始めた。

「うーん、このお酒ホントにおいしいー」

「そりゃよかったね」

「優しくて話わかるし、アタシロックの事ホントに好きー」

「ああそうかい、分かったからそうモフつくなよ」

リカルはロックの首に腕を回すと、そのまま彼に抱きつく様に身体ごと預けてきた。抱きつかれたロックは酒の赤みに加えて、リカルに抱きつかれている事に対しての恥ずかしさから、耳まで真っ赤にして押し返そうとしたが、席についていた他の冒険者達がそれを押しとどめて、彼らの事を囁し立て出した。

「あーあ、ロック兄たじたじでやんの。本当に仲が良いな、あの二人」

「そうね、ロックさんも嫌がつてる割にはまんざらじゃなさそうだし」

「あら、あなた達も結構仲がいいでしょう」

皆にいじられている兄の姿を見ていたエトとパーラが素直な感想を口にする、隣に座っていたフィリオが話を振って来た。どの辺

りがそうなのかと思ってパーラの方を見てみると、彼女は空になっていた自分のグラスの中に新しくジュースを注いでいた。そうかと思えばエトの方は、取り皿に料理を少し取ってはその皿をパーラに渡していた。そしてそれぞれの行動に気付いた二人は、同時にあつと小さく声を上げていた。

「ほら、そんな所とかね」

につこりと笑いながら二人を見ているフィリオに、エトとパーラは互いの顔を見た後に少しぎこちない笑顔で笑いあった。

「私はレインほどあれじゃ無いから、普通に応援してるわよ。どうしたいかはあなた達で選りなさい」

「おいフィリオ。何勝手な事を言ってるんだよ」

「お黙り。こんな席でこれ以上子供相手に生臭い話なんてするんじゃないわよ」

フィリオとレインが子供達の事で少し言い合い、ロックは酔っ払って抱きついてくるリカルと、その状況を見てからかってくる周りの大人達との対応に四苦八苦している。そんな光景を見ながらエトは、久々に訪れた穏やかに笑える時間に自然と顔から笑顔がこぼれ、送別会と言う名の宴会の時はゆっくりと過ぎていった。

7th ACTION 『イヤな奴』

トラメイには三つの衛星がそれぞれの周期でトラメイの周りを公転しており、五十日前後ある一月のうち七日間、三つの月が全て空に浮かんでいる時期がある。その三つの月明かりに照らされて、人通りの少なくなった大通りを歩く団体の影。一人は背中に誰かを背負っており、その周りには二人を囲むように何人かが歩いており、その先にも数人の人影が歩いている。真中にいる誰かをぶさっている人は時々ふらふらとおぼつかない足取りをしており、その度に両側にいる人達から身体を支えられていた。

「おっと、大丈夫ですかチーフ」

「わわっ、ロック兄危ねえよ。大分足にきてるな」

誰かをおぶって歩いている少年、ロックが左右にふらふらよるけると、彼の左右を歩いているエトとコーラルがロックの身体を支えて歩く。店を出てから初めてのころはそうして歩いてきていたが、さすがにロックがバランスを崩しそうになる回数が増えてくると二人とも心配になって来た。

「ロック兄、もう無理なんじゃね？ただでさえ酒飲んでてきつそうなのに」

「後は私が代わりますから、降ろして下さい」

「出来ればそうしたいんだけど、これじゃどうにもならないですよ」

前を見ながら歩いていたロックは、二人の声に答えながら背中に背負っていたリカルを背負い直した。あの後、ロックは周りの大人達から酒を勧められ、それを全て受けていたのですっかり出来上がってしまった。一方のリカルも、ロックやコーラルの言葉を聞かずに飲んでいたため、最後にはすっかり酔い潰れてロックにしがみついたまま眠ってしまった。送別会も終わり、彼女を運んで帰ろうとした時、酔いのまわっていたロックに代わって別の人が運ぶ事にし

たため、ロツクに絡めていた彼女の手を外そうとしたが、彼女はそれに抵抗してロツクに強くしがみつき離れなかったので、仕方なくロツクがリカルをおぶって船に帰る事になった。

「しかし始めて見たときや結構おっかなく見えたけど、こうして見るとリカル姉も可愛いもんだな」

「て言うか、べたべたくつつきすぎなんだよコイツ。大体ライオンってかなりプライド高いからこんなに甘える様な事しないはずなんだけどな」

少しトーンの低い声で言葉をこぼしてからロツクが顔を少し後ろに向けると、ちょうど自分の肩越しに、眠っているリカルの顔が見えた。規則正しい寝息を立てながら笑顔で寝ている彼女を見ていると、何故か憎めなくなってきた不思議とロツクの顔もほころび笑顔になっていく。

「幸せそうな顔して寝ていますね、このお姉さん」

エトの隣を歩いていたパーラは、ロツクの顔越しにリカルの顔を見てからロツクに話す。そうだなとロツクが答えると、気持ちよく背中で寝ている少女を少しだけ呆れた表情で見ながら、また前を見て歩き出した。

「全く、好きなだけ飲み食いして、満足したら人の背中の上でノド鳴らしながらぐっすり寝やがって」

「安心してきている証拠でしょう。それだけチーフの事を信用している証ですよ」

「だからってねえ。こっちの都合なんかお構いなしで寄ってくるわ、作らなくてもいい揉め事作るわ、たまったもんじゃない。でもま、大人しくしてりや確かに可愛いんですけどね」

「うるさい」

突然背中から聞こえてきた声を聞いて、ロツクはリカルが起きたのかと体を強張らせた。リカルの事を散々に言っていた事を聞いて何かされるかと思ったが、彼女は自分に回している腕を強くしただけで何もしてこない。コーラルと一緒に彼女の顔を覗き込むと、リ

カルは口元をモゴモゴと動かしながら眠っていた。

「寝てますね」

「何だただの寝言かよ。驚かせやがって」

「……んう。ロック、ロックう」

リカルが寝ている事を確認した二人はまた前を向いて歩き出した。その時リカルが寝言でロックの名前を呼んできた。小さな声だったので聞こえていたのは彼女をおぶっているロックと、背丈的に近い所にいたコーラルの二人だけで、二人は特に意識してはいなかった。が彼女の声に耳を傾けていた。

「ロック、好き、大好き。……ずっと、ずっと一緒に……」

熱烈すぎる彼女の寝言を聞いて、二人は思わず顔を赤くしてしまう。特にロックはアルコールによる物よりも更に顔を真っ赤にしなから、またふらふらとおぼつかない足取りで歩いていた。

「女性にそれだけ好かれるのは、男性としてはもつと喜ぶ所だと思えますがね」

「普通はそうなんですよね、普通はそうなんだけど……」

そこで不意に言葉が途切れ、ロックはだんまりを決め込んだ。話を振ったコーラルも、いきなりのロックのフェードアウトに違和感を感じ、誰にも気づかれない様にロックの顔を伺ってみた。リカルの囁きを聞いて少しふらついていたが、それから立ち直り普段と変わらない声で会話をしていたロックのその顔には、何も読み取れない、強いて言えば顔色の無い様な表情でただ前を見て歩いていた。その顔に一瞬思考が停止していたコーラルだったが、すぐに我に返ると、少し躊躇してからロックに声をかけようと手を伸ばしかけた。

「パーラ！エト！早く早く。早く宇宙船見に行こうよ」

コーラルがロックに声をかけようとしたその時、ロック達の前から誰かがこちらを呼ぶ声が聞こえた。呼ばれた彼らと周りの人達が声のした方を見ると、薄暗がりの中からプラムが大きく手とシッポを振りながらこちらに声をかけていた。遠くのプラムの姿を見ると、エトが同じように大きく手を振りながら彼女に合図を送り大声を出

していた。

「そんなに急がなくてもちゃんと見れるっての」

「そんなに走ると危ないわよ。もう、いつの間に宇宙船に興味持ったのかしら」

「いいじゃないか。何かにそんなに興味持てるってのは、こんな時代じゃ貴重な事なんだから」

そう言うロックはプラム達に追いつこうと歩く速度を速め出した。すぐ隣を歩いていたエトもロックに合わせて速度を上げ、パラも妹の趣味にやれやれと言った顔をしながらエトを追いかけ、そして声をかけるタイミングを失ったコーラルは、先程のロックの表情に釈然としない物を胸に抱えながらも彼らを小走りで追いかけて出した。

宇宙港のドックに泊っているシャインウェーブ号は、昼間のうちにやってきていた工房のメカニック達がすでに改修を済ませており、船体も綺麗にされていた。クルー達は船内に戻っている者や外でくつろいでいる者などそれぞれ自由行動を満喫しており、プラムは宇宙船の中が見れると言う事で嬉々としながら船内に入っていた。

「プラムったら一人で入って行って大丈夫かしら」

「発信器持たせておいたから迷っても探せる、大丈夫だよ。それよりお前ら、本当にこのまま帰るのか？泊っていけばいいのに」

「ええ。ちゃんと帰らないと両親も心配しますから」

「オイラも今日の宿をもう取ってるんだ。荷物も置いてってるから部屋に戻らねえと」

夜も遅くなったため、ロックは今日はこのまま船の中で泊っていけと二人に話をしていたが、二人ともその申し出を断っていた。特にロックに遠慮していると言う訳ではなく、単に二人とも先に予定を立てていたからである。

「部屋取ってあるって、わざわざ宿代出して泊らなくても、レインさんの家にも泊めてもらえば良かったじゃねえか」

「そうよ。一言いつてくれたら部屋位用意出来たのに」

宿を取っているというエトの言葉にロックとパーラがそれぞれ意見をしてくる。ロックはそんな事で金を使ってほしく無かったからパーラはいつも自分の家に泊っている少年が今日に限って別の所で泊ると言う事に納得できなかったから。その二人の質問に対して、聞かれた当の本人の答えは結構的を得ていたものだった。

「あんな酔っ払い達がたくさんいる所に寝泊まりしたら、絶対話のネタにされるし、挙句に席に引っぱり出されてあれこれ聞かれるのが目に見えるかな。オイラは別にいいけどパーラが大変になるから、今日は別所で寝る」

エトの答えを聞いて、ロックはああ、と、とりあえず納得した。ロックも以前、今日の送別会に出席していた大人達から、いい年して彼女の一人もいないのかとか、良かったらフリーの女を紹介してやるのかなどいわれ、その度にロックは曖昧な返事や態度などでかわしてきていた。今日は今日でリカルと一緒にいると、彼女とどこで知り合ったかとか、興味無さそうな振りしてやるじゃねえかなど質問攻めにあった。自分の時でこうだったのだから、パーラと一緒にエトはもっと大変な事になるなという事が容易に想像できたからだ。

「せっかく久しぶりに会ったのに面白くないな。だったら私がエトの所に泊ろうかな？」

「やめて。そんな事ばれたらレインおじさんにボコボコにされちゃう。それよりプラムをそろそろ探さないか」

「そうだな。町に戻るなら、もうそろそろ帰らないと日が変わっちまうぜ」

三人の会話に割って入る声が聞こえ、皆がそちらの方を振り向くと、船の中に入っていたプラムを小脇に抱えながらリープがやって来た。笑いながら捕まっているプラムの首根っこを掴むと、リープはプラムをエトに引き渡し、エトは目の前に突き出されたプラムをパーラと一緒に受け取った。

「船の中すつごく面白かった。ロツク兄ちゃんありがとう」

「どういたしまして、楽しんでもらえて良かったよ。エト、パラちゃんとプラムちゃんをちゃんと送って行けよ」

「分かってるって。ロツク兄も早く背中の人を寝かしてきなよ」

エトに言葉を返され、ロツクは改めて姿勢を直すと背中におぶっているリカルを背負い直した。そのまま船の中に入ろうとした時、パラが何かを思い出したかのようにロツクの背中に声をかけた。

「ロツクさん。父さんとの約束覚えてますか？」

そう言われて動きを止めると、ロツクはレインと別れ際にかわした約束の事を思い出した。リカルを背中に背負っていた時、ロツク達に向かってレインが大きな声で約束だと話していた、その件のことである。

「覚えているよ。明日また会おうって、お父さんに言っておいてね」

ロツクの返答を聞いたパラは分かりましたとだけ言うと、プラムとエトを連れて自分の家に帰っていった。ロツクは三人の後ろ姿が見えなくなるまで見送った後、背中に背負ったリカルとそのまま船の中に入ってしまった。

「ん、うつ、ん」

小さく寝がえりを打った後、まどろんでいた意識が次第とハッキリとしてきて、リカルは目を覚ました。ゆるゆると体を起してベッドに座ると、まだ残っているアルコールで重くなっている頭を片手で押さえた。

「いたた……、調子に乗りすぎたかな」

昨日飲みすぎた事にばやきながら眠い眼を手で擦りながら辺りを見渡し、ここが自分の部屋だと認識する。頭の痛みで耳を倒し、シツポを大きく振りまわして不機嫌を表しながら、頭に付けていたインカムで時間を見ようとしたが手に触れない。インカムを外している事に気付いてからすばやく周りを見ると、ベッドの隣の棚の上に

置かれていた。インカムを頭にかぶり、隣に置かれていた緊急用の携帯端末を手に取ると、リカルは壁にかかっている時計に目を移し、今の時間を確認してびっくりした。

「早！何この時間？まだ太陽も出てないんじゃないの？」

早朝の、仕事中でも無い限り自分では絶対起きないような早い時間に自然に目が覚めた事に驚き、彼女の意識は完全に覚醒した。時間を見て早い様ならもう一度寝ようかと思っていたが、もう寝れそうにない事を感じ、彼女はベッドから降りると冷蔵庫からアイスコーヒーの入ったポットを取り出し、コップに注いで一口飲む。強い苦みと酸味が、リカルの頭を押さえていた酒気を完全に吹き飛ばす。コーヒーを飲みながら、彼女はどうやって帰って来たかを思いだそうと、隣の執務室のデスクのイスに座って確認を始めた。

ロックと別れた後、リープと二人でギルドから仕事をもらうと、二人はさしたる時間もかけずにそれを済ませてきた。その仕事の報酬を受け取る時、オフィスの職員からの伝言で、レインの家に行くように言われた二人は、ロックにその事を伝えてから、一足先にレインの家に向かっていった。彼の家には、オフィスで別れたコーラルを含めて色々な人が来ていた。レインに会ったりリカルが何の用事で自分達を呼んだのかを訊ねると、知人達を呼んでロックの送別会をするとのこと、彼女達にもそれに参加してもらうために呼んだとの事だった。

自分達のために開いてくれたものなので、二人は喜んで参加し、リカルはレインやステップ所属のハンターたちと話をしていた。初めはおとなしめにしていた彼女だったが、そのうち気分が乗ってくると言動が段々派手になっていき、途中から飲み始めたアルコールの効果もあってすっかり話の場を掌握した所でロックが自分達の席にやって来た。その後はロックにずっとべったりとくっついていたり抱きついていたりしていた事は覚えていたが、そこから先の記憶が段々不明瞭になってきていき、レインの家からここまでどうやって帰って来たのか全く覚えていなかった。

「アタシ、ずっとロックに抱きついていたんだ……」

コップを机の上に置き、小さな声でそう言葉を漏らすと、リカルは両手の手の平をじっと見つめ出した。ロックに抱きついた時の感触や彼の体温などあの時の事の覚えている限りの事を思い出していると、自分の心が温かくなるのを感じ、自然と表情が緩んでいった。そのまましばらく、リカルはその感覚に浸っていたが、突然立ち上がるとコップを手に持ち、そのまま大きく伸びをしながらコップを食器洗い機の中に入れた。

「あの子の整備でもしてよ。もう寝れそうにないし」

自分の部屋から外に出ると、昨日引き取って来た戦闘機の点検と整備を行うために、リカルは船の後方にある格納庫に向かう事にした。歩き出そうとしたその時、はす向かいにあるロックの部屋のドアが少し空いていて、中から灯りが漏れている事に気がつく、リカルはドアの隙間から彼の部屋の中をこっそりと覗いてみた。ロックの部屋は個室で、ベッドと壁にはめ込まれている大型モニター、小さな収納棚と冷蔵庫とテーブルだけの小ざっぱりとしたインテリアであり、当の部屋の主はテーブルの上に様々な機械のパーツと工具をひっくり返して何かを組み立てていた。

小さな部品を工具を使って金属の筒に取り付け、時々それを手にとって様々な角度からそれを見てまた同じ事を繰り返す。リカルはロックが手にしている物が、彼の愛用しているエネルギー武器、粒子波動刀の発振機だと気付いたが、その形状はいつも彼が使っている物とは少し違っていた。何故そのような物を組み立てているのかあれこれ考えている時、ふと昨日、ロックが来る前にレインがこぼしていた言葉を思い出した。

「出発させる前に試しておきたい事があるって言うてたけど、そういう事だったんだ」

隙間から顔を引っ込め、ドアの陰で呟いたりカルは、少し考えてから自分の部屋にまた戻っていった。少しして部屋から出てきた彼女は、手に小さな水筒と紙きれを持ち、ロックの部屋の前にそれら

をそつと置くと、立てたシッポをゆらゆらと上機嫌に揺らしながら今度こそ格納庫に向かって歩いて行った。

「ん？」

一方ロックは、粒子波動刀の最後の調整を終わらせ、テーブルの上を片付けようとした時、外から誰かの気配を感じた。こんな朝早くに人がいるのかと思いつながら、誰かいるのかと声を上げながら立ちあがってドアを開けてみる。廊下を見渡してみたが人の影は無く、気のせいかと思って部屋に入ろうとした時、足元に水筒とメモ用紙が置いてあるのに気がついた。どちらにも差し出し人の名前は無く、メモ用紙にはただ一言『がんばってね』とだけ書いてあった。メモを見たロックがまさかと思って水筒の中身をグラスに移すと、中には思っていた通りコーヒーが入っていた。

（リカル、これからの事知っていたのか）

確かにレインさんなら、彼女にだけこの話をしたとしてもおかしく無い。それにリカルも酔っていたとはいえ、断片的に聞いた話を覚えていたと言う可能性もあるかもしれない。そう考えながらロックは、グラスを手にとって中に注いだコーヒーに口をつけた。彼女の差し入れてくれたコーヒーは案の定苦みが強かったが、何かのほんのりとした甘味が苦さを包み込んで、後味の良い物になっていた。苦い物が苦手な自分のために、リカルが何か工夫をしてくれた事は容易に考える事が出来た。そう思うとロックは顔に笑みを浮かべながら耳とシッポを軽く動かし、グラスの中の最後のコーヒーを飲み干すと言。

「イヤな奴」

それは頭の中では認めているし、気を使ってくれた事に感謝もしているが、どうしても素直になる事が出来ない、ロックの少年の部分がにじみ出た言葉だった。もっとも言葉とは裏腹に、彼の態度には嬉しさを表す物が出ているので、ただのてれ隠しの言葉だと言う事は一目瞭然だが。

そうしてリカルからもらった差し入れを全て飲み干すと、ロック

は中断していた後片づけを再開した。片づけながら時計を見ると、
レインとの約束の時間までかなり間があるため、これが終わったら
少しだけ寝ておこうと思ったロックであった。

8th ACTION ネコ達の会話

作業用の強化靴を履いて靴ひもを強く締める。ベッドから立ち上がって、テーブルの上に置いておいたベルトを腰に巻く。両手を組んで、腕とシッポを大きく上に伸ばしてから、掛けてあるロングコートに袖を通すと、丈を短く詰めて絞り、ジャケット状にしてから、ロックは部屋のドアを開けた。部屋の外に出た彼は真っ直ぐ、船の後部に当たる部分にある格納庫に向かって歩いて行った。この船の格納庫は30メートルクラスの小型機やパペットを合計12機収納でき、一度に計7機の整備をコンピュータ制御で行う事が出来る。

船の性能調査を行って確認出来た事を頭の中で復唱しながら、ロックは格納庫に止めておいたチェイサーに向かおうとした。しかし、入ってすぐの所にある工作室の窓から明かりが付いているのを見かけると、まだ朝も早いのに誰かいるのかと気になって、ロックは部屋のドアを開けて中に入ってみた。部屋の中にはたくさんの工作機械が設置されており、さながら小さな工場の様になっている。部屋の真ん中には大きな作業用のテーブルが置かれていて、そこにテーブルに突っ伏して眠っているリカルとリープの姿があった。どうして二人がこんな所で寝ているのか疑問に思ったが、時間も無かったため、ずり落ちてリカルの背中に乗っているジャケットを手に取ると、彼女の肩に掛け直してから部屋を出ていく。そのまま走って止めておいたチェイサーの所にたどり着くと、ロックは起動キーを差し込んでエンジンを回し初めた。

機械が動く大きな動作音が遠くから聞こえてきて、リカルは目を覚ました。テーブルから顔を上げて辺りを見渡し音のする場所を探している、格納庫の方から聞こえてきた事に気がつく。リカルが後ろを振り返ると、工作室から離れた所に止まっているロックのチェイサーに彼が乗り込んでいる姿が見えた。チェイサーのアクセルを一際大きく吹かせてから前進を始めると、ロックは小さな搬入口

から船の外に出ていった。

リカルは外に出ていくロックを追いかける様に工作室を出て格納庫に來ると、一瞬間をおいてから、高いエンジン音が遠ざかっていくのを聞いた。そしてその音が聞こえなくなるまでその場に立ったままだった。

「行つてらっしゃい」

エンジン音が完全に聞こえなくなつてから、リカルはロックの出ていった方向を見ながら声を出す。その直後、少し大きめの欠伸を一つすると、彼女は格納庫の壁に寄り掛かつて瞼を閉じて、再び夢の中へとまどろんでいった。

ここステップは商業都市である。商業都市であるため、この町の中心部は一般の人家よりも商店や会社などが多く、そのため平日には朝だと言つのにたくさんの人達が町のあちこちを駆け抜けていた。特にメインストリートとなる大通りにはその手の建物が多く集中しており、そのため人や乗り物の交通量はハンパないほどになっている。

しかしそれも一本裏道に入つてしまえば全く別の出来事のように感じてしまうほど。現在ロックが走っているこの道が正にそうであり、中小の商社や普通の民家しかないこの通りには大通りほどの人の流れも活気も無い。

冒険者達のギルドオフィスはこの通りに建っており、その隣には主に冒険者達を相手にしている機械の修理工場ガレージがある。元々オフィスのある土地も含めてこの通りの一角はガレージの主人が所有していた土地だったが、町にギルドオフィスを作る時にギルド関係の修理を一手に引き受けさせる事を条件で土地を提供すると話が出た。ちょうど建設場所を探していた方にとつても悪い条件では無かつたので、オフィスはこの場所に建てられた。

レインに呼び出されたロックは、ガレージの中に入っていく、隅の方にチェイサーを止めると奥の方に歩き出した。奥にはこのガレ

ージの主人と作業員、ロックを呼びだしたレインと数人の傭兵が待っていた。彼らのもとに近づいて、ロックが一つ頭を大きく下げて挨拶をすると、それまで黙っていたレインが口を開いた。

「時間ぴつたり。ちゃんと起きてこれたようだな、ルーフォ」

「若いですから。レインさんの方こそ、二日酔いになって来ていないかと思った」

少しばかり嫌味の入ったレインの言葉に返答しながら、ロックも憎まれ口をレインにぶつけた。その言葉に一瞬渋い表情を浮かべたレインだったが、口元をにいつとわずかに歪めると、低い声で小さく短い笑い声を出す。そのレインにつられて、ロックも腰に手を当てながら同じような笑い方をする。初めは小さな声だったが、そのうちどちらからともなく大きな声になっていき、ついには二人で大声で笑いあった。

しかしそれも短い間で、声を出して笑っていた二人はおもむろに腰に下げていた剣の柄に手を伸ばすと、そのまま一気に刀身を抜き出した。ロックは発振機から粒子波動刀を閉かせ、レインは無数の歯車が組み合わさって作られている剣、ギア・ブレードを手に正眼の構えを取った。

「分かっていると思うが、師匠としてお前に与える俺の最後の試験だ。何でもいいから俺から一本取ってみな」

レインとロックの一騎打ち、それがロックがレインに呼び出された要件の内容であった。レインの課題に頷くと、ロックは粒子刀を発振機の上下から発生させ、彼が得意としている二刀一刃の型を作り出す。一方レインは構えていたギア・ブレードを鞘に戻すと、柄の部分についているボタンを押しながら刀身を鞘から引き抜いた。この鞘の内側には無数の突起が付いており、鞘から抜かれた刀身の歯車はその突起に当たって回転、高速で回転する歯車はそれ自体がエネルギーを帯びて鋭い切れ味を持つ刃になる。ガジェットソードと言う、この鞘と剣はLost以前の先史文明の遺産として、修復された物、または量産されたレプリカがこの世界に出回っている。

それぞれ剣を構えたまま、二人とも動く事無く時間が過ぎていく。攻撃をするための間合いに入るには、相手の間合いに踏み込んでいく事になる。不用意に踏み込めば相手からの攻撃を受ける事は確実なので、相手に近づくための隙を探すと言う、無音の戦いが繰り広げられているのだ。

互いに相手を睨みながら、時間は三十分を経過した。時々、フェイントのために少し動いてみる事があるが、どちらかが一步前に動けば相手は一步後ろに下がる、右に動けば左に動くと、常に一定の距離を取り合っていた。元々相手の手の内をあらかじめ知っている二人にとっては相手に合わせて後から行動した方が有利になるため、出来るだけ先に動かたくは無い。相手の動作を探りながら時間だけが過ぎていく状況の中、初めにロックが動き出した。

レインが一步踏み込んだ時、ロックはその足の動きに合わせて一步前進して間合いを詰めると、そのまま身体のパネを使い低い姿勢で一気に飛び込み、あっという間にレインの間合いの中に入っていた。しかしロックの動きを見ていたレインはその動きに慌てる事も無く、剣を片手で持ち直すと半歩身体を後ろに下げながら、ロックめがけて突きを放った。

目の前に迫ってくる剣の切っ先を瞬時に見極めると、ロックは粒子刀を軽く振るって剣の軌道を反らして攻撃を避け、レインが身体のバランスを崩した隙を突いて彼の後ろに回り込んだ。剣を弾かれ右にバランスを崩されたレインは、すぐに振り向いてロックを追いかける様な事はせずに、前に数歩駆けこんでから身体を捻ってロックに振り返った。瞬間、レインの目には、今まで自分のいた所に横からなぎ払うロックの斬撃が見えた。ジッと何かがかすめた音が聞こえ、毛が数本散乱しているのをレインは見た。避けたつもりだったが、彼のシッポの先に剣の切っ先が当たり、シッポの毛が刈り取られてしまっていたのを見て、レインは少し冷や汗を流した。

無理に振り返れば攻撃を受け止められない、だからレインはあえて距離を取ったのだ。もちろんロックもそれを知っていた。そ

のためレインに攻撃を避けられた瞬間にはレインの方に駆けだして左斜めからの袈裟切りの動作に移っていた。

体勢を直したレインも剣を構え直すと正面から切り込んで行った。二本の剣の刃がぶつかり火花が飛び散る。ぶつかり合う剣の衝撃が二人の剣を弾き飛ばし、飛ばされた剣を握り直しては再び相手に向かっていく。攻撃の方法も上から振り下ろす、横から払い込むなど多彩な剣の動きに加え、相手の剣を受け止めた後身体を使って相手を押し込んだり、空いている手や足を使って打撃を与えたりと、格闘を織り交ぜながらの多種多様な物となっていた。

「しばらく見ないうちに、結構やる様になって来たな。まあもつとも、この位出来てくれないとこつちも教えた甲斐が無いってもんだけだな」

二人が剣を交えてツバ競り合いを行っている時、突然レインが口ツクに話しかけてきた。二人とも休むことなく激しい動きをしたにもかかわらず、彼らの呼吸は上がる事無くまだまだ平然としていた。特に口ツクより歳が上のレインがバテていないため、彼の言葉に見える余裕はかなりのものだった。

「いや残念ですよ、もつと早く勝負がつくかと思っていましたから。これじゃ帰ってもう一度眠る時間もありやしない」

「そんな簡単に倒せると思っていたのか？ だったら甘いな。どうして俺が今日、この剣を使っていると思う？ お前の剣に対抗できるからだ」

言葉を言い終えると同時にレインは強引に剣を振るって組み合いの状態から抜け出すと、その勢いを使って口ツクに連続攻撃を仕掛ける。片手や両手、色々と持ち直しながら繰り出される様々な方向からの攻撃に、さすがの口ツクもどんどん追い詰められていく。しかし、レインが突きを出そうと剣を後ろに引いた時、その瞬間を突いて口ツクはレインの剣を持っていない方の手の方向に真横に飛んでその攻撃をかわすと、そのままバックステップでレインと距離を取って彼の攻撃を終了させた。

「避けてばかりか。まあ、決定打が無い以上そうなるな」

ゆらりと身体を動かすと、レインは身体を低く構え、片手で剣を持つとそれを腰の近くで構え出した。

「粒子波動刀の特徴にして弱点は、実際に物を切っていない事だ。粒子波動エネルギーの触れた物質は、エネルギーの干渉によってその分子構造を崩壊させられ壊れていく。その干渉が高速で行われていくから、見た目には剣が物を斬っている様に見える。ここで問題なのは、エネルギー系の運動している分子は干渉しにくいと言う事。粒子波動刀はエネルギー物質にも干渉できるが、エネルギーは分子の運動によって性質が変わるため、そのエネルギーに効率よく干渉でき無くては斬れないと言う事だ。このガジェットソードは、刀身のギアのかみ合わせを変える事で速度を変えて、運動エネルギーの性質そのものを変える事が出来る。何でも斬れるその剣でも、常に変化する粒子は簡単に斬れないぞ」

構えながら、ゆっくりと移動してくるレイン。彼から目を離す事無く距離を取ろうと後ずさるロック。自分の武器の弱点を指摘され、不利になったのは明らかなのだが、彼はそんなことすら楽しむための材料にしているのか、目をららんと輝かせながらヒマワリ色のシッポを左右にゆっくりとくねらせ出していた。

「だったら試してみますか。次の一撃で、僕がその剣を斬る事が出来るかどうか」

その一言は、レインの目を一瞬丸くさせるのに充分だった。少し揺さぶりをかけてやろうと思つて語つた講釈はまるで通用せず、それどころかロックは、その言葉を自分を挑発するための材料にしてきた。ハツタリかどうかを見定めてみようかと思つてみたが、ロックの表情は先程と変わらない、好奇心いっぱい、悪戯心いっぱいといった、人を喰つた様な笑顔をされていてその心情は読めなかった。

「大したハツタリだな。いいぜ、乗つてやるよ。ルーフォの身体に新しいキズがつくか、大枚はたいて卸した新品叩き折って俺の懐に大打撃与えるか、二つに一つの一発勝負だ」

「さすが師匠、乗ってくれるね。その位やらなきゃ面白く無い！」
鋭く言い放つとロックも自分の剣を構え直し、後ろに下がるのを止めるとレインを正面から睨みつけた。その状態で二人とも、初めの時の様にじりじりと動きながら、相手の出方を伺いつつ攻撃のチャンスを待っていた。二人の戦いを見物しに来ていた傭兵達やガレージのメカニックも、二人の次の一撃で勝負を決めると覚悟した気迫に吞まれて、通常では感じえない緊張を感じていた。傭兵の一人がビンのジュースを飲んだ後、隣に立っていた同僚の傭兵に声をかけようと彼を肘でつついた時、二人の戦いに見とれていた彼はそれに驚いて身体を反応させると、腕に抱えていたジャンクを床に落としてしまった。

物凄い大きな音を立てながら床に散乱するジャンク。その音を合図に、レインが弾ける様に駆けだした。ネコ族の脚力であつという間にトップスピードに乗ると、彼は一気にロックの目の前に飛び出した。それに対してロックは、レインが駆けだしたのを見ると粒子波動刀の出力を変更した。すると桜色をしていたエネルギーの刀身が徐々に明るくなり色も変わりだし、数秒後には夏の空の様な、抜ける様な青色に変わっていた。

「うおおーっ！！」

腹の底からガレージ中に響き渡る声を発しながら、レインはロックに必殺の突きを繰り出す。

「これがこいつの本気だ、喰らえ！！」

レインめがけて床を蹴りだし勢いよく駆けだし、両手に持った粒子刀を頭上にかざすと、ロックは彼の剣めがけて渾身の一撃を振り下ろした。ガジェットソードの切っ先と粒子波動刀の刃が激突。ぶつかった部分がフラッシュの様な閃光を放ち、ガレージ内を一瞬まぶしく照らし出す。突然の光に目が眩み、周りのギャラリー達は光から目を背け出した。その光が収まるとほぼ同時にギン、という金属音が聞こえてきて、一瞬間をおいてから今度はガラガラとたくさん何かが床に落ちていく音がガレージに響きだした。

ようやく視力が戻ってきたギャラリーの人達がロックとレインに目を向けると、そこには振り下ろした粒子刀をガレージの床に突き刺したまま止まっているロックと、ギアがばらばらに吹き飛び柄だけになつてしまった剣を握りしめ、今起きた事が信じられないといった表情で立っているレインの姿がそこにあった。しばらく二人ともそのままの姿勢で止まっていたが、二人が同時に大きく息を吐き出すと再び動き出し、それぞれ自分の剣をしまいだした。その後レインは床に散らばったギアの欠片を集め出し、彼の剣を折ったロックも自分から欠片拾いを手伝い始めた。

「あーあ、まさか本当にぶった斬られるとは思わなかった。ルーフォ、お前一体何をしたんだ？」

「別に。特別な事とか特殊な技とか、そんなものは全然ありませんよ」

散らばった破片を腕に抱えながら立ちあがると、レインはそうロックに訊ねて来た。それに対してロックは、やはり剣の破片を抱えながら立ちあがると、特別な事は無いとあっさりとした口調でレインに答えていた。そっけない態度を取られたレインは、そんな事無いだろともう一度ロックに訊ねてみると、彼は抱えていた剣のジャンクをレインに渡してから、ピツと人差し指を立ててみた。

「一つだけ。昨日こいつのコアユニットに、本体ユニットを組み込んで本来のパワーが出せる様にした。どんなに粒子の質を変えられても、それ以上の出力でもって高速攻撃を行えばどんな物質も斬る事が出来る」

そう言つとロックは、先程しまった粒子刀の発振機を取り出してレインに見せてみる。片手ですっぽり隠せるほどの大きさだった発振機は、今は両手で持ってもまだあまるほどの長さがあり、直径も大きくなって全体的に頑丈なイメージを持たせる物になっていた。

「甘く見ましたね？」

そう言つたロックの顔は少し目を細めながら口元を小さく開けるとしてやつたりと言わんばかりの顔でレインに笑いかけた。レイン

はそれを見て頭をかくと、全くだと苦笑いをロツクに返した。

「やっと用事が終わったようだな。そのクス鉄はみといてやるからあつちに置いときな」

聞こえてきたしわがれの声に二人が振り向くと、ガレージの主人がスパナで肩を軽く叩きながらやっと終わったといった様な表情で二人を迎えた。ガレージの主人は、レインが抱えていた剣の破片を指さしてから空いている机を指差した。言われた所に二人が破片を置くと、ガレージの主人が二人に飲み物のペットボトルを渡してきた。ロツクはボトルを受け取るとフタを開けて中身を飲みだした。同じくボトルを受け取ったレインは、手に取ると同時にガレージの主人に頭を下げた。

「どうもありがとうございます。こんな事街中で出来る所はここくらいしか無いですから」

「悪かったなじつちゃん、朝から仕事の邪魔しちゃって」

ロツクも後ろから主人に謝ると、彼は長い鼻先を指でなぞりながら声を返してきた。

「いいってことよ。その分ウチに仕事回してくれりやな」

な、といった顔でレインを見ると、彼はアハハと乾いた声で笑い声を出してから、手にしたボトルの中身をおる様に一気に飲みだした。しかし主人の言葉に動揺していたためむせてしまい、口の中の飲み物ごと盛大に吹き出してしまっていた。

「アハハハ、ちょ、何やってんですかレインさん、慌てすぎですよ」

レインの突然の異変を見ていたロツクは、初めは茫然としていたが、次第にそれが笑いに変わって行ってついには腹を抱えて笑い出してしまった。その場にいた他の傭兵達もロツクにつられて笑い出し、ガレージの職員に背中をさすられていたレインも、落ち着いてきてから耳を横に寝かせて照れ笑いをしていた。しかしそんな和やかな時間は、突然の闖入者の手によって破られてしまった。

『やい、ロツクとか言うネコ野郎！聞こえているか！！』

突然響いてきた大きな声。敵対心むき出しの怒鳴り声でケンカ腰の態度に、その場にいた全員が驚いてその場に凍りついてしまった。

「な、何だ今の声」

「公共放送用のスピーカーから聞こえてきたぞ」

まだ状況が飲み込めていないが、それでも確認のために動き出した冒険者達の動きの速さは流石であった。

「この声、昨日のリユウとかつて奴の声だ」

「昨日お前に絡んできた、ウサギのアイツか」

声の主を思いだしたロックが叫ぶと、レインも昨日の事を思い出してロックに声をかけていた。昨日の出来事から行って穏便に事が済むとは思っていない二人は、この声の主が何を言い出すのか、半ば緊張と、半ば期待を持ってその先の言葉を待っていた。

9th ACTION ウサギの雄叫び

「やい、ロックとか言うネコ野郎！聞こえているか！！」

町が動き始めた朝の通勤時間帯に突然聞こえてきた街全体を揺るがすほどの大きな声。町の公共放送用のスピーカーを使って流されているこの声は、ステップの町にいる人達全員の耳に入ってきた。

「昨日はよくも、俺様に恥をかかせてくれたな」

ハンターギルドはこの異常事態に対し、スピーカーから聞こえてくる声がどこから聞こえてくるのか、またしゃべっているのが誰なのかを調べるために、町中のハンター達が総動員でステップ周辺を走り回っていた。

「このままじゃこつちの気がおさまんねえ。だから決着をつけようじゃねえか」

表から聞こえてくる少年の怒鳴り声と、自分の周りでたくさんの人が走っている足音でリカルが目覚めると、彼女は自分の側を通り過ぎようとしていたクルーの服を掴んで自分の近くに引き寄せた。「ちよつと何なのよこの騒ぎ。出航まではまだ時間があるんじゃないの？」

引きとめられたイルカ族の成年クルーはリカルの質問に答えようと彼女の方に顔を向け、次の瞬間恐怖のため表情を歪めていた。寝起きのリカルは、変な形で起こされた事でとても不機嫌になっていたため、元々鋭さのあるツリ目を針の様に更に鋭くして、大きく鋭い牙もむき出しにしていた。そんな顔で睨まれたのだから、声をかけられた方は下手な事を言ったら食べられてしまうのではないかと気が気じゃ無かったが、更にきつい眼で睨まれ、とりあえず何かされる前と思って大急ぎで状況を説明し出した。

「は、はい！えっと、町の公共放送に使われるスピーカーから大音量で声が流れてきて、その内容がロック副長宛ての果たし状なんで

すよ。それで異常事態だから、町全体が緊急警戒態勢を取るそうです」

「果たし合い？ ロックに？ 一体どうなってるのよ。て言うかロックに話聞けばいいじゃない。ロックはどうしたのよ！」

「ひいつ。いません、船の中にはいません。ドックの中は今別の連中が探しに行ってます。とにかくこちらでも状況がまるで分からないので、副長から直接説明を聞きたいのですが……」

クルーからの早口の説明を聞いたリカルは、掴んでいた彼の服を離すと頭に付けているインカムでロックのインカムを呼出してみた。しかし緊急事態のため様々な人が通信を使っているためか、リカルの呼出しはロックに繋がる事がなかった。

繋がらない事を確認したりカルは立ちあがると、インカムを連続リダイアルモードに切り替えてから、今の状況を確認するために急ぎ足でブリッジへ向かった。

「それにしても惑星^{ほし}から外に出るって大事な時にろくでもないトラブルに巻き込まれるなんて、アイツ何かに憑かれてんのかしら」

「じゃ、これ宿代な」

「ほい確かに。じゃこれはお釣りな」

町の中央部に近い所に建っているビジネスホテルは、素泊まり専門で安く泊まれるので、仕事で町にやって来た、寝泊まりする事に特に気を使わない人達が宿泊に使っている。エトもその一人で、昨日の夜ロック達と別れた後、彼はパーラとプラムの姉妹を家に送ってからこの宿に戻るとそのままベッドの上に倒れる様にして眠りについた。そのまま朝まで眠っていた彼は、少し前に目を覚ますと簡単な身支度だけを整えて、チェックアウトを済ませていた。

「今日もいい天気だな。たまには雨でも降ってくりゃいいのに」

外を見ると太陽がかなり高い位置まで昇っており、降り注ぐ日の光に目を細めると、エトは大きな欠伸を一つしてから外の喧騒に耳を澄ませてから宿の外に出た。

「トラブルだけは、いつでもどこでも降ってくるから嫌だよな」

『町の外の荒野で待つ！逃げたり仲間を連れて来たりするなよ』

先程から聞こえてくる、兄に向けての宣戦布告を聞きながら外に出てくると、エトは手に持っていた大きな剣の鞘を腰に吊るしてから大きく身体を伸ばした。

「あ、いたよお姉ちゃん」

「ホントだ。おい、エトちゃん」

聞きなれた声の聞こえてきた方向を見ると、パーラとプラムの姉妹がエトの方に駆けてくるのが見えた。今日の彼女達は実家の制服ではなく普段着で、パーラはパステルグリーンのシャツの上からピンクのキャミソールに、太ももまでのスカートに中にスパッツをはいており、シッポの先には彼女の黒い毛並みに良く映える、真っ白なりボンを短めに結び付けていた。一方プラムの方はハンターが好んで着る様な厚手のフラインジジャケットに、膝のあたりまで丈のある革製のスカートをはいていて、それぞれ趣味は違っているが、動きやすい服装をしていた。

二人の呼ぶ声に合わせて、エトは片手を大きく振って彼女達に挨拶をする。彼の近くまでやって来た彼女達も口々におはようと挨拶をしてくる。三人そろった所で、彼らは目的地に向かって歩き出した。今日は宇宙に出発するロックを見送ろうという事で、提案したプラムを先頭に宇宙港に向かっていった。最も提案したプラムは、ロック達の船が飛び立つ所を間近で見たいのもあるから、そんな事を言いだしたんだらうなど、残りの二人は考えていたが、エトもパーラも見送りを断る理由が無いので、はしゃいでいるプラムと共に歩いていた。

「エト、今日は一人で起きれたんだ。いつもお姉ちゃんが起こしに行くまで寝ているのに」

「それはな、表が急にうるさくなったら、ゆっくり寝ている事も出来なくなっただからだよ」

いきなりプラムから質問をされると、エトはやや不満げな表情で

ぶつきらぼうに言い放つと、次の瞬間大きく口を開けて欠伸をした。隣で二人のやり取りを見ていたパーラは、それを見てクスリと小さく笑うが、またスピーカーから聞こえてきた声を聞くと、ミミを横に倒してから少し真面目に何かを考え出していた。

「確かにすごく迷惑よね、この行為。一体どうやってこんな事してるんだろう。ねえエトちゃん」

一人で何かを呟いていたパーラに突然呼びかけられ、プラムと話をしていたエトは会話を止めると、何と聞きながらパーラの方に顔を向けた。

「この声の人、ロックさんと呼んでいるけど、ロックさんこの人の言う事聞くのかな」

「行くだろうな。売られたケンカは売り返せて、逆にケンカ吹っかけていく位にワイルドな性質だから」

エトの言葉に、普段自分の知っているロックの意外な一面を垣間見たパーラは、意外といった顔でそうなんだと応えていた。その時遠くから早くと声が聞こえてきて、二人が声のした方を見ると、いつの間にかプラムが二人から離れてかなり先の方まで移動していた。早く早くと更に二人を呼んでいたプラムに、危険だから一緒にいてと声をかけながら二人は彼女を追いかけた。

『もつとも逃げようとしても無駄だぜ。変な動きをする奴がいたらこいつが黙っていないからな』

「全くバカどもが、自分の都合しか考えやがらねえ」

スピーカーから聞こえてくる声にうんざりしながら、都市自警団長のトカゲ族の男性は自警団本部の椅子に座ったまま、爬虫類族特有の先割れの舌をチロチロと出しながら愚痴をこぼしていた。彼は昨日のロックの送別会に出席していた人物の一人でもあり、ロックの事は良い所も悪い所も知っていた。ロックはケンカや真剣勝負などバトルに強いが自分から人と争う様な事はしない。しかし彼は基本的にトラブルを楽しむ性格をしているので、他人からちょっかい

を出されると面白がってそれに乗っかるというのはた迷惑な一面も持っている。

「ハンターギルドと連携して冒険者ロック・ラジファストを搜索、発見次第私の名前で拘束しろ。今アイツに出て行かれたら厄介な事になる」

呼び出されている事を知れば、ロックは意気揚々と殴りこみに行く事を予想していた団長は、その前にロックの身柄を押さえ、後は自警団とハンターの力で事件を解決しようとしていた。しかし今の一言がスピーカーから流れ終わった時、この状況は一変してしまった。

「何だコレ、団長、リーダーに影が出ました」

リーダー監視をしていた団員の声に反応した団長は、すぐに自分のデスクに置いてあるディスプレイを開いてリーダーの映像を引っ張ってきた。そこには熱感知型のリーダーが、スピーカーの男が指定してきた荒野に4つ、大型の機械が放出している大量の放射熱を映し出していた。

「こいつはまさか……。至急外のカメラにこの付近を撮らせろ」

ある事態を思い付いた団長の命令で、町の外部カメラを使ってリーダーに反応が出た辺りを撮影していた団員は、モニターに出てきたカメラの映像を見ると、ほぼ悲鳴に近い声で、しかしハッキリと内容を報告してきた。

「リーダーの反応物体確認！RWのバトリングパペットです！」

報告を受けた団長は、自分の考えが合っていた事を確認すると、そうかと一言声を出してから首に掛けていたインカムを掴み、マイクの部分を口元まで持ってきた。

「全員、さっきの命令変更だ。ロックを見つけたらすぐ出て行かせる。不審者はパペットに乗っている。町を攻撃されない様に下手な刺激は絶対与えるな、要求通りにさせるんだ」

「団長！そんな事したらハンター達が黙っちゃいませんか？」

団長の命令に一人の団員が異を唱えると、団長は正面のメインス

クリーンに映っているパペット達を見つめたまま重苦しく口を開いた。

「ガキ一人のために町を戦火にさらす訳にはいかん。この事は当の本人や他のハンター達も分かってくれるはずだ」

団長の言葉を聞いて、それでもなお何かを言おうとしてきた部下を鋭く睨みつける。それを見て口を閉じたのを確認すると、トカゲの団長は正面に向き直りどっかりと椅子に腰をかけた。この団長、内心ではロックの事をそれなりに気に入ってはいる。そのためこの様な命令を下すしかない自分に苛立ちを感じており、それを指摘されたため部下にあのような態度をとっていた。

「全く、アウトローって奴はいつもこいつも」

緊張の走る自警団のオフィスの中で呟かれた団長の声は、周りの雑音によって瞬く間にかき消されてしまった。

「あん時のガキ、何を言い出すかと思ったらまさか決闘の申し込みだとは。相当ルーフォにやられた事が腹に来ている様だな」

「冗談じゃありませんよ、先にちよっかい出してきたのはあつちだつてのに、完全に逆恨みですよ」

ガレージで放送内容を聞いていたレインは真面目な顔でリュウの宣戦布告を受け取り、ロックは顔に手を当て疲れたといった態度をとって頭を数回横にふった。

「で、どうするんだ。お前の事だから決まっているとは思っけど」
そう言うレインは隣に立っているロックの顔を見ながら、彼が取る行動を訊ねてみた。最もこういう時のロックの行動は十中八九決まっている事をレインは知っているため、すぐに答えを出さないで悩んでいる素振りを見せているロックの様子のおかしさにもすぐに気付いた。

「何だ、らしくねえな。いつもだったら売られたケンカはのしを付けて叩き返してやるって言って、相手のケンカは何でも買っていくのに」

「別にケンカ買うのはいいんですよ。そもその原因はあつちにあるから、僕が断る理由は無いし。それにきっちり決着付けておけば因縁つけられる事も無いでしょうから。ただ、今はこれから宇宙に上がるから、無駄なトラブルは避けてそっちに集中したいんですよ。僕とリカルだけならどうにかなるかも知れませんが、コーラルさん達までトラブルに巻き込みたく無いし」

「ところが、そう簡単に事が運ばない様になつてるんだな。すぐ見つかつて良かった」

二人の話の場に現れた突然の乱入者に振り返ると、そこには茶色の毛並みを持った、垂れ耳のイヌ族が、舌を出しながらハアハアと息を切らしながら立っていた。腕に付けている認識章から、彼がス

テップの自警団の人間だという事はすぐに分かった。話に入ってきた彼は、挨拶もそこそこにとするとすぐにロックの目の前までやって来た。

「ウチの団長からの伝言だな。すぐに外に出てアイツの要求通りにしてほしいそうなんだな」

「え、何でオレ等の勝負事に自警団が関わってくるの？」

「実は……」

「何！RW・パペットが合計4機、町の五キロ手前の荒野で仁王立ちしてるだつて？」

自警団の団員が理由を説明しようとしたその時、彼とほぼ同時に入って来た通信を聞いたレインが、その理由を代弁していた。

『はいっす、ロックの坊主を差し出さなきゃ町も攻撃しかねないとか、とにかくすごい剣幕っす。ギルドは自警団からの依頼でそいつらの襲撃に備える事になったから、レインさんもこっちに来てほしいっす』

インカムからの声に小さく舌打ちを打つと、レインは部下の傭兵に持たせていた装備一式を受け取り、急いでそれらを身体に付け始めた。大変な事に自分が巻き込まれている事を認識すると、ロックは頭を抱えて唸りだした。

「あー、まさかRW持っていたとわな。でそれを使って町を脅すなんて、何考えてんだろ。これから宇宙そらに上がるって大事な時に、これじゃ出るに出れねえじゃん」

「どの道無理なんだな。パペットが出てきた事で町が非常警戒態勢に入って、宇宙港も含めた全ての施設が使用禁止になっているんだな」

自警団員の言葉を聞いたロックは驚いてシッポを鋭く立てていた。確かに町が襲われるかも知れない状況の中で、のんきに宇宙船の発着をする事が出来る訳無い事は分かっているが、初めて宇宙に上がるという一大イベントを控えていたロックにとって、それは寝耳に水のアクシデントであった。そしてそのショックが、今の状況の原

因を作った者に対しての怒りに変わっていくのは、ほんの一瞬であつた。

「ふざけやがってあのウサギ。とことん人に迷惑かけるつもりなら、こつちもマジでやってやろうじゃねえの。じつちゃん、オレの相棒はもう動かせるのか？」

「あん？誰に向かつて言つてやがる。昨日あれから突貫で作業して整備は完全、すぐにでもバトルすること出来るわい」

そう言いながら店主が視線でガレージの奥を指し示す。その方向にはパペット拘束用のハンガーがあり、その中の一つには、整備や装甲板の張り替えが完了してピカピカになっているパペットが一機固定されていた。

高さ10メートルほどの、小型機に分類させるこのパペットは、複数の濃さのグリーン系の色と、装甲のあちこちに引かれている白色のラインで塗装されていた。頭部のパーツは、持ち主のロックと同じネコ族をモチーフにされていて、頭頂部にはネコミミの様な小さな一対のセンサーユニットが付いており、顔にはヒゲ型のアンテナが左右二本ずつ、計四本生えている。全体的に丸みを帯びているボディは、大気内での空気抵抗と物理攻撃に対する防御力の最も良い効率を計算されての作りだ。

ハンガーに止まっているパペットを見ると、ロックは乗って来た自分のチェイサーに駆けより、起動キーを回してエンジンをかけた。浮かびだしたチェイサーでパペットの近くまで乗り付けると、ロックはコマンドを打ち込んで、チェイサーの機体を空に浮かべ出した。ロックが空に浮かぶと同時に、パペットのコックピット部分のハッチが開く。空中でチェイサーの向きを変えると、ロックはチェイサーごとコックピットの中に入っていった。

「ユニットモードチェンジ、アーマー」

コックピット内にチェイサーを格納すると、ロックはチェイサーの操縦グリップについているスイッチを操作し始める。プログラムを受け取ると、レギオンメタルで構成されているチェイサーはその

ボディを変化させていき、ロックの身体をすっぽりと包む黒色のC Aになった。このアーマーモードは、ロック自身普段あまり使う事も無いものだが、確実に勝っておきたいここの一番の状況で自分の身を守るために装備しておく、いわば彼の本気の表れでもあった。シヤープなボディラインのチェイサーから変形したアーマーも、ロックと対比すると大きい、すつきりとまとまった、突起や大きなパーツなどは一切ない物だった。しかし頭には何もついてなく、むき出しのロックの顔にインカム・メットというこの姿には少々釣り合いのとれない様になっているのは、単にロックがきゆうくつなのは嫌だという理由で頭部の装備を外しているためである。

「おい、リープ、起きてるか。起きてたら返事しろ」

コックピットのイスに座ってインカムの周波数をリープ用の通信周波数に変えると、ロックはその場でリープに呼びかけを行った。何回か呼びかけた所で、寝ぼけた人が出す様な間の抜けた声と共にリープが通信に応えてきた。

「うう、ん。ロックか。全くなんだよ、人が気持ちよく寝てたつてのに」

「よし、起きたな。お前のデッカイ方の身体を動かすから、この通信波経由してこつち来てくれ」

「なに、朝っぱらから戦闘かよ。オレお前の組み手の後にリンの機体の整備に付き合つて全然寝てないんだけどよ」

「いいから早く来い。砲弾の雨が降ってきたら、そんな事言つてられねえぞ」

寝ぼけている彼女に声をかけると、ロックはコックピット内に収納されているコンソールパネルやコンピュータディスプレイを引き出し、シッポを大きく振りまわしながら電子機器を操作して機体の操縦プログラムを立ちあげる準備を始めていく。不意にインカムからノイズが聞こえてきたかと思うと、目の前の計器類に光が付きはじめてきた。会話に使っていた電波を使って、リープがパペットのコンピュータに入ってきた時に起きる現象である。

『来たぞー。早い方が良いんだろ？動かす準備、一緒に手伝えよ』
「OK。一分で動かすぞ」

その後二人は、ものすごいスピードで機体の起動準備を行っていた。完了したときにはロックの言っていた一分の三秒前だった。そしてその頃、ロックがパペットに乗り込んでからガレージの職人やその場にいた冒険者達が行っていた、ロックのパペットの出撃準備も出来あがった。ハンガーの固定ユニットが機体から外され、ロックの真上の屋根が開くと、パペットの乗っている地面がせり上がっていき屋根の上に出ていった。

『ハードウェア、ソフトウェア異常なし。パイロット生体認証完了。PRS展開、バーニアセット、稼働準備完了』

「OK。続いて戦闘準備を行う。サイバーリンクシステム起動」

『アイサー。サイバーリンク、搭乗者と機体の神経シナプス接続開始』

ロックの指示を受けリープが作業を受領する。すると同時に何十本ものレーザー光線がロックの身体の上を走っていく。自分の感覚をマシンにつなげる時に起きる、ピリピリとした独特の痛みを感じながら、ロックは自分の感覚とパペットの操作がリンクしていくのを確認していた。

自分の感覚を搭乗しているマシンにつなぐこのシステムは、元々は初心者向けのRB操縦補助が目的だった。しかし使用者の思考に対するマシンの追従性や取り扱いの良さなどが着目されると、その技術はRWにも転用された。様々なタイプの中には、直接機体に神経をつないで完全にヒトとマシンを一つにする様な物もあるそうだが、ロックが使っているのはレーザーで読み取った神経情報を操縦桿経由で機体に伝え、機体からの情報をその逆のプロセスでロックに伝える間接的なリンクスタイルである。

『リンク接続完了、武器の安全装置解除、レーザーショットライフル、シールドブレード、肩部キャノン砲異常無し。最終安全装置解除コード入力頼む』

リープの言葉に、ロックは自分の手を動かす感じで操縦桿を動かす。するとパペットの右手は、彼が考えた通りの動きを自然に行った。リンクが正常に行われた事を確認したロックは、一呼吸置いてからコードの音声入力を行った。

「Running To The Chaser, Wind And Shooting Star!!」
ランニングトゥザチェイサー
ウィンドアンドシューティングスター

『コード確認、認証。武器使用可能、全機能解放完了。いつでも行けるぜ、ロック!』

「打ち上げの準備は出来た、いつでも出ていいぞ」

「オーライ。じっちゃん、金は後でギルドに送っておくから受け取っておいてくれ。エクストリーマー・ロック。エントリーRU、バトリングパペット・ランページキャット。ライド・オン!」

掛け声と同時にロックが操縦桿を倒すと、パペット、ランページキャットは脚を動かして一歩前に進み、機体の脚と腰の部分に装備されているPRSから反応粒子を噴射させた。粒子の力で機体が浮いた所で更に操作を行うと、背面と肩の横についている球状のラウンドバーニアに火が付き、一瞬のうちにそれらから推進用の火が点火されると、次の瞬間ロック達はステップの町の上空に飛び出していた。

『待たせると相手に悪いから、最速で行くぜ』

「おう、ちゃっちゃん片づけて、早く宇宙に昇るぜ」

軽い会話のやり取りの後、機体の飛行速度を上げると、二人はあっという間にステップの町から外に飛び出していた。移動速度が安定してきた時外部からの通信が入ってきたため、ロックは回線を開いて通話モードを取った。通信を送ってきたのは今別れたばかりのレインだった。

『ふう、何とか繋がった。ルーフォ、いい話が出てきたぞ。自警団が不審者とそのパペットに正式に賞金を付けた。一人と一体にそれぞれ一千だ。現在お前しか出ていないから、上手くやりやばる儲けだぞ』

「そりやすごいな、四機撃墜すれば最低でも四千もらえるか。気を使ってくれてんのかな」

『さあな。でも金はいくらあっても困るものじゃねえし、とにかく叩けば出すって言っただから気にしないでやる事やってこい。お駄賃だと思っつてよ……つと。何だあ』

横から誰かに呼ばれたレインが通信をつないだままフェードアウトして十数秒、話に戻ってきた彼の声は、先程と打って変わってとても歯切れの悪いものになっていた。異常を感じたロックがレインに問いただしてみると、彼は観念したかのようにロックに説明を始めた。

『今入ってきた話なんだが、お前の相棒の嫁さん？あの娘がRWファイターの戦闘機に乗って宇宙港から飛び出していったそうだ』

「何だそりや。レインさん、詳しい事は分かりますか」

『何でも宇宙港が使用停止になった事について、原因が無くなれば営業再開出来るじゃないとか言っつて、自分の機体引っ張り出して管制の指示も無視して出て行っつたつて。宇宙港の中が少し混乱したつてさ』

「……いい根性してるぜ、さすがだな」

『ネコ科の種族つてマジで行動力だけはハンパねえよな、お前といいリンちゃんといい。良いコンビになれるよ、二人』

リープの言葉に苦笑いを浮かべると、人の尻拭いはごめんだなと言いながら、ロックは身体を前に屈めるとパペットの速度を更に上げて、リカルも向かったという現場に急行していった。

ステップの町から南に少し行くと、そこには辺り一面草木も生えていない平坦な荒野が存在している。ここは大陸南部の町や村をつなぐ交通ポイントになっており、ステップにも続いている大きな街道の役割もしている。仕事でステップに行く人や他の町に出向く人など、一日に様々な人達がこの荒野を訪れては通り過ぎていく。しかし今は、商隊や制服を着ている人達の乗っているRB、徒歩やRSでこの荒野を越えようとしていた人達が、荒野のそれぞれの入り口付近で立ち往生を受けていた。荒野の真ん中を陣取っている、中型クラスのRW・パペットが原因である。

パペットの数は四機。装備の違う、同じ型の機体が三機と、その三機に良く似ている、リーダーマークのエンブレムを頭に付けた、少し大型の機体で構成されている。そのパペット全てが武器を構えているのだから、ここを通ろうとしていた人達は何もできずに立ち止まっていた。どこの誰が乗っているのか分からないため、迂闊に近寄って返り討ちにあう事を皆恐れているのだ。

「頭ア、本当にそのロックって男来るんですか」

「そいつってハンターなんですよ。こんな果たし状や脅しに乗ってくるのかな」

パペットに乗っているパイロット達が口々に意見をしてくる中、リーダー機に乗っているパイロットは、長い耳をゆっくりと動かしながら、確信のある声で一言、来る、と言い放った。

「理詰めな性格に見えるけど、奴も俺らと同じ戦闘屋だ、匂いでわかる。煽ってやれば出てこない訳が無い。いいかお前ら、奴が出てきたら生身だろうが乗り物乗ってようが、構わねえから遠慮なくぶっ放せ。俺に恥をかかせてくれた事を後悔させてやれ」

脚を組みながらコックピットの座席に座っていたウサギの少年、リュウの命令を聞くと、部下のパイロット達は自分の乗っているパ

ペットの腕を上げて了解の意思を見せる。それを見てリュウは満足そうに頷くと、再びステップの町を監視し始めた。

そんな彼らの上空では、一機の戦闘機^{ファイター}が、彼らのレーダー反応圏よりはるか高所を飛んでいた。黒いカラーリングの戦闘機は太陽の光を受けて鈍い光沢を放っていて、重武装であるこの機体の威圧感を出すには充分であった。

『電波発信源に到着。予告している場所とピタリ一致してるね』

「脅迫しておきながら待ち合わせ場所にはきっちりいるなんて、綺麗なんだか汚いんだか」

戦闘機に搭載している自律型のサポートコンピュータの報告を聞きながら、戦闘機を操縦しているリカルは呆れと感心が半々といった感じで眼下の彼らに評価を下していた。下にいる彼らの果たし合いの放送のせいで宇宙行きを邪魔されたりカルは、ロックが帰ってくるのを待った方が良くと言うコーラル達の意見を押し切り、ロックを待つていられないから自分が代わりにやつつけて来てやる。と船のブリッジで吠ええるとすぐに格納庫に停めていた自分の戦闘機に飛び乗り、宇宙港の管制官の制止を無視して飛び出していった。

このリカルのとにかく無茶苦茶な行動の元となった彼らを見てみると、リカルは段々と真面目に相手をするのがバカらしくなってきたが、飛び出してきたからにはやる事はやってしまおうと気持ちを切り替え、操縦桿を握り直した。

「とりあえず出てきたからには倒しちゃおう。戦闘プログラム起動、一気に叩くから主砲PSのエネルギー^{テラ}を充填しといて」

『コマンド開始、武装解放、Tクラスウェポン・エネルギーチャージ。無茶して出てきた手前、結果を出せなきゃ帰れないものね』

「あー、聞こえない、聞こえない。何言ってるのか全っ然聞こえない」

コンピュータのツツコミに対して、大きな声と頭頂部の丸いライオン耳を倒して声が聞こえない事をアピールしながら、リカルはインカムのスイッチを押して眼部防護用のバイザーを引き出すと、左

手で操縦桿を持ち、右手を機体コンピュータの複合操作機と兼用しているスロットルの上に乗せた。

『主砲準備完了。戦闘用のブースター・プロペラントのエネルギー確保完了。その他の細かい調整も出来たよ』

コンピュータからの準備完了の合図を受け一呼吸置くと、リカルは掛け声と同時にスロットルを開き、操縦桿を傾けて機体を動かした。

「オーライ！リーンカーラ。全領域型戦闘機・コメットランナー、エントリー。ライド・オン、コンバット、GO！！」

勢いよく前進した戦闘機は、いきなり急な角度でターンをしたかと思えば、地表にコースを取って加速を初め出した。地上にいるリユウ達が、上空から高速でやってくる飛翔物に気がついて空を仰いだ時には、すでにリカルの攻撃準備が完了していた。

「先手必勝、奇襲上等！主砲、プラズマストーム、拡散モードでシュート！」

掛け声と同時に操縦桿のトリガーを引くと、機首に取り付けられている小型の砲身の砲口に青白い光が集まりだす。プラズマエネルギーの光が一際強い輝きを放つと同時に、チャージされた大量のエネルギーが一気に砲口から撃ち出された。

プラズマストーム。先史文明で開発された兵器の中において最強クラスの攻撃力を持っている武器である。古い歴史書によれば、元々はとある星で起きた戦争において、宇宙を拠点にしていた技術屋集団が開発した、単独で戦局を変えるための高次元戦闘機の対戦艦戦を前提とした決戦武器として製作された物だと言う。そしてその戦争終結後、性能の高さを見た他の企業達が行った開発競争に置いて更に高性能、高威力のタイプが次々と出現してきた。しかし対戦艦用として生み出されたこの武器は、小型化と威力の両立が中々成り立たず、一撃で全てのチャージエネルギーを撃ち出すその威力のため、質量の大きな戦艦クラスや、砲撃時の衝撃に対抗できる推力

を瞬間で生み出せる戦闘機にしか装備が出来ない物となった。

リカルの機体に装備されているプラズマストームは、対艦能力もさることながら、小型の高機動ターゲット相手にも確実に当てるため、単発の威力を落とした拡散弾を撃ち出す事も出来る様になっている。その拡散弾が今、地面に立っているリユウ達のパペット目がけて光の雨のごとく大量に降り注いで行く。パペットの一機が他の三機の頭上に浮かび上がると、両腕を構えて仲間をかばい出す。そのすぐ瞬間に降り注いだ光の弾は、彼らの立っている地面ごと大地をえぐり取っていった。巻き上がる大量の土煙はリユウ達に覆いかぶさり、彼らの姿を隠してしまう。砲撃を行ったりカルは、上空をゆっくり旋回しながら彼らの様子を伺っていた。舞い上がっていた土煙がゆっくりと散り始めても動きが無く、短い時間が静かに過ぎていった。

「ちよつと拡散しすぎたかな？全然見えなくなっちゃった。倒したのかな」

『マスター、熱源反応確認。動体反応増大、来ます』

コンピュータの声を聞いて、反射的にリカルが操縦桿とスロットルを滑らせその場から飛び出すと、一瞬間前まで自分がいた空間に小型のミサイルとレーザーが飛んで来ていた。更に射撃から一瞬おくれ、回避したりカルを狙い撃つように、土煙の中から高機動戦闘用のマニユーバパックを背負ったパペットがレーザーソードを片手にリカル目がけて飛び込んできた。しかし今の攻撃で、何かが飛んで来る事を予測していたリカルは、スロットルバーのスイッチを操作してからバーを押しこんだ。機体全体の底部に装備されているPRSユニットが淡く光り出すと、そこから放出された粒子がレーザーソードの光粒子ごと向かってきたパペットを吹き飛ばし、リカルはそのまま機体を後ろに滑らせるように後退させていった。

リカルがパペット達から距離を取った頃、彼らを覆っていた土煙も収まっていき、ここでリカルはようやく彼らの姿をハッキリと見る事が出来た。濃い緑色をした頭部に、首から下は装備しているパ

「ツごとに紫、白、赤のカラーリングの同型機が三機、先程リカルに突撃してきた接近戦用の白い機体を先頭に、小型のキャノン砲や電磁銃などの火器を全身に装備している赤い機体と、実体剣を兼用している大型の楯を両腕に装備している紫の機体。その後ろには通信用のインカムアンテナとリーダーマークの入った頭で、背中に大きな飛行用のウイングユニットを装備した、青色に赤いラインでペイントされている他の三機より少し大きな機体が、盾と突撃銃を構えて立っていた。」

「PSで全滅出来なかった？冗談じゃないわよ、いくらこつちがPRS搭載しているからってこの距離でパペットと戦うなんて絶対不利だし、お金がかかりすぎるじゃないの。おまけにあつち機体のバリエーションも多い、識別は出来た？」

『識別完了。フレーム換装型多目的戦闘パペットNV-Sの陸戦モデル“レンジャー”三機と、NV-S上位モデル“ツヴァイ”の重力圏活動型Gフレーム、大気圏内戦闘用Lユニット装備型の計四機。レンジャーはA、B、Cフレーム全タイプが出ているよ』

コンピュータの報告を聞きながら、リカルは機体の姿勢を安定させ、何とか正面の四機に勝つための手段を考えていた。爆発的な推進力による一撃離脱戦を得意とするファイターは、遠距離から攻める場合はパペットの戦闘力を凌駕するが、距離が近いと安定した機動力と操縦の取り回しの良いパペットに軍配が上がる。そのため現状では一旦距離を取らないと、リカルは勝率はかなり低い物となっているのだ。

「くそ、いきなりやってくれやがって。全員無事か？」

リカルは攻撃をしのいだリュウは、機体の受けたダメージをチェックしながら他の機体に乗っているパイロット達に声を送った。彼自身の機体は基本の装甲が厚く、また盾を装備していたため深刻な状況にはなっておらず、戦う事はまだ出来る状態である。

「こちらハク、相手のPRS干渉を受けてエネルギー供給に障害発生しましたが戦闘可能」

「クリムゾン、守ってもらったから無傷でいけるぜ。けどパールが……」

白いフレームと赤いフレームのパペットに乗っているパイロットがそれぞれ状況を確認する中、リュウは操縦桿を操作して紫のフレームのパペットに近づくと、その機体の様子を確かめた

「こちらパール。武装シールド中破、装甲板ダメージレッドレベル。ごめんなさい、戦闘不能です」

「いい、PSの直撃を避けるために俺達の盾になってくれたんだからな。後は俺達でやる、なるべく離れている」

両腕部のシールドが半分無くなり、機体の全体に穴やプラズマの高熱による焼け跡が付いてしまった紫のパペットの前に機体を割り込ませると、右腕に構えていた銃の銃口をリカルに向けた。

「出てくるなり良い挨拶くれるじゃねえか、ロック！ 気に入ったぜ」

通信マイクで喋りながら、パペットの腕と上半身を動かすと言う器用なまねをしながら上空の戦闘機に挨拶をするリュウ。ロックと会話をしている隙にパールの機体を離脱させようとしての試みだったが、スピーカーから聞こえてきた声を聞くと、さすがの彼も驚かずにはいらなかった。

「うるさい！ アンタが変な事してくれたおかげでアタシら全員い迷惑なんだ。ぶっ倒してやるから覚悟しときな」

「なっ、雌オメスだあ。おいこら誰だテメエ、ロックはどうした」

「人の雄オトコを呼びだそうだなんて図々しい真似してんじゃないわよ。ロックが出るまでも無い、アタシが相手してあげるよ」

そこまで話すとリカルは通信を強制的に切った。残されたリュウは予想外の出来事に少しだけ茫然としていたが、すぐに我に返ると目の前のコンソールを平手で軽くバン、と叩いた。

「自分の雌を使いに出すなんて、あの野郎見かけによらず良い性格してるじゃねえか。だったら遠慮はしねえ、クリムゾン、ハク、あの雌をボコボコにして、ロックをおびき寄せる餌にするぞ」

号令と共にリュウは構えていた突撃銃の引き金^{トリガー}を引き、レーザーでリカルを撃ち出した。リカルはPRSをコントロールして機体を垂直に跳ねあげ、そのままバーニアを最大出力にすると一気に前進した。赤いCフレームからの砲撃が真下からリカルを襲い、十発近い数のミサイルが後ろから追いかけてくるなか、彼女は巧みな操縦桿さばきで下からの砲撃を次々と避けていき、距離をとるためこの空域を脱出した。

「甘いですよ」

しかしCフレームの射程距離から脱出したりリカルを待ち構えていたのは、いつの間にか正面に回り込んでいた白いBフレームの機体だった。機体の調子はまだ悪かったが、それを腕でカバーしながら先回りしてきた事に、リカルは敵ながらやる、と感心していた。Bフレームのハクは、今度はやられないようにとコメットランナーより高い位置を取ると、勢いを付けて降下しながら真上から切りつけてきた。

『上からくるよ!』

「主翼フェザーブレードにエネルギー展開、タイミング合わせてPRSクイックターン。操作はアタシがやる」

リカルの指示にコンピュータが応答すると、機体主翼のエッジ部分が淡く光り出した。準備が出来るとリカルは操縦桿を握りしめ、Bフレームに向かって突撃を始めた。突撃してくるリカルを見て、ハクは一瞬動き方を考えたが、初めの通りに剣を構えたままリカルに向かっていた。二機の距離がみるみる詰まる中、Bフレームの剣がコメットランナーの主翼めがけて振り下ろされる。その動きを見ていたリカルは逆噴射をかけて機体の前進を緩めて剣の一撃をかわすと、主翼のフェザーブレードでBフレームの胴体を半分引き裂いた。煙を吹きながら落下していく白い機体に一瞥をくると、リカルは機体の周囲にPRSの粒子エネルギーを展開して慣性制御用のフィールドを作る。そして操縦桿とスロットルを操作するとその場で機体を半回転させ、一瞬のうちに自分の後ろを振り返った。リ

カルはそのまま、追いかけて来ていたミサイルに照準を定めるとトリガーを引き、コメットランナーの機銃で全てのミサイルを落とすていった。

「俺の攻撃を全部避けた！？意外にやるなあのパイロット」

赤い機体に乗っているクリムゾンはリカルに対して素直な感想を述べ、リユウは苦い物を食べた様な顔をしながら長い耳を下に垂らした。

「ハクは脱出したけど機体がダメ、俺とお頭だけじゃ無理なんじゃない？」

状況を見た上での的確なクリムゾンの弱気な発言に、しかしリユウはその声を聞きながらも口の端をつり上げ顔に笑みを浮かべると、垂らしていた耳をピンと立ててからマイクのスイッチを押した。

「正面押しばかりが戦いじゃねえよ。今だクリア、戦闘機をやれ

！」

「……了解」

リユウの機体のコクピットに返答の声が響くと、一瞬遅れて彼らの後ろから光が伸び、リカルの戦闘機を正確に射抜いて行った。

12th ACTION エクストリーマー（リカルの大ピンチ）

追いかけて来ていたミサイルを全て破壊したりカルは、次のターゲットをCフレームに定めるとスロットルバーのボタンを操作しながらコンピュータに次の命令を伝えていた。

「地上の赤い機体を叩くよ。対地用炸裂ミサイルセット」

「マスター、側面から高速で接近してくる物体あり。直撃するよ！」

その声を聞いたりカルがレーダーを見ると同時に機体に大きな衝撃が走った。衝撃でコックピットの中で激しく揺さぶられるリカルの代わりに機体の状態をチェックするコンピュータ。コックピットの中は警告を示す警報が鳴り響いている。

「警報切つて、今のダメージ情報をちょうだい」

『モニターに出します。大丈夫なの』

「何とか無事、まだまだやられないわよ。それでどうなったの」

『圧縮された狙撃用の高出力ビームで機体後部を撃ち抜かれちゃった。飛行は出来るけど戦闘機動が35%落ちたよ』

コンピュータからの報告を聞くと、リカルは小さく舌打ちをする。頭を押さえていた手をすぐにスロットルバーに戻すと慣れた手つきでボタンを操作して、損傷個所にバイパスを通して配線を復旧させ機能が停止した部分は操作系から外していつて、機体の応急修理を行った。

「よしやった、さすがだぜ」

一方リユウの方は、リカルの機体から煙が上がっているのを見ると右手で拳を握って小さくガツポーズを出していた。後ろからのビームを見たクリムゾンはリユウの他にもう一つ通信用の回線を開くと、今この近くにいるであろう相手に話しかけていた。

「伏兵を仕掛けておくなんて、さすが頭だ抜け目がねえな。クリアも相変わらず良い腕しているぜ」

『仕事なら当然だ。それより早くターゲットを押さえろ』

クリアの声に頷くと、リュウは操縦桿を動かしてツヴァイを空中に浮かせると、背中のリフターバーニアを吹かせてリカルに近づき、パペットの手で戦闘機を掴み取るうとした。しかしリカルも黙って捕まるつもりは無く、リュウが寄ってきた所を狙って最大出力で全てのバーニアを吹かせると、そのバックファイアでリュウの機体を吹き飛ばしてから逃げ出した。

「そんなベタな手でやられるもんかよ。食らえや」

吹き飛ばされたリュウはすぐに体勢を立て直すと、銃を構えてレーザーを連射した。回避機動を取りながら逃走を続けているリカルも、先程受けたダメージの影響で動きがぎこちなくなっている。そしてついに、ツヴァイが撃ったレーザーがコメットランナーの底部を擦る様に浅く貫いて行つた。機体に衝撃が走り、一瞬操縦が出来なくなる。その一瞬を逃す事無くリュウはリカルに照準を固定した。

『マスター。ロックオンされちゃった、逃げ切れないよ』

敵からのロックオンを示す警報が鳴り響く中、リカルは小さく舌打ちをすると、いつでも機体を捨てて脱出する事が出来る様にした。リュウは照準の最終確認を行つた後、コメットランナーの主翼を狙って突撃銃のトリガーを引いた。

迫りくるレーザーがコメットランナーの翼を貫こうとしたその刹那、遠方の別の角度から飛んできたレーザーがぶつかり、エネルギー干渉を起こした二条のレーザーはその場で対消滅を起こして消えてしまった。一瞬何が起きたのかこの場にいた者たちは理解が出来なかった。それがどうして起きたのか、それが分かったのは更に一瞬後、空からやって来たパペットが、リカルとリュウ達の間を割って入ってきてからの事だつた。

リカルとリュウ達の間突然割って入ってきたのは、色の濃淡でアクセントを変えている緑に、機体を塗り分けるために引かれている白いラインでペイントされている、頭部パーツにネコの耳状のセンサーとヒゲ型の通信アンテナを装備しているパペットだった。パペットは右腕を横に出してコメットランナーをかばうと、左腕を伸ばしてツヴァイに向かってライフルを構え出した。

「またRWかよ、今度は一体どのどいつだ」

正体不明機に邪魔をされた事にいら立ったリュウがオープンチャネルで通信を送ると、突然現れた機体のパイロットから、彼に対する呆れが取れる声で答えが返ってきた。

「どいつも何も、自分で招待状を送りつけておきながら呼んだ相手の事を忘れるのかよ」

「何い、それじゃお前、ロックか!」

ツヴァイの指でロックの乗って来たパペットを指さすリュウ。呼ばれたロックが自分の右腕を動かして親指で自分を指さすと、ロックの動きを真似てパペットも右腕を動かした。

「その通り。ロック・ラジファスト、呼ばれて飛び出て……」

「よっしゃあ、くたばれやこのネコ野郎」

ロックの言葉が全て終わる前にリュウはパペットを動かすと、ロックに向けて射撃を開始し始めた。いきなりの攻撃に驚いたロックがとつさに避ける事を考えると、ロックとリンクしているランページは、そのロックの反応を即座に読み取って、ロックが考えている通りにレーザーを避けていく。それを見たリュウは動きに変化を付けてきたり射撃の間隔や速度を変えるなどしてロックを攻め込むが、不意打ちから立ち直ったロックの操縦するパペットは、まるで人の様ななめらかな動きをしてリュウの攻撃を全て避けきっていた。

「あのウサギ、こっちが喋り終わるまで待てねえのかよ」

『待てなかつたんじゃねえの、ロツクの事ばかり考えていたからとかで』

「……お呼びとあらば即参上！の方がよかつたか？」

『そこが問題じゃねえだろ、うん』

機体を操縦しながら意味の無い会話をしているロツクとリープ。リュウの攻撃を避けながら、ロツクも手にしているライフルを構えると、リュウの攻撃の合間を突く様に射撃を行った。反撃の度合いは少ないものの、リュウの立ち位置を先読みしているのか的確に彼のツヴァイを捉えており、その結果リュウは攻撃の手を緩めて回避行動を行う回数が増えてきた。

「やべえな頭が押されてきている。おいクリア、もういつぺんお前の銃であのパペットの動きを止めてくれ」

「すまないが無理だ」

リーダーの劣勢を見るやクリムゾンにはクリアにロツクの狙撃を頼んだが、彼から帰って来たのは拒否のメッセージだった。言葉の意味の理解のため一瞬間を置いていたクリムゾンが声を出そうとした時、クリアの通信機から轟音が聞こえてきた。

「さっきの戦闘機のパイロットにこの場所が見つかった、現在戦闘中だ。振り切れたら自力で脱出する。リーダーはそっちに任せる」
伝える事だけ伝えて一方的に通信を切ったクリアは、両手で拳銃を構えると眼前のリカルに向かって発砲した。ロツクがやってきた時、リカルは一度機体ごと戦場から離脱すると、先程狙撃された場所を割り出して、戦場から少し離れた場所にあるこの岩山にやって来た。読み通りそこにはフードを目深にかぶったカムフラージュマントをかぶった人がおり、近くには狙撃用のライフルが銃座に固定されていた。空弾銃を構えたりリカルが物陰から飛び出したとき、いつの間にリカル動きを察知していたのか、クリアはリカルを見ながら拳銃を構え、すかさず発砲してきた。飛び出したりリカルは突然のカウンターに一瞬パニックになったが、飛び出した時のリカルは勢いが強かったため、弾丸は彼女の右腕をかすめて後ろに飛んでい

った。

続けて二発目、三発目の攻撃を受けた時はリカルも冷静さを取り戻しており、すぐに岩陰に隠れると右手で腰の後ろのナイフを引き抜き、岩陰から再び飛び出してクリアめがけて突進していった。それぞれ相手に発砲しては、クリアは弾を避けながら間合いを取ろうとしてリカルから離れ、リカルは弾をナイフではじき飛ばしながら間合いを詰めようとしてクリアに近づいていく。一旦近づくとリカルはナイフと格闘でクリアを攻め込むが、クリアはリカルの攻撃全てを受け流したり避けたりすると、また間合いを取って距離を開けていった。

「私相手にここまで出来るか。正直驚くよ、冒険者」

「こつちも驚きだよ、どんな狙撃者スナイパーにやられたかと思ったら、まさか量産ボデイのメタルマンだったなんてね」

リカルの構えた銃の先にいるのは、背丈がリカルの胸辺りまでしか無い、ジャンク屋や機械パーツ屋などで売られているおもちゃのブロックの様な量産品を組み合わせで作られたメタルマンだった。自分に手傷を負わせた相手に関わらず不敵な笑いを向けるリカルにクリアも礼とばかりに一瞬笑顔をリカルに向けた。しかし文字通りの一瞬の後は、先程の様に無愛想な顔をして鋭い目つきでリカルを睨みつけた。

「まあ相手がだれであれ手は抜かないけどね。アンタらには懸賞金がかかった、捕まえさせてもらっよ」

「つまる所はそれが目的か。しかし、アレらを相手にそれが出来るかな？」

クリアの言葉に眉を動かすと、リカルは彼が自分とは別の方を見ている事に気がついた。続いて聞こえてきた、空を切り裂くようなジェット音にハッと表情を変えると、次の瞬間リカルの頭上を数機のパペットが飛び越えていった。パペットの放つ衝撃波から身を守るため身体を屈めるリカル。パペットが全機通り過ぎて行ったあとリカルが身体を起こすと、先程まで戦っていたクリアもすでに目の

前から消えていた。

「逃げられたか。このタイミングで仲間を呼ぶだなんて」

まんまと逃げられた事を悔しがるリカルだが、先程のパペット達が飛んでいった方向を思い出すとさっと顔色を変えていた。

「あんな数一人でさばけないわよ、ロックが危ないじゃない！」

言うが早いがりカルはその場から駆けだし、自分の戦闘機の置いてある場所まで全速力で向かっていった。

12th ACTION エクストリーマー（B・B）

「おい、おいクリア！任せるって、それが出来りやわざわざお前に救援なんか頼むかよ」

一方的に切られた通信機に怒鳴り声を上げると、クリムゾンはマイクをシートの後ろに放り投げ、空中戦をしているリュウとロックを見ながら舌打ちをした。実はクリムゾンの機体の武器には弾がほとんど残っていないかった。先程のリカルとの戦闘の際にミサイルを八割撃ち尽くしてしまい、キャノン砲の弾も二発しか残って無い。主攻撃用の手持ちレールガンをロックに向けて撃っているが、すばやく飛んでいる相手を地面から狙ってもなかなか当たるものじゃ無かった。

一方空中でロックと撃ちあいをしていたリュウも、知らないうちに冷や汗をかきながら操縦桿を握っていた。不意打ちとはいえ初めは押していた戦いで、リュウはクリムゾンと二人がかりで攻撃をしていたが、ロックは瞬間の反応能力がとにかく高く、リュウの拳動に合わせて攻撃、回避をするどころか彼の行動を先読みしていると思えない攻撃もしてきている。更には普通のパペットが出来無いアクロバティックな動きでリュウ達二人の攻撃を難なくと避けるというレベルの高い操縦で対応すると言う、ロックの操縦スキルとランページの機体性能の高さを物語っていた。

「何であんな避け方が出来るんだ？PRS使われてる上にあんなんじゃ全然当たんねえよ。どんなOS積めばパペットにあんな動きモーションさせられるんだよ」

リュウがロックにてこずっている時、ロックもまたリュウの操縦スキルの高さに舌を巻いていた。指揮官やエース用の強化カスタム機であるツヴァイの性能を充分以上に引きだせるのは並みの乗り手には出来る事では無く、ロック自身もツヴァイをあそこまで扱いこなす自信が無かったからだ。

「上手い奴つてのは、探せばいくらでもいるもんだ。リープ、接近して切り込むからブレードの準備を頼むぜ」

射撃を行いながらリープに指示を出すロック。リープも戦術支援用の自律式AIである自分の本来の役割を果たすべく、ロックの指示に従いながら彼が操縦する機体の運動制御を行っている。戦術支援AIの仕事は、パイロットがマシンのコンピュータを手動入力で操作をしなくて済むよう中継を行う事で、一瞬の操縦のずれをなくす事である。自律型AIのリープは学習能力も持っており、ロックの操縦のクセや考え方なども長い付き合いの中で吸収している。そのためロックの要求する操作を時間差無しに行う事が出来る。更に彼女はランページのマスターOSを兼任しているので、今までの操縦データを元に運動プログラムを変えていくため他のパペットが真似できない様な変則的な動きをする事が出来る。

PRSを併用しながら大きく動いてリュウを攻撃し、その一方で少しずつ間合いを詰めていく。眼前のロックに気を取られているリュウはその事に気付いておらず、下から援護射撃をしているクリムゾンがそれに気付いてリュウに通信を入れた時、ロックが一気に動き出した。構えている盾にエネルギーを纏わせると、それは一瞬で鋭い刃に変わる。足止めに二・三発レーザーを撃つと更にスピードを上げていって右腕を大きく横に振って盾の側面をツヴァイに当てていった。ランページに急接近されたリュウは自分に向かってくる波状攻撃を見ると、斬られるよりはましだと判断して、下に向かって高速で移動していった。その際レーザーがツヴァイのボディを貫いて行ったが、急所に直撃を受けなかったため構う事無く逃げ出した。

『間合いの詰まった状況でああして逃げるか。なかなか面白い奴が乗ってるな』

「でも逃がしやしねえよ。追うぞリープ」

そう言ってロックが操縦桿を傾ける。リンクされているロックの思考が操縦桿を通じてリープに届くと、彼女はロックの考えている

機体操縦に最適な方法を算出して機体のプログラムを動かす。一連の行動は瞬間にとり行われ、ロックのランページャットはまるで弾丸の様な速さでリュウのツヴァイを追いかけ出した。上空から地面向けての加速落下、リュウは地面寸前でバーニアの逆噴射をかけ機体の姿勢を整えるとリフターユニットのエンジンを全開にして地表すれすれを飛んでいく。ロックは機体の各所に装備されているPRSを展開させると粒子の膜で全身を包み込み、そのまま力場を反転させて頭部から下に落ちていた機体を元に戻し、脚部の展開力を強くして空間の粒子に乗ると、ほとんどノンストップで方向転換を行ってツヴァイを追い直した。自分を必死に追ってくるロック。それをモニターで確認すると、リュウは口の端を持ち上げ、肩を震わせて笑っていた。そして追いつかれそうになり、ロックが盾を振りかざしたその時、早技のごとくパツとリュウの姿がロックの前から消え、代わりに目の前には深紅の機体がどっしりと待ち構えていた。

「今だクリムゾン、叩け」

「うおりゃああ、たらふく食いやがれ！」

一瞬で上空に逃げたリュウの指示でクリムゾンが残っていたミサイルをロックに全弾打ちこんできた。リュウの誘いに乗って追いかけていたロックは、ミサイルに正面から突っ込む形になってしまった。

「やべっ、リープ！」

『ロックオンされた、回避不能』

「だったら切り抜ける、ミサイルをロックオンしろ」

『もうやってある、迎撃するぜ！』

飛び込んだロックが指示をするより早くリープが反応していて、左手のライフルと頭部に装備されている小型のガトリング砲でミサイルを次々と撃破していく。爆発していくミサイルが視界を遮る中、最後のミサイルを破壊して爆風の中から飛び出したロックとリープの目の前には、肩に担いだキャノン砲を構えているCフレームの姿があった。

「終わりだ、吹き飛ばやあー！」

『ロック、向こうの方が早えぞ！どうする』

「ちよつと荒いけどしつかり機体を動かせよ。オラァ！タイマンじゃ負け無しだぜ、かかってきやがれ！！」

ロックが吠えると同時にCフレームのキャノン砲から弾丸が発射される。両手の武器をすばやく機体に収納すると、ロックは空いた両腕の手の平を前に突き出した。目の前に弾丸が迫っている時に行われたその行動にその場にいた全員、リープでさえもロックのしようとしている事が理解できなかった。その全員が当たる！と思ったその瞬間、キャノン弾が命中した時の轟音は聞こえる事が無かった。そしてクリムゾンの目の前には、先程までこちらに向かつてやって来ていたランページの姿がどこにも映っていないかった。慌てて探すクリムゾンにリュウが上だ！と声をかけクリムゾンがその方向を見ると、新体操競技をしている所を真下から見上げた時の様な回転をしながら自分の頭上を越えていくランページの姿があった。ロックは腕にPRSの粒子を展開させると、砲弾が当たる直前にそれを凝縮、砲弾を爆発させる事無く掴み取り、砲弾の勢いを活かしたまま機体を上にあげると跳び箱を飛ぶかのようにしてCフレームの上部を飛び越えていったのだ。

「……ウソだろ？」

このとんでもない避けられ方を見て、呆氣にとられたクリムゾンは何もできずに立ち尽くしていた。その一瞬が、ロックに行動を起こさせるのに十分な時間となった。受け止めた砲弾を持ち直すと、ロックはその弾をクリムゾンの肩、ミサイルの発射ユニットに合わせ上から落とした。

「ごめんな」

ロックの声と共に落ちた砲弾はCフレームの肩の部分で炸裂、機体を誘爆させて最後に大爆発を起こした。その爆発した機体からはクリアと同じ姿の量産型のメタルマンがあらぬ方向に向かって吹き飛ばされていた。

「かしらー、すまねえー、ここまでだぁー」

「クリムゾンまでやられたか、畜生が」

ロックに撃墜されたCフレームの残骸を見ながら、リュウはコックピットのコンソールを叩くと苦々しげに言葉を吐き出した。

「でっかくケンカを売っておきながら、もう出し物は終わりか？
だったらとつとと決着付けさせてもらうぜ。これから宇宙に上がるんだからよ」

そう言うのとロックはランページの腕を器用に動かしてピットとリュウを指さす。しかしリュウの方は追い込まれた状況であるにもかかわらず、その態度には少しも変化が見られなかった。

「随分余裕を持ってるな、何をたくらんでいるんだ？」

通信を切っているロックが呟いた時、唐突にリュウはツヴァイの腕を空に高く突き上げた。何事かとロックが上空を見ると、いつの間に見れたのか、たくさんのパペットがツヴァイの上に陣取って武器を構えていた。

『今度は団体さんだ！全く次から次へと大盤振る舞いだな、うんざりするぜ。どうするロック、あの数はさすがにきついぞ』

やって来たおよそ十数機のパペットを見ながらリープがロックに聞いてくる。ロックは少しだけ考えた後、操縦桿を握り直した。

「仕掛けを使う、リープ、操縦系統をお前に預ける」

『あれか。分かったしばらくシフトを変更する。ロックは攻撃に専念してくれ』

二人で打ち合わせを終わらせると、ロックは操縦桿を握りながら意識をモニター越しにこの周囲一体の空間に向けて集中し始めた。動きの止まったランページを見たリュウは、自分達の戦力を見てロックが諦めたのだとほくそ笑んでいた。その笑いが狼狽に変わったのは、ロックに向かってリュウが仲間達に号令を下そうとしたその時だった。

『ロック、やっこさん達攻撃態勢に入って動きが止まったぞ』

「狙い通りだな、それじゃ早速……、ファイヤー！」

意識を別々の方向に飛ばしていたロックが目細めて気合を込めると、突然何もない空間からプラズマを収束させたビームがリュウの一团目がけて飛んできた。直前にそれに気付いたリュウとその仲間たちは、ロックへの攻撃を中断してその場から離れたが、反応の遅れた機体が三機、腕や頭部などに攻撃を受け落とされていた。

『お頭、今のは！』

「ビット兵器か！ふざけやがって、全機を散らばらせる！固まってるよになるぞ！」

リュウの号令で残りのパペット達は一斉にその場からバラバラになつて動き出し、ランページ目がけて手に持っている武器で攻撃を行う。

『来たな、狙いは良いけど、そんな軌道の弾じゃオレの装甲をか
はだ
することすら出来ねえよ』

飛んでくる弾にリープが一言感想を述べると、彼女はすぐさまパペットのボディを動かして回避運動を取る。ロックのサポートをしているだけあつてその操縦は彼の物に似ているが、その一方でロックの操縦よりも挙動が鋭く、まさしくコンピュータの様な動かし方になっていた。それを見て、先程と若干の動きの変化にリュウは当惑を覚えた。その隙についてロックは、サイバリンクシステムで自分の思考と繋げている小型の無人攻撃ビットでリュウ達に攻撃を加えていく。違和感を感じながらもリュウはしっかりと攻撃を避けるため、ツヴァイにダメージを与える事は出来なかったが、その分他の機体を攻撃しては着実に相手の戦闘力を削いで行く。機動、防御、攻撃。それぞれをその状況に応じて二人で分担しながら戦っていく、それがロックのRWのライディングスタイルだった。高速で空を飛び交う複数のRW。攻撃をする者、避ける者、弾に撃ち抜かれて大地に落ちて行く者。様々な戦う操り人形達の織りなす閃光と轟音の舞台がその空間いっぱい開幕されていた。

『BB、最後の一発だ』

「もうか？全機落とさせなかったとは、なかなかやるじゃねえか

面白い。リープ、撃つたらずぐ戻すから機体を上昇させてくれ」

そう言うのとロックはもう一度意識を集中させると、目の前のパペット達を牽制するように広い範囲にビームを撃ち込んだ。リユウ達が脚を止めたその瞬間をねらってリープは機体を急上昇させ、ロックは弾を撃ち尽くしたビットをランページに呼びもどした。十二基の球状ビットスファイアを機体に接続すると、ビットはそのまま背中と肩の部分にむき出しのまま固定される。動きを止められたリユウ達がロックに向かって再度攻撃を仕掛ける。機体に向かって弾丸が飛んでくる事を感じたセンサーが警告音を発するのを聞くと、ロックは握っていた操縦桿をすばやく引いてスロットルを吹かした。すると機体に収納されたスファイア・ビットが収納されたままそれぞれの向きを向くと、ビームの発射口から推進剤のバックファイアが吹き上がり、次の瞬間、ランページは先程と比べて段違いの瞬発力でリユウ達の攻撃を避けて行った。

突然の速度変更に一瞬全員が追い付けなくなったその隙を突いてパペットの集団に突撃をしてきたロックは、シールドブレードを構えると一番近いパペットを縦から切り裂いた。頭部からボディ上部まで斬られたパペットは、動く力を無くした人形の様に姿勢を崩しながら落ちて行く。パペットを一体倒すと、そのまま左手に構えているライフルを乱射しながらその場を離れた。致命傷を与える事は無かったが、それでも確実にダメージを与える事はできた。そのまま距離をとるため離れて行くランページにパペット部隊が攻撃を仕掛ける。ロックが操縦しながら意識を再度集中させると、ランページの背部に装着されたラウンドバーニアの数基が機能を止め、噴射口にプラズマエネルギーが収束されると、先程のビームが後ろに向かって飛び出した。完全な不意打ちとなったこの攻撃は、かなりの数のパペットに被害を与え、数機の機体を撃墜する事になった。

「何だあの武器？ラウンドバーニア型のビット？それともスファイアビット型のバーニアか？コンピュータ、あの武器について検索開始しろ」

リウウはツヴァイのコンピュータを使ってランページの使っていた武器を調べ始める。膨大なデータの海の中から検索内容の武器を探し当てると、ツヴァイのモニターの一角に武器のデータが表示された。

『検索結果：ブーストビット。支援砲撃デバイスであるビット・サテライトに機動面での補助性能を持たせる事をコンセプトに開発された武装。スフィアビットにラウンドバーニアの機能を持たせたもので、サテライト展開時は多角面の攻撃を行い、機体収納時にはラウンドバーニアのアクティブノズルによる柔軟な機動力を引き出す』

「高速移動、回避、死角からの攻撃、要は厄介な武器か。フォーメーション、連携で追い込むぞ」

リウウからの指揮を受けると、パペット達は次々と陣形を整え始める。距離を取ったランページが振りかえると、恐るべき速さで陣形を組んだリウウ達が、武器を構えてロックの方を見ていた。しかし彼らが動き始めようとしたその瞬間、突然背後から機銃の弾丸が飛んできて、パペットの一機に直撃。飛行用のブースターが火を吹きながら機体が落ちて行き、突然の事に対応するため、リウウは一度陣形を崩す事を余儀なくされた。

「そつちだけで盛り上がったって。こつちも忘れてもらっちゃ困るわよ」

広域通信波に声をのせながら後ろからやってきたのは、クリアを狙撃ポイントから撤退させたリカルだった。自分の戦闘機に乗って再び戦闘空域に戻ってきた彼女は、増援で現れたリウウの部隊に不意打ちを仕掛け、更に浮足立った彼らに追撃をかけながらロックとの合流を果たした。

『良かった、まだ無事だったみたいね』

「ニヤンだ、心配してくれてたнка。優しいところがあるんだね」
『たくさん数が来たからって、オレ達がそう簡単にやられるかよってんだ』

『何だかね。心配するだけ無駄だったかな』

「そんな事ねえよ。ありがとな」

モニター通信で、ロックは親指を立てると笑顔でリカルに礼を言う。モニターに映る彼を見て、リカルは少し顔を赤くすると、首をぶるぶると軽く振るとそんな顔反則だと軽くこぼしながらモニターをカットした。

「ケツ。おうお前ら、出てくるなりいちゃついてんじゃねえぞ」

「だれもいちゃついてなんかいいえよ。何をみてるんだ？」

「そうよそうよ。羨ましかったらアンタも誰かといちゃついてみなさいよ」

「うるせえ、こんな時にみせつけやがって緊張感の欠片もねえ奴らにぐだぐだ言われたくねえよ。やっぱり思い知らせてやらねえとな」

「ははっ。今のお前にそんな事出来るのか」

リュウが吠え、ツヴァイが武器を構えるが、今度はロックが小馬鹿にした様な口調でリュウに声をかける。それを聞いた彼が反論してくる前に、ロックは次の言葉を口に出して彼の言葉を制した。

「お前のチームのパペットはオレ達が大半落としてやった。この状況で勝とうとしてもきついんじゃないか？」

「大人しく負けを認めて捕まりな。それがアンタらのためになるわよ」

ロックとリカルの二人に諭されるリュウ。彼らのチームのパペット達の動きが止まり、リュウがついに観念したのかと二人はモニターで互いの顔を見た。しかしリュウは、他の機体には受信できないほどの圧縮された暗号通信を光である場所に送るために機体の動きを止めていただけだった。暗号の内容は『最終作戦実行』。

その暗号通信が発信されてから、ステップの町の方角から轟音が聞こえ煙が見えたのはすぐの事だった。

12th ACTION エクストリーマー（宇宙港の中で）

交易都市ステップ…… ロックとリカルが飛び出して行った後。

突然の決闘騒ぎに町中が騒然となり、宇宙港は緊急事態のため事態收拾がつくまで船舶の離着陸を一時禁止とした。トラメイ唯一のこの宇宙港閉鎖は、町の人間だけではなく惑星の内外の人間全ての生活、商業に多大な影響を与えていた。そして封鎖によって直接影響を受けた者、宇宙船の乗組員たちは自分の船の中や宇宙港の施設で時間をつぶしていた。と言うよりはそれしかする事が無かったためと言うのが本音であった。

そんな中の宇宙港で、ロビーの一角にある立ち食いのスタンド食堂の中に、大人に混ざって三人のネコ族の子供達が食事を摂っていた。一番小さな女の子は不機嫌さを絵に描いたような表情で、一人ソフトクリームを舐めており、彼女の隣に立っている彼女の姉であるもう一人の少女はそんな彼女を見ながら小さく肩をすくめると、食後の緑茶を飲んでいた。その隣にいる、少女と同じ年の少年はそんな事を全く気にした様子も無く、大盛りで頼んだ天ぷらそばを生懸命食べていた。

「プラム、いい加減その顔は止めなさい」

妹の態度にたまりかねたのか、お茶を飲みきってから一息つくと、パーラは隣のプラムを軽く睨みつけて声を出した。

「せっかくおごつてもらったのにそんな不機嫌な顔をして、そんなじゃ招待してくれた人に失礼でしょ」

パーラの声に反応すると、プラムは姉の顔をちらりと一瞥し、そのまま先程と同じ姿勢で再びソフトクリームを舐めはじめた。

「別にオイラはそんな事気にしないけど？理由も大体分かってるから」

「黙ってて」

隣で小声でプラムを叱っているパーラに、エトが話題を変えさせ

ようと声をかけるが逆にパーラに一喝されてしまった。あまりの声の鋭さに一瞬間喰ったエトをしり目にすると、パーラはプラムの方を見た。

「私はこういう事がくせになると困るから言っているの。プラム、他の場所でもそんな顔してたら人から嫌われるわよ」

「……だって面白くないんだもん」

パーラに叱られたプラムは、イスから下に垂らしていたシツポを左右に振り不機嫌さをアピールしながらとげのある声で返事をしてきた。それに合わせてプラムの食のスピードのペースが段々と加速して行き、まだ半分もあつたソフトクリームを一気に食べつくしてしまった。

「せっかくロックの兄ちゃんの宇宙船が飛んでいくつてのに、変なのがやってきて港は封鎖。兄ちゃんも飛び出していつてそれっきり、他の船も全然入ってこないで一つも面白い事が無いんだもの。早く封鎖が解けてほしいよー」

「だからロックさんが今がんばっているんじゃない、自分の都合ばかりでモノ言っても仕方ないでしょ。パペットで戦う事がどれだけ危ない事がプラムだつて知っているはずよね？あなたは一生懸命に戦っているロックさんにそんなこと言えるの？」

現状に対して愚痴をこぼしていたプラムだったが、パーラに説教をされるとさすがに自分の言っている事が一方的すぎると感じたのか、パーラとエトの方から顔を背けるとバツが悪そうにネコ耳をパタパタと動かし始めた。それを見ていたパーラとエトは、それぞれ顔を見合わせると彼女の行動に苦笑いをしていた。

その瞬間、すさまじい轟音と衝撃が建物全体を襲った。店の中にいた人達はバランスを崩して転倒する。揺れる前からカウンターに掴まっていたプラムとパーラは転倒することは無かったがバランスを崩してこけてしまい、カウンターの下に倒れてしまった。揺れが収まった所でパーラが立ち上がると、隣に立っていたエトがシツポを膨らませながら顔を抑えて悲鳴を上げていた。突然の事に驚いた

パーラがエトの身体に手をかけると、彼の頭部が濡れている事に気付いた。持っていたハンカチで濡れた彼の髪をふいていると、エトの方も発作が収まっていた。

「大丈夫エトちゃん。一体どうしたの」

顔を押さえていた手を離して頭を振ると、エトはパーラからハンカチをひったくり、自分の顔をふきだしうめくような声を出した。

「どんぶりに顔から突っ込みまっけて、熱々のソバの汁をまともにかぶっちゃまったあ」

「あ、あはは。とりあえず大丈夫そうね」

そう言いながらパーラはエトの顔についているソバの切れ端を取ってあげた。だが、もう一度続けて建物が大きく揺れた時、どこにも掴まっていなかったパーラはその振動によって弾き飛ばされ、カウンターの身体を叩きつけられた。一瞬目をつぶって痛みに耐えようと構えていたが、思ったほど痛みを感じない。目を開けてカウンターの方を振り返ると、そこにはいつの間にか隣にいたエトがパーラとカウンターの間に割って入り、彼女のクッションになっていた。

「お姉ちゃん、エト、大丈夫？」

「こっちは何ともない、痛くて……。パーラはどうだ？」

「あ、私も大丈夫、ありがとうエトちゃん。でも今の揺れって何？地震とは違うみたいだけど」

パーラの言葉にひよっとしてエトの頭の中にある考えが浮かぶ。その瞬間宇宙港全体に流れる警報を聞いて、いよいよ自分の考えが現実味を帯びてきた事を悟ると、エトはパーラを立たせ、彼女達二人の手を強く握りしめた。

『緊急警報、緊急警報。現在宇宙港で緊急事態が発生、港内にいる人達は係員の指示に従って最寄りのシェルターに避難を行ってください。繰り返します……』

「え、何、一体どうしたの？」

「やっぱり外で何か起きてる！さっきの衝撃も外からのものだったし。まさか……」

考えうる最悪の事態を思い浮かべると、エトはその続きの言葉を発せず口の中に呑みこんだ。急に黙りこんだ彼を見て、パーラとプラムが心配そうにエトの顔を覗き込む。と、数泊遅れて彼の持つている携帯端末から着信音が流れ出す。ギルドが使っている専用の端末で、表向きはステップから出向してオーシャンガレージの村に常駐している傭兵と言う事になっているエトにレインが持たせたものである。特殊な通信回線を使っているこれは、緊急時においても連絡が取れない様な事はまずないからである。エトが通信に出ると、連絡の主は予想通りレインからのものであった。

『おうエト、すまないがパーラとプラムは一緒にいるか？』

「いますよ二人ともオイラの目の前に。一体何が起きたんすか？」

『外から砲撃を受けている！今のは威嚇みたいだが、この次からはどうなるか分からねえ！』

砲撃と聞いて思った通りの事が起きている事を知ったエトは、何も知らない人込みの中で迂闊な事をしゃべれば即パニックが起きる事を考慮して、具体的な言葉を使わずレインに返事をした。

『これから俺は部下を連れて砲撃元を叩きに行く。お前も手伝ってくれないか』

「良いですけどこれからそちに合流するんすか？」

『いや、そのままそこに残って宇宙港の守備隊と港を守ってくれ。そこがつぶれたらどれだけの人が被害にあうか分からんからな。それじゃ頼むが、もう行くからこのまま切るぞ、二人にはちゃんと避難するよう伝えてくれ』

そう言っただけの用事を言い終えたレインはそのままエトの返答を聞かずに通信機の電源を切った。急を要する事を判断したエトは、隣の二人にレインが言っていた事を伝えて、シエルターに避難するように言い聞かせた。

「攻撃されてるってホント？お父ちゃん達大丈夫なの？」

「大丈夫だから連絡してきたんだろ。とにかく二人はすぐに避難しろ。オイラは仕事で一緒に行けないけどスタッフの指示に従って

行けば大丈夫だからな。それじゃ」

「あ、エトちゃん、あれは！」

二人と別れようとしていたエトをパーラが呼びとめる。一瞬動きを止めたエトは彼女の言いたい事に気付くと、首から下げていた指輪のネックレスの一つを外すと、それをパーラに差し出した。

「ほれいつもの。でもパーラも変わってるよな、形見分けでもあるまいに」

「良いでしょうでも、預かっておいてあげるから、ちゃんと取りに戻って来てよ」

エトから銀色の指輪を受け取ると、パーラは一際元気な声を出してエトを送りだし、自分もプラムを連れて避難をしている人達列に入ってしまった。彼女達が避難をしていた事を確認すると、エトは向きを変えて避難をする人達と反対の方向に向かって走り出した。（しかしパーラにも困ったよな。親の形見を無くしちゃ困るから前に一度だけ預けたら、オイラが仕事に行くたびに貸せって言うんだから）

預けたのは間違っていたかな？そう考えながらエトは作業員用の緊急通路に入ると、物凄い勢いで宇宙港の管制室に向かって走っていった。片手に、無意識のうちに首に掛けているもう一つの形見の金色の指輪を握りしめながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1316m/>

F / A フリーダムアドベンチャー 第三話 ここから飛び出そう！！

2011年11月8日20時11分発行